生田遺跡第８次発掘調査報告書

２０１６年

神戸市教育委員会

序

本書は、神戸一の繁華街である三宮、生田神社界隈に立地する生田遺跡での発掘調査の成果について報告するものです。

今回の調査地は、明治時代、北野異人館街と外国人居留地とを結ぶ三宮の南北のメインロードであるトアロードに面し、多くの人々が行き交った場所です。調査では、縄文時代から明治時代に至る様々な遺構・遺物の発見があり、とくに奈良時代から平安時代にかけての多数の掘立柱建物をはじめ、土坑や井戸などが発見されました。現代では多くのビルが建ちならび、往時の面影はありませんが、海岸線を見晴らす高台に人々が住まいをした、その一部が明らかになりました。

この地では、縄文時代後期から人々が生活を始めたことが近年の調査で明らかになっており、神戸市内でも古くから拓けた地域でした。早くから市街地化が進んだ地域ですが、今回の調査地のように良好な状態で地中に保存された遺構・遺物が、付近には未だ多く残されているものと思われます。地域の歴史はもとより、神戸の歴史を考える上で重要なものであり、今回の調査の成果が活かされますことを願っております。

現地における発掘調査事業の円滑な推進、ならびに調査成果の報告の機会を頂きました事業主、関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

２０１６年３月
神戸市教育委員会

例言

1．本書は、神戸市中央区中山手通３丁目７番42号において実施した生田遺跡第８次発掘調査についての報告である。
2．現地での調査は、平成26年10月から平成27年３月にかけて神戸市教育委員会が和田興産株式会社の依頼を受けて実施したものである。
3．遺物整理、報告書作成作業は平成27年度に神戸市埋蔵文化財センターで実施した。全体図の作成を纐纈文佳が実施し、遺物実測、図面トレース、編集作業を藤井太郎が行った。
4．本書に掲載した位置図には、国土地理院発行の25,000分の１地形図の「神戸首部」、神戸市発行の2,500分の１地形図の「三宮」を使用した。「まとめ」項に使用した地図は国土地理院の基盤地図情報（５ｍメッシュ標高）をもとにカシミール３Ｄにより作成し、編集を行ったものである。
5．本書で使用した方位は座標北で、その座標は世界測地系の平面直角座標系第Ｖ系である。標高は東京湾中等潮位（T.P.）で表示した。
6．動物遺存体については東海大学 丸山真史氏からご指導を頂き、玉稿を賜りました。記して深謝いたします。
7．古環境調査については株式会社古環境研究所、木材の樹種調査については古代の森研究舎に委託した。
8．現地での遺構検出状況等の写真撮影は調査担当者が行った。出土遺物の写真撮影は神戸市埋蔵文化財センターにおいて杉本和樹氏（西大寺フォト）が撮影した。
9．本書に係る出土遺物及び図面・写真等の記録類は神戸市埋蔵文化財センターにおいて保管している。
10．現地での調査及びに本書の作成にあたっては下記の方々にご協力いただきました。記して深謝いたします。
和田興産株式会社　安西工業株式会社
11．発掘調査及び報告書作成事業は神戸市文化財保護審議会の指導のもと、以下の組織で実施した。

神戸市文化財保護審議会委員（史跡・考古資料担当）			
工樂 善通　大阪府立狭山池博物館長（～平成27年７月14日まで）			
黒崎 直　大阪府立弥生文化博物館館長（平成27年７月15日から～）			
菱田 哲郎　京都府立大学教授			
教育委員会事務局			
平成26年度（現地調査）		平成27年度（遺物整理・報告書作成）	
教育長	雪村 新之助	教育長	雪村 新之助
社会教育部長	東野 展也	社会教育部長	東野 展也
文化財担当部長 （文化財課長事務取扱）	安達 宏二	文化財課長	千種 浩
		文化財専門役	丸山 潔
埋蔵文化財担当課長 （埋蔵文化財係長事務取扱）	千種 浩	埋蔵文化財係長	前田 佳久
		埋蔵文化財担当係長	安田 滋 斎木 巌 松林 宏典
文化財専門役	丸山 潔		
埋蔵文化財担当係長	前田 佳久 安田 滋 斎木 巌	事務担当学芸員	山口 英正
		報告書作成担当学芸員	藤井 太郎 纐纈 文佳
事務担当学芸員	山口 英正		
調査担当学芸員	藤井 太郎 纐纈 文佳	整理担当学芸員	佐伯 二郎 中谷 正

目次

序
例言
目次
Ⅰ．生田遺跡と調査の概要 …… 1
Ⅱ．検出遺構と遺物 …… 9
（1）縄文時代の遺構・遺物 …… 9
（2）弥生時代の遺構・遺物 …… 12
（3）古墳時代の遺構・遺物 …… 15
（4）古代の遺構・遺物 …… 18
（5）中世～近代の耕作痕について …… 46
（6）中世末～近世の遺構・遺物 …… 47
（7）近代の遺構・遺物 …… 51
Ⅲ．植物珪酸体（プラント・オパール）分析　（株式会社古環境研究所） …… 53
Ⅳ．木製品と加工材の樹種　吉川純子（古代の森研究舎） …… 59
Ⅴ．生田遺跡出土の動物遺存体　丸山真史（東海大学海洋学部） …… 64
Ⅵ．まとめ …… 66
（1）検出遺構について …… 66
（2）中世末の大溝SD09について …… 70
（3）六甲山南麓の古代の遺跡について …… 72

報告書抄録

図版目次

第１図　調査地及び既往調査地位置図 …… 1
第２図　調査区区割図 …… 2
第３図　調査地位置図（明治18年測量仮製図） …… 3
第４図　周辺の遺跡 …… 5
第５図　調査区平面図及び遺構配置図 …… 6
第６図　調査区基本土層図 …… 8
第７図　SK06平・断面図 …… 9
第８図　SK06及び旧耕土層など出土の縄文土器 …… 10
第９図　SX02平面図 …… 11
第10図　SX02出土遺物 …… 11
第11図　石刀実測図 …… 11
第12図　SD04 ～ 08平・断面図 …… 13
第13図　SD04出土遺物 …… 13
第14図　SK03 ～ 05平面図 …… 14
第15図　SK04出土遺物 …… 14
第16図　出土石器実測図 …… 14
第17図　SB01・02平・断面図 …… 15
第18図　SB01・02及びSD02出土遺物 …… 16
第19図　SD02・03及びPit392平・断面図 …… 17
第20図　Pit392出土遺物 …… 17
第21図　旧耕土層出土紡錘車実測図 …… 17
第22図　SB03平・断面図及び出土遺物 …… 18
第23図　SB04平・断面図及び出土遺物 …… 19
第24図　SB05出土遺物 …… 19
第25図　SB05平・断面図 …… 20
第26図　SB06平・断面図及び出土遺物 …… 21
第27図　SB07平・断面図及び出土遺物 …… 22
第28図　SB08平・断面図及び出土遺物 …… 22
第29図　SB09平・断面図及び出土遺物 …… 23
第30図　SB10平・断面図及び出土遺物 …… 24
第31図　SB11平・断面図 …… 25
第32図　SB11出土遺物 …… 25
第33図　SB12平・断面図 …… 26
第34図　SB12出土遺物 …… 26
第35図　旧耕土層出土巡方実測図 …… 26
第36図　SK07平・断面図 …… 27
第37図　SK07出土遺物 …… 28
第38図　SK08平・断面図 …… 29
第39図　SK08出土遺物 …… 29
第40図　SK203平面図 …… 30
第41図　SK203出土遺物 …… 30
第42図　SE01井戸側模式図 …… 31
第43図　SE01平・断面図 …… 32
第44図　SE01出土遺物 …… 34
第45図　SE01出土井戸側材１（隅柱） …… 35
第46図　SE01出土井戸側材２（横桟・南辺縦板）及び加工木 …… 36
第47図　SE01出土井戸側材３（南辺及び東辺縦板） …… 37
第48図　SE01出土井戸側材４（北辺縦板） …… 38
第49図　SE01出土井戸側材５（西辺縦板） …… 39
第50図　SE01出土井戸側材６（西辺縦板）及び木製品 …… 40
第51図　SE02平・断面図 …… 42
第52図　SE02出土遺物 …… 42
第53図　SE02井戸側模式図 …… 42
第54図　SE02出土井戸側材１（隅柱・横桟及び南辺・東辺縦板） …… 43
第55図　SE02出土井戸側材２（東辺・北辺・西辺縦板）及び板材 …… 44
第56図　SE03平・断面図 …… 45
第57図　SE03出土遺物 …… 45
第58図　古代末～近代耕作痕平面図 …… 46
第59図　SD09平面図（最下層・上層石組み溝） …… 47
第60図　SD09最下層石組み平・断面図 …… 48
第61図　SD09出土遺物 …… 49
第62図　SD09上層石組み溝平・断面図 …… 50
第63図　明治時代遺構平面図 …… 51
第64図　明治時代の遺構 …… 52
第65図　土壌サンプル採取位置図 …… 53
第66図　植物珪酸体分析結果（おもな分類群） …… 58
第67図　井戸構築材樹種分布 …… 62
第68図　第４・８次調査地遺構変遷図 …… 67
第69図　大溝位置図 …… 71
第70図　六甲山南麓の主な古代の遺跡 …… 72

挿図写真目次

挿図写真１　調査地遠景（市章山より） …… 1
挿図写真２　調査地周辺（トアロード） …… 1
挿図写真３　調査作業風景及び現地説明会の様子 …… 3
挿図写真４　SK06遺物出土状況（北から） …… 9
挿図写真５　SK06土層断面（北から） …… 9
挿図写真６　SX02検出状況（南西から） …… 11
挿図写真７　石刀出土状況（南から） …… 11
挿図写真８　SD04遺物出土状況（北から） …… 13
挿図写真９　Pit392遺物出土状況（南から） …… 17
挿図写真10　SB05柱穴検出状況 …… 20
挿図写真11　SB10柱穴検出状況 …… 24
挿図写真12　SB11検出作業風景 …… 25
挿図写真13　旧耕土層出土巡方 …… 26
挿図写真14　SK203及びSK205検出状況 …… 30
挿図写真15　内側桟の外隅柱への結合状況 …… 41
挿図写真16　SE02曲物検出状況（南から） …… 42
挿図写真17　SE03検出状況（東から）（上：石の検出状況　下：曲物） 45
挿図写真18　SD09上層石組み溝検出状況（南から） …… 50
挿図写真19　SD09上層石組み溝土層断面（南から） …… 50
挿図写真20　明治時代の遺構 …… 51
挿図写真21　土壌サンプル採取位置 …… 53
挿図写真22　植物珪酸体（プラント・オパール） …… 57
挿図写真23　出土木製品の顕微鏡写真 …… 63
挿図写真24　出土骨片 …… 65
挿図写真25　花隈公園より調査地を望む …… 71

表目次

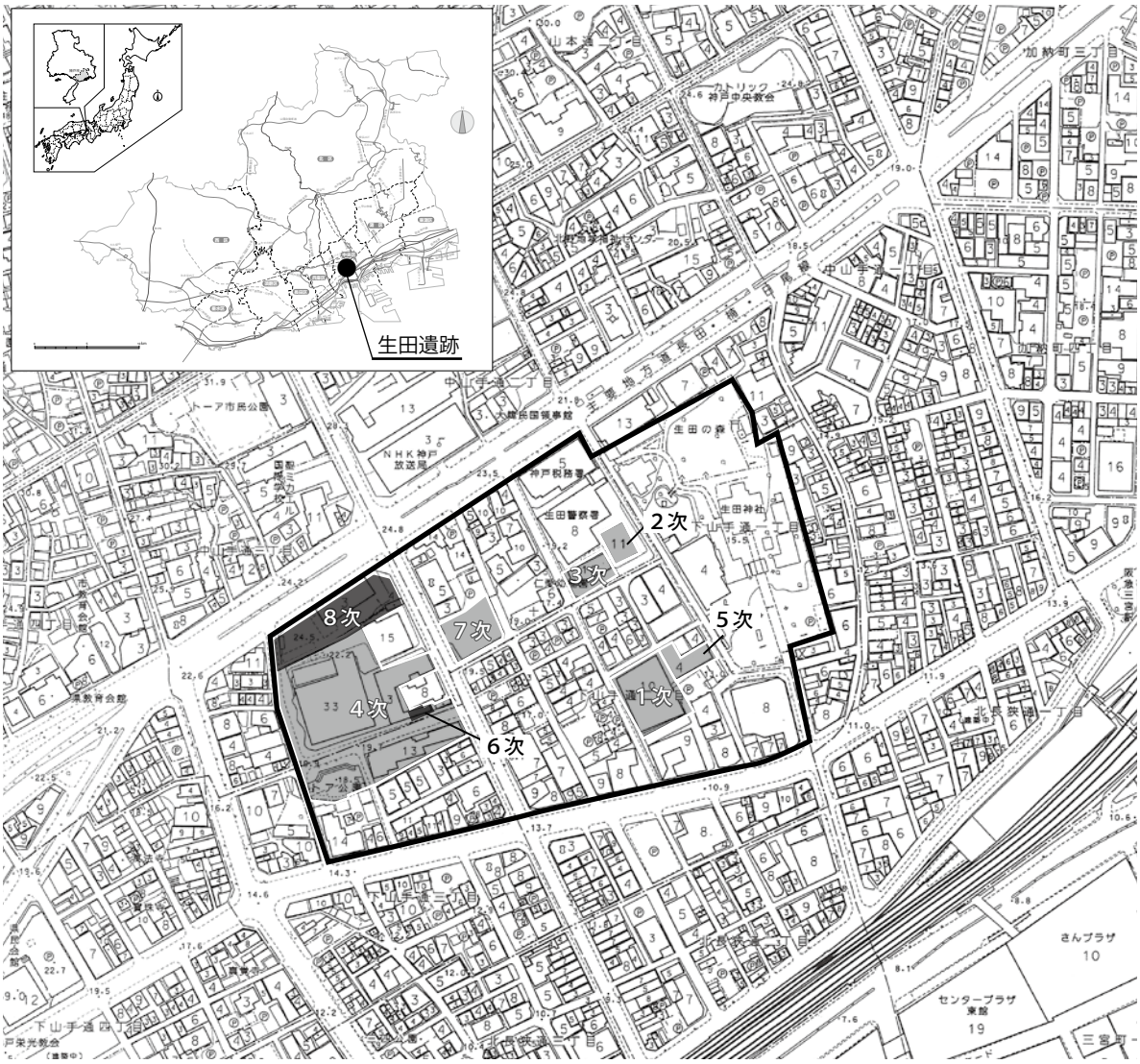
第１表　既往調査一覧 …… 2
第２表　主な周辺遺跡の参考文献 …… 5
第３表　出土石器一覧 …… 14
第４表　SE01・02井戸側材及び木製品一覧 …… 41
第５表　植物珪酸体分析結果（おもな分類群） …… 57
第６表　出土木材の樹種 …… 60
第７表　出土樹種構成 …… 63
第８表　井戸構築材樹種 …… 63
第９表　動物遺存体種名表 …… 64

写真図版目次

写真図版１
Ⅱ区全景（南西から）
写真図版２
１．Ⅰ区東半全景（南西から）
２．Ⅰ区南西部全景（北から）
３．Ⅰ区全景（東から）
写真図版３
１．SK06全景（北から）
２．SD04 ～ 08全景（東から）
３．SD05土層断面（北から）
４．SD08土層断面（西から）
写真図版４
１．SD03遺物出土状況（北から）
２．SD02・03全景（北から）
３．SD02遺物出土状況（南から）
４．SB01全景（北から）
５．SB08全景（南東から）
６．SB08 Pit466（西から）
７．SB08 Pit476（東から）
写真図版５
１．SK07全景（西から）
２．SK08全景（北東から）
３．SK08土層断面（南東から）
写真図版６
１．Ⅰ区SB03・04全景（南東から）
２．Ⅲ区SB03全景（東から）
３．SB03 Pit711（東から）
４．SB03 Pit095（西から）
５．SB04 Pit059（南から）
６．SB05及びSK03 ～ 05全景（南から）
写真図版７
１．SB07全景（北東から）
２．SB07 Pit262（東から）
３．SB07 Pit272（東から）
４．SB09全景（南から）
５．SB09 Pit601（南から）
６．SB09 Pit603（北から）
７．SB09 Pit606（南から）
写真図版８
１．SB09・10・11・12全景（南から）
２．Ⅱ区東半 掘立柱建物検出状況（南から）
写真図版9
１．SB11 Pit652（西から）
２．SB11 Pit653（西から）
３．SB11 Pit655（西から）
４．SB12 Pit585（西から）
５．SB12 Pit582（東から）
６．SB12 Pit572・573（南から）
７．SB06 Pit184遺物出土状況（東から）
８．SB06 Pit184土層断面（南から）
９．SB06 Pit206（南から）
10．SE02検出状況（南東から）
11．SE02曲物検出状況（南東から）
写真図版10
１．SE01全景（南から）
２．SE01（上）石組み （下）井戸側上面
３．SE01井戸側検出状況 近景（南から）
４．SE01東側板検出状況
５．SE01曲物及び遺物出土状況（南から）
６．SE01西側板検出状況
写真図版11
１．SD09全景（南から）
２．SD09北端　遺物出土状況（南から）
３．SD09南端　石組み検出状況（北から）
４．建物基礎２検出状況（南から）
５．建物基礎１検出状況（東から）
６．SD09上面水場遺構検出状況（南東から）
写真図版12
１．SD01石組み断面近景
２．SD01分岐地点　石の検出状況
３．Ⅱ区全景及びSD01検出状況（西から）
４．Ⅰ区東半　耕作痕検出状況（南から）
５．Ⅰ区東半　耕作痕検出状況（南西から）
６．Ⅰ区東端　中世耕作痕（西から）
写真図版13
１．SK06及び旧耕土層など出土の土器
２．SX02出土土器
３．SK06出土土器
４．中世堆積層出土の石刀
５．SD04出土土器
６．SK04出土土器
写真図版14
１．出土石器
２．SB02出土土器
３．SB01出土土器
４．Pit392出土土器
５．旧耕土層出土 紡錘車
６．SD02出土土器
写真図版15
１．SK07出土土器
２．SK08出土土器
写真図版16
　SE01出土遺物
写真図版17
１．SE01井戸側材（隅柱）
２．SE01井戸側材（横桟）及び加工木・杭状材
写真図版18
１．SE01　南辺側板材
２．SE01　東辺側板材
写真図版19
１．SE01　北辺側板材
２．SE01　西辺側板材
写真図版20
１．SE01出土 砥石
２．SE01出土 櫛
３．SE02出土土器
４．SE03出土土器
５．SK203出土土器
６．SB06 Pit184出土土器
写真図版21
１．SE02　井戸側材（隅柱・横桟）
２．SE02　井戸側材（縦板）
写真図版22
１．SD09最下層出土瓦
２．SD09上層石組み溝出土遺物（１）
２．SD09上層石組み溝出土遺物（２）

Ⅰ.生田遺跡と調査の概要

生田遺跡は神戸の市街地の中心、三宮駅の北側に位置する。式内社生田神社の西側一帯の標高14～23m付近、段丘端部から、生田川や六甲山南麓から流れ出る鯉川などの小河川により形成された複合扇状地上にかけて立地する集落遺跡である。



第１図　調査地及び既往調査地位置図

写真１　調査地遠景（市章山より）
矢印の交差する地点が調査地

写真２　調査地周辺（トアロード）
（北長狭通３・下山手３・中山手通３）

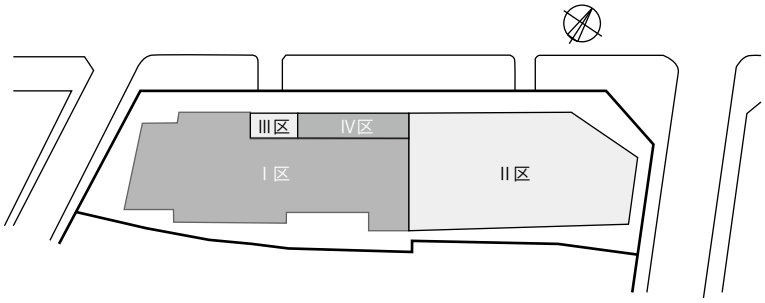
１. 既往の調査と周辺の遺跡

生田遺跡の発見は、昭和62年の生田神社西側でのホテル建設に先立つ試掘調査である。その後の第１次調査では古墳時代中期の竪穴建物、後期の倉庫と考えられる掘立柱建物群が検出され、古墳時代の集落跡として注目された。第２・３次調査も生田神社の西側で行われ、中世の大溝や自然流路、沼状地形など生田川の旧流に起因する痕跡が確認された。

平成17年度には今回の調査地南側で大規模な再開発事業に伴う第４次調査が行われ、縄文時代から明治時代に至る多様な遺構・遺物が確認された。縄文時代では後期の竪穴建物や落ち込み、土坑が検出され、多量の土器が出土、ヒスイ製小玉や土偶など市内では稀有な遺物の出土があった。弥生時代では中期の竪穴建物、方形周溝墓が検出された。古墳時代では後期の掘立柱建物12棟、竪穴建物２棟、柵列２条、土坑が検出され、建物配置から豪族居館との関連性が指摘された。古代～中世にかけては、奈良時代の井戸、平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物、井戸や土坑が確認され、中世末の大溝が検出された。また明治33年（1900）に開校した中華同文学校の校舎に伴う煉瓦基礎が確認されている。当地域の歴史環境を考える上で非常に重要な成果が得られた。第４次調査に先立つ試掘調査の結果から、遺跡の範囲が生田神社から西側、東西約400m、南北約300mの範囲に及ぶものと推定された。第５次調査では古墳時代以前とされる掘立柱建物が検出され、第６次調査では第４次調査で検出の大溝の続きが確認された。第６次調査地東側での第７次調査では、落ち込みから弥生時代中期～古墳時代後期の多くの遺物が出土している。堤瓶や横瓶など集落域からの出土が稀な遺物の出土があった。

第１次調査	昭和62年度（1987）	古墳時代中～後期：竪穴建物・掘立柱建物群（倉庫群）	1990「生田遺跡」『昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報』
第２次調査	平成２年度（1990）	中世：大溝・自然流路	1991『生田遺跡発掘調査実績報告書』生田遺跡調査団
第３次調査	平成16年度（2004）	古墳時代後期：土坑 平安時代：沼状遺構	
第４次調査	平成17年度（2005）	縄文時代後期：土坑・ピット・土器溜り 弥生時代中～後期：竪穴建物・方形周溝墓・土坑 古墳時代後期：竪穴建物・掘立柱建物・溝・土坑 奈良時代：井戸 平安時代：掘立柱建物・井戸 中世：井戸・土坑・柵列・大溝 明治時代：煉瓦基礎	2006『生田遺跡第４次調査発掘調査概要』神戸市教育委員会
第５次調査	平成19年度（2007）	古墳時代以前：掘立柱建物	2010「生田遺跡第５次調査」『平成19年度神戸市埋蔵文化財年報』
第６次調査	平成19年度（2007）	中世：大溝（縄文～古墳時代の土器）	2010「生田遺跡第６次調査」『平成19年度神戸市埋蔵文化財年報』
第７次調査	平成22年度（2010）	弥生時代中期：柱穴・溝 古墳時代～奈良時代	2013「生田遺跡第７次調査」『平成22年度神戸市埋蔵文化財年報』
第８次調査	平成26年度（2014）	本報告書	

第１表　既往調査一覧



第２図　調査区区割図

２. 調査の概要

今回の調査は和田興産株式会社が計画する共同住宅建設に先立ち実施した。工事の影響により埋蔵文化財が失われる約1,450㎡の範囲について実施した。表土・盛土層以下、近代の耕土層までを重機により除去、それ以下は人力により遺構・遺物の検出に努めた。残土置場の関係から、調査区西半をⅠ区、東半をⅡ区、入口部をⅢ区、調査関係車両置場をⅣ区とし、西側より順次、調査を実施した。現地の調査は、平成26年10月20日に開始、平成27年３月５日に完了した。

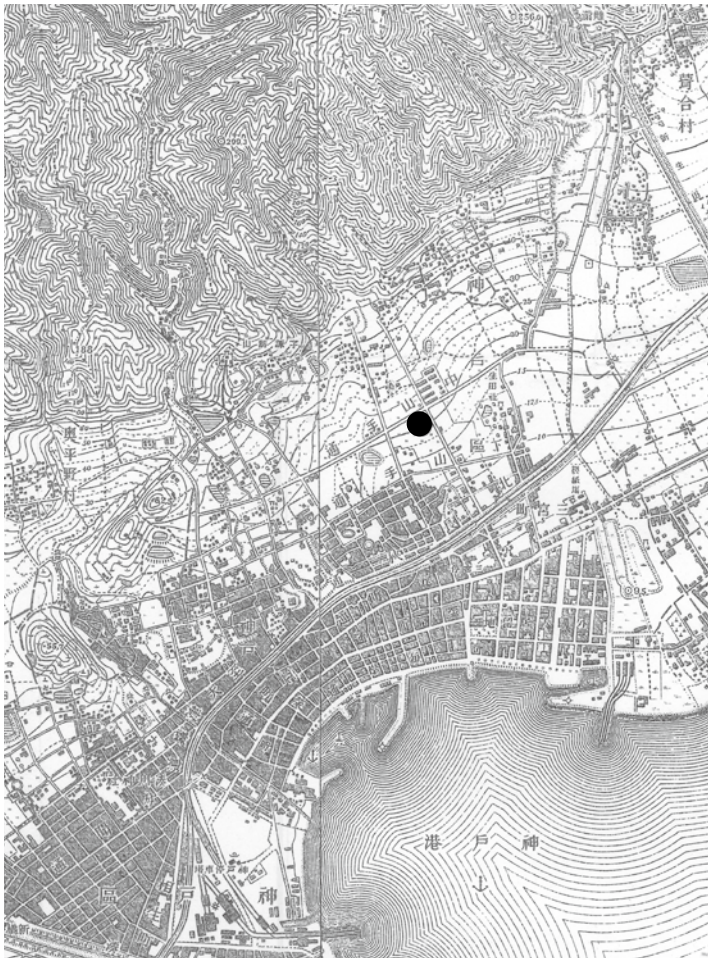
Ⅰ区	平成26年（2014）	10月21日～平成27年（2015）１月８日
Ⅱ区	平成27年（2015）	１月５日～３月５日
Ⅲ区		３月３日～３月５日
Ⅳ区		１月５日～２月４日

またⅠ区の調査期間中である12月20日に、発掘調査作業の様子と検出遺構・遺物などを公開する現地説明会を開催した。雨天にもかかわらず75名の参加を得た。

現地の調査では検出遺構の図化などの記録作業のために、世界測地系基準点と東京湾平均海水面（T.P.）を取り付けた。記録写真はモノクロフィルムとポジフィルムを使用、35㎜カメラ、6×7カメラ及びデジタルカメラで調査担当者が撮影した。

平成27年度は神戸市埋蔵文化財センターにおいて、遺物の水洗作業、接合・復元作業を行い、報告書作成業務を実施した。

写真３　調査作業風景
及び現地説明会の様子



第３図　調査地位置図（２万分１仮製「神戸」「兵庫」明治18年測量）
×0.7

3. 周辺の遺跡

生田遺跡は生田川と宇治川との間に位置し、両河川流域には多くの遺跡が存在する。

縄文時代

生田川上流域旧左岸に立地する熊内遺跡、中流域旧左岸の雲井遺跡では早期の押型文土器を伴う遺構が確認され、熊内遺跡では竪穴建物の検出があった。両遺跡からは中期の北白川Ｃ式のまとまった数の土器の出土も認められる。宇治川流域では宇治川南遺跡において早期～晩期の土器が流路などから出土している。生田川、宇治川流域は市域の中でも縄文時代の遺構・遺物が多く確認され、早くから拓けた土地といえる。

弥生時代

宇治川南遺跡で流路から前期の土器が出土している。雲井遺跡では中期の玉作り工房を含む多数の竪穴建物群や方形周溝墓群の検出があり、当地域の拠点的集落と目される。また宇治川と西側の旧湊川に挟まれた扇状地上に立地する楠・荒田町遺跡では、前期末～中期初頭の貯蔵穴や中期の竪穴建物、方形周溝墓が検出されている。楠・荒田町遺跡もまた中期の拠点的集落と考えられる。熊内遺跡では後期の竪穴建物、掘立柱建物を囲む二重の濠が検出されている。雲井遺跡の東１㎞に位置する日暮遺跡では後期の竪穴建物が検出されている。

古墳時代

生田川流域、熊内遺跡、雲井遺跡、日暮遺跡において竪穴建物が確認されている。宇治川流域では下山手遺跡で竪穴建物が確認されている。墓域では生田川中流域旧左岸にかつて横穴式石室を埋葬主体とする生田古墳群が存在したと伝えられ、それに近接する熊内遺跡で後期の木棺墓が検出されている。宇治川左岸の段丘端に立地する径10mの円墳である中宮黄金塚古墳は全長4.5mの横穴式石室を埋葬施設とする。後期の当地域の有力者層の墓と考えられる。

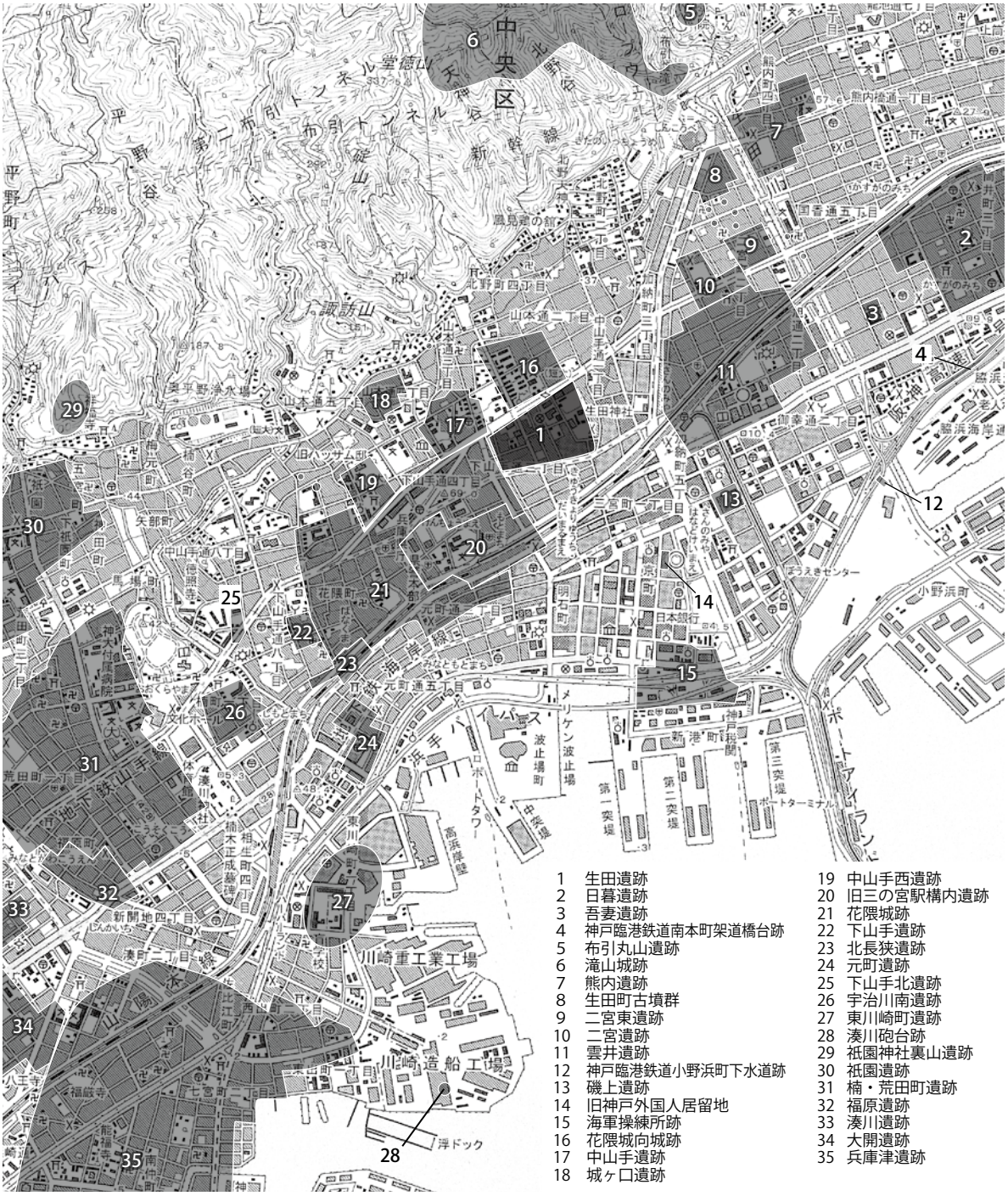
飛鳥・奈良・平安時代

生田川流域では、中流域旧左岸の二宮遺跡において飛鳥時代の鍛冶工房と考えられる竪穴建物や掘立柱建物が検出されている。生田遺跡の南側、鯉川沿いではＪＲ元町駅の北側、段丘端の旧三ノ宮駅構内遺跡で奈良時代の掘立柱建物などが確認されている。宇治川沿いの段丘端に立地する下山手北遺跡では、飛鳥時代の大型の柱掘形をもつ掘立柱建物群が検出されている。

平安時代には日暮遺跡で掘立柱建物や地鎮遺構が確認されている。下山手北遺跡では園池を伴う掘立柱建物が検出され、在地の有力者の邸宅と考えられる。湊川水系、天王谷川と石井川の合流部に立地する祇園遺跡では、京都系の土師器皿が園池遺構から大量に出土したほか、山城系・播磨系軒瓦や貿易陶磁器が出土する。楠・荒田町遺跡では二重の壕を伴う邸宅が確認され、福原京に関わる平氏関連遺跡として重要である。

中世以降

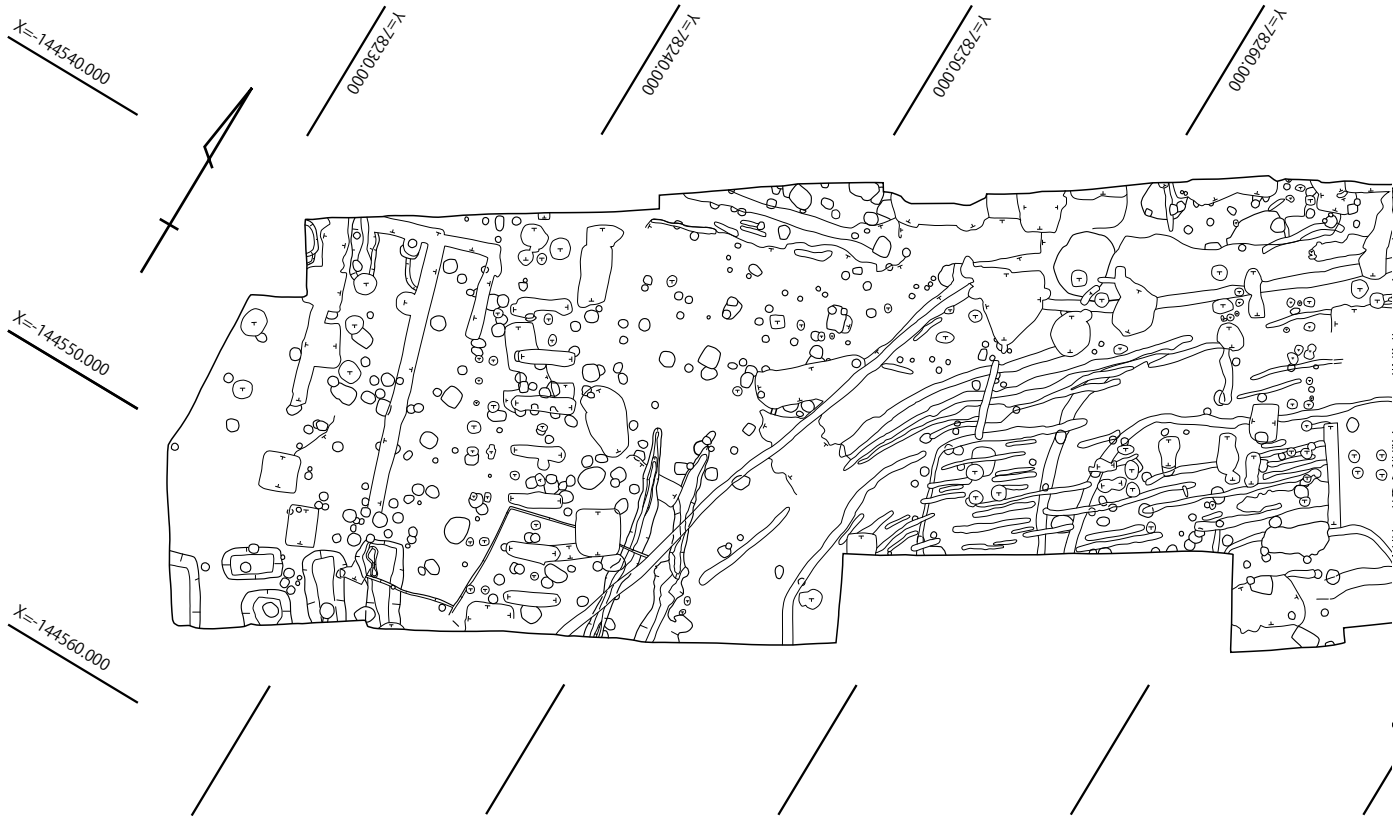
戦国期に花熊（花隈）城が当遺跡の南西700mの段丘端に築城された。数次の発掘調査で堀跡と推測される落ち込みなどから、火災で焼けたと考えられる瓦が出土している。南西３㎞の旧湊川河口に拡がる兵庫津遺跡は、古代からの港として度々文献に登場する。今日の神戸の礎を築いた重要遺跡である。古代に属する遺構・遺物の発見は少なく、検出遺構のほとんどは中世以降、中でも近世の遺構・遺物の検出量は膨大である。近年、花熊城からの部材を移し築城されたと伝わる兵庫城の発掘調査では堀と築城当初の石垣が検出され、堀の外側では近世初頭の町屋が確認されている。また明治時代の開港に伴い設けられた旧外国人居留地における調査では、神戸の輸出産業を支えた茶再製工場の跡が調査されている。

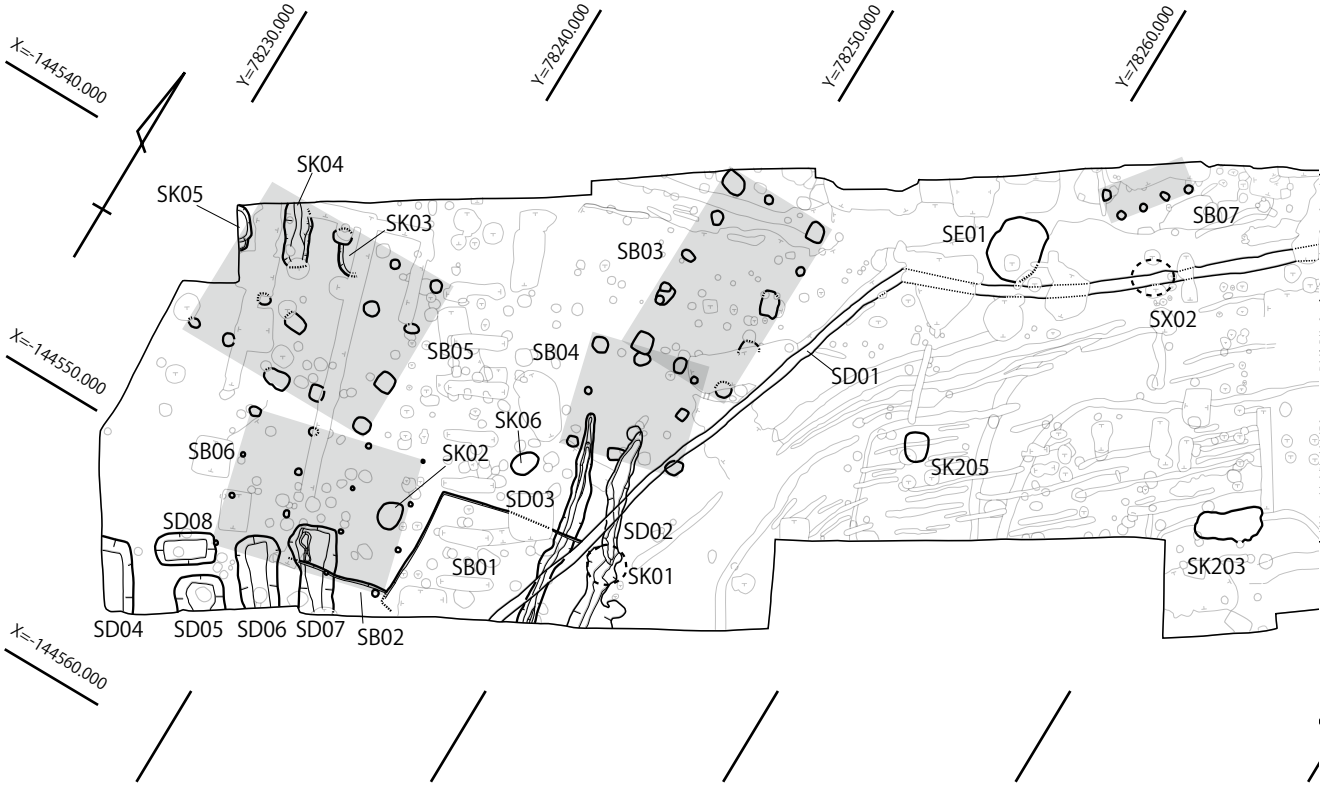


第４図　周辺の遺跡（Scale 1：25,000）

遺跡名	主な参考文献
日暮遺跡	谷正俊『日暮遺跡発掘調査報告書』1989 神戸市教育委員会
熊内遺跡	安田滋編『熊内遺跡第３次発掘調査報告書』2003 神戸市教育委員会
生田古墳群	谷正俊「生田古墳群第１次調査」『平成12年度神戸市埋蔵文化財年報』2003 神戸市教育委員会
二宮遺跡	谷正俊「二宮遺跡第１次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』2001 神戸市教育委員会
雲井遺跡	西岡誠司 川上厚志『雲井遺跡第28次発掘調査報告書 』2010 神戸市教育委員会
旧居留地遺跡	『旧神戸外国人居留地遺跡発掘調査報告書』2011神戸市教育委員会
花隈城向城跡	内藤俊哉「花隈城向城跡第１次調査」『平成18年度神戸市埋蔵文化財年報』2009 神戸市教育委員会
旧三ノ宮駅構内遺跡	菅本宏明「旧三ノ宮駅構内遺跡」『平成２年度神戸市埋蔵文化財年報』1993 神戸市教育委員会
花隈城跡	須藤宏「花隈城跡第１次調査」『平成15年度神戸市埋蔵文化財年報』2006 神戸市教育委員会
	中谷正「花隈城跡第２次調査」『平成17年度神戸市埋蔵文化財年報』2008 神戸市教育委員会
中宮黄金塚古墳	菅本宏明「中宮黄金塚古墳」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』1994 神戸市教育委員会
下山手遺跡	阿部敬生『下山手遺跡第６次発掘調査報告書』2014 神戸市教育委員会
下山手北遺跡	須藤宏「下山手北遺跡第２次調査」『平成17年度神戸市埋蔵文化財年報』2008 神戸市教育委員会
宇治川南遺跡	丹治康明「宇治川南遺跡」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』1986 神戸市教育委員会
祇園遺跡	富山直人『祇園遺跡第５次発掘調査報告書』2000 神戸市教育委員会
楠・荒田町遺跡	岡田章一『楠・荒田町遺跡Ⅱ　神戸大学医学部付属病院埋蔵文化財発掘調査報告』2008 兵庫県教育委員会
	富山直人編『楠・荒田町遺跡第42・43・46次発掘調査報告書』2011 神戸市教育委員会
兵庫津遺跡	『兵庫津遺跡Ⅱ』2004 兵庫県教育委員会
	黒田恭正 佐伯二郎 内藤俊哉『兵庫津遺跡発掘調査報告書　第14・20・21次調査』2010 神戸市教育委員会
	川上厚志編『兵庫津遺跡第57次発掘調査報告書』2014 神戸市教育委員会

第２表　主な周辺遺跡の参考文献

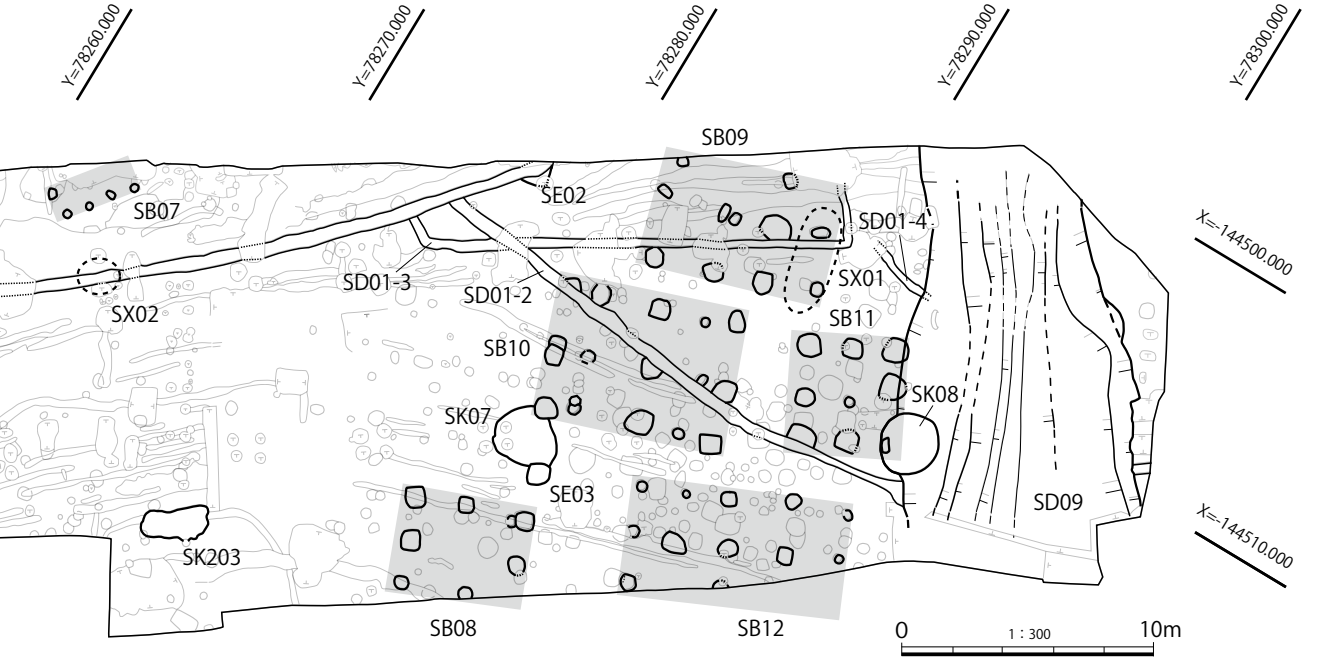




第５図　調査区平面図及び遺構配置図（Scale 1：300）

Y=78260.000
Y=78270.000
Y=78280.000
Y=78290.000
Y=78300.000
X=-144500.000
X=-144510.000
0
1：300
10m

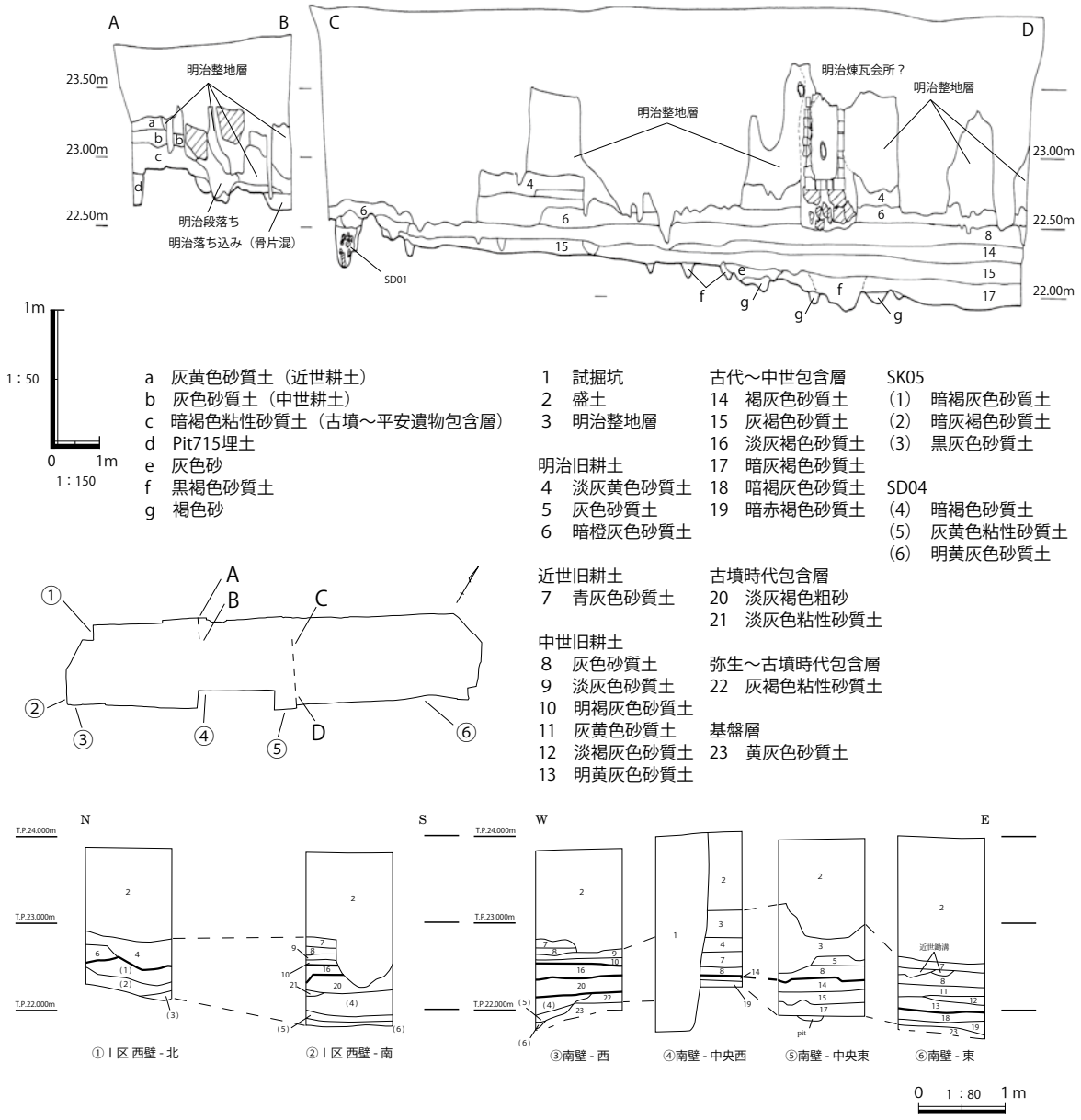
遺構平面図


Y=78260.000
Y=78270.000
Y=78280.000
Y=78290.000
Y=78300.000
SB09
SB07
SE02
SD01-4
SX01
SD01-3
SD01-2
SX02
SB11
SB10
SK08
SK07
SE03
SD09
SK203
SB08
SB12
X=-144500.000
X=-144510.000
0
1：300
10m

遺構配置図

今回の調査地は生田遺跡の北西端に位置し、調査地中央北側での現標高はT.P.24.0m、南東側はT.P.22.6mである。現代の盛土層の下に明治時代の整地層、耕土層が堆積、その下に近世旧耕土層が堆積する。その下層は中世の旧耕土層で、調査区南半では２層となる。中世耕土層の下は西半では灰褐色粘質土などが堆積し、東半では暗褐灰色粘質土などが堆積する。古墳時代～古代の遺物を含み、南西または南東部へのそれぞれの下がり地形に合わせて層が厚くなる。その下面が黄灰色砂質土の地山面である。地山表層は土壌化が進み褐色を呈する箇所が多い。

遺跡の西限は現在、鯉川筋から東に一筋目の南北道路で、地下河川となった鯉川の流れのひとつである。調査区内の地山面は調査区南西部では西側へ傾斜しはじめる。調査区の東側は三宮神社筋（トアロード）に面する。現地表面は明治期以降の造成によりかなりの勾配が生じているが、遺構検出面である地山面ではさほど東側へ傾斜していない。調査区北辺中央をピークに、扇状に緩やかに両端に向かい傾斜する地形を確認した。



第６図　調査区基本土層図

Ⅱ．検出遺構と遺物

（１）縄文時代の遺構・遺物

調査区の南西部で土坑を１基検出し、中央付近では地山面に数点の土器片が散布する状況を確認した。

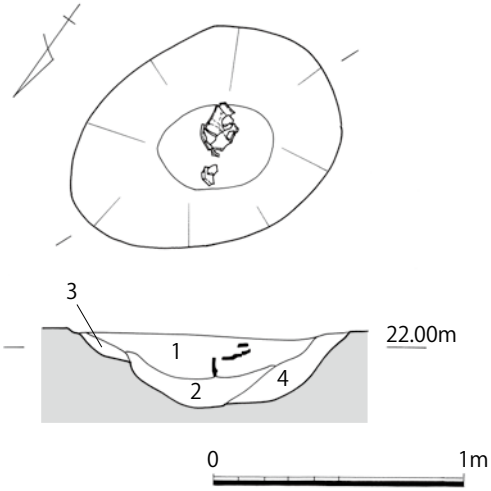
【土坑】

SK06

長径約1.0m、短径0.7mの平面楕円形の土坑で、深さは約0.3mである。遺物は埋土の上層、炭の混じる暗褐色砂質土層から深鉢の破片などが出土した。土器は最終埋土に投棄されたものと考えられる。

出土遺物は、１が復元口径24.0㎝の深鉢である。口縁端部に１条と下方に２条の凹線を配す。外面は細かいミガキ調整、内面はナデ調整である。焼成後穿孔が１ケ所認められる。２も１と同程度の口径と考えられる深鉢の口縁である。口縁端部に１条、少し下方に２条の凹線を配す。口縁端部に円形の粘土を貼付し、凹線間に扇状圧痕を施す。口縁は波状になるものと思われる。３も口縁部片でノの字状の突起を貼付する。４と５は同一個体と思われるが接合はしない。３条１対で巡る凹線が２段確認できる。凹線の間隔は狭い。外面は丁寧なナデ調整で、内面に条痕がみられる。胎土に角閃石を含み、色調は茶褐色である。河内産と考えられる。６はヘソ状の鉢の底部である。底径5.0㎝、外面は条痕をナデ消し、内面もナデ調整である。

７～11は後世の遺構や旧耕土層に混入していたものである。７～９は口縁部の破片、10・11は鉢の胴部と考えられる破片である。沈線、円形や波状の文様を施す。10はSB01埋土に混入した小片で細かい縄文を施文し、円形の文様を刻む。



１．暗褐色砂質土（炭混じり）
２．暗灰褐色粘性砂質土
３．灰色極細砂
４．灰褐色砂（１㎝大礫混じり）

第７図　SK06平・断面図

写真４　SK06遺物出土状況（北から）

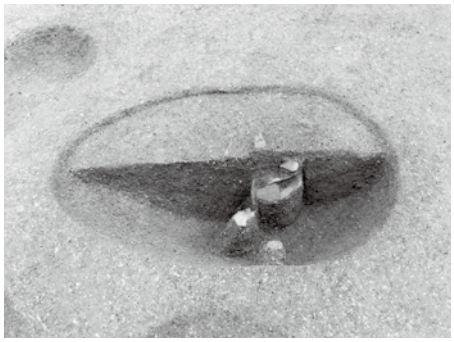
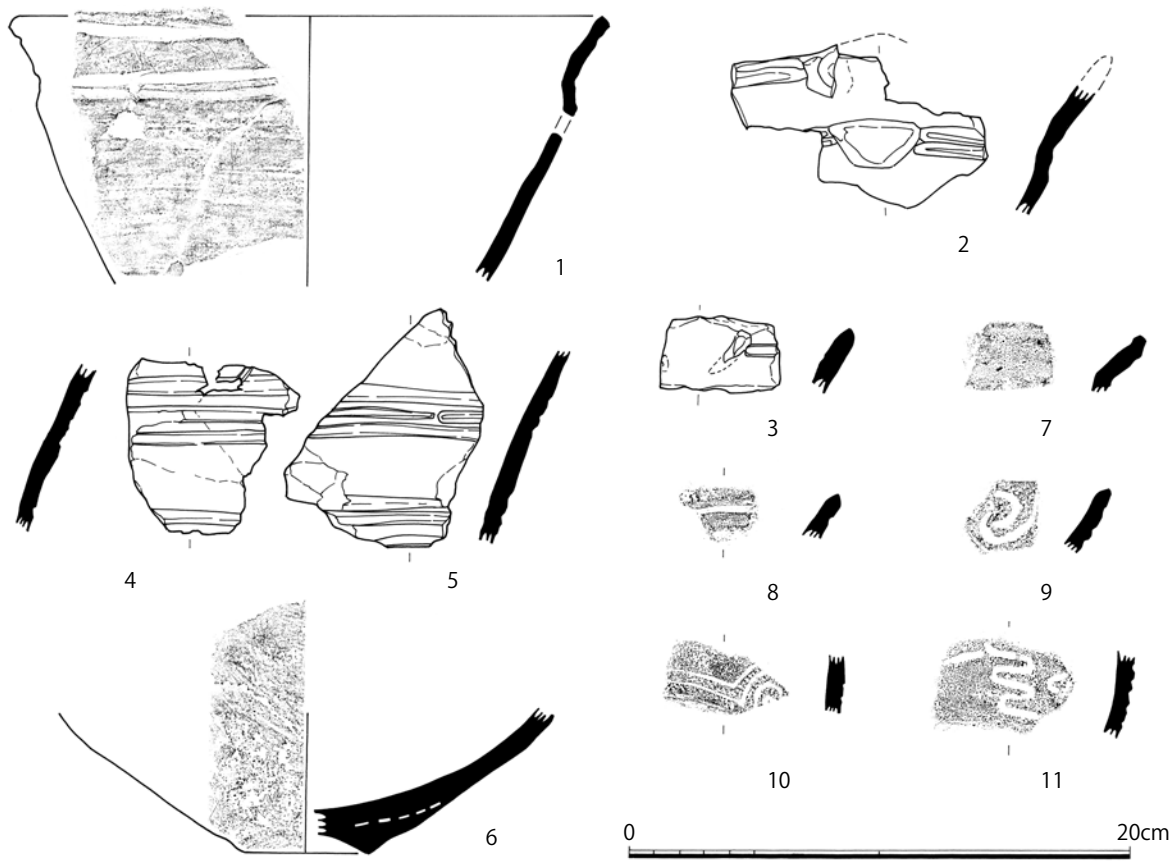


写真５　SK06土層断面（北から）



第８図　SK06及び旧耕土層など出土の縄文土器

SX02

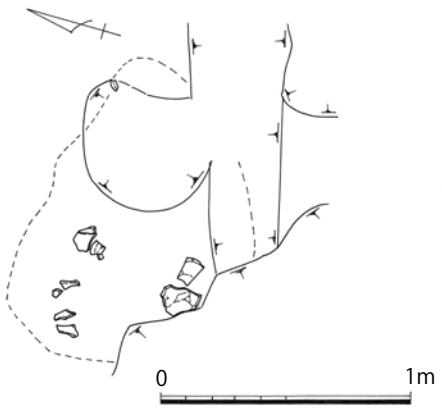
調査地中央付近の地山面で土器片が数点、径1.0mほどの範囲に拡がる状況を確認した。土器の周囲がわずかに変色しており、土器の周囲、変色範囲数カ所を断ち割ったが、落ち込みのような輪郭は検出できなかった。ベース土が土壌化する際に流れ込んだものと想像する。

出土遺物は、12が復元口径27.0㎝の浅鉢である。丸みを帯びた体部から伸びる口縁端はやや肥厚する。口縁部外面は細かいミガキ調整、その他は内面ともナデ調整と思われる。13は底部片で器種は不明である。底径9.0㎝、残存高3.9㎝。14は体部が球形をした鉢である。体部外面に細かい縄文を施し、内面は丁寧なナデ調整である。頸部との境に段が形成される。

SK06の南西で長径1.1m、短径0.9m、深さ0.2m、暗褐色粘質土を単一埋土とする土坑SK02を検出した。埋土に炭が混じり、周辺での炭の分布は、縄文土器の出土したSK06にのみ認められることから、遺物の出土はないが、縄文時代の遺構の可能性がある。

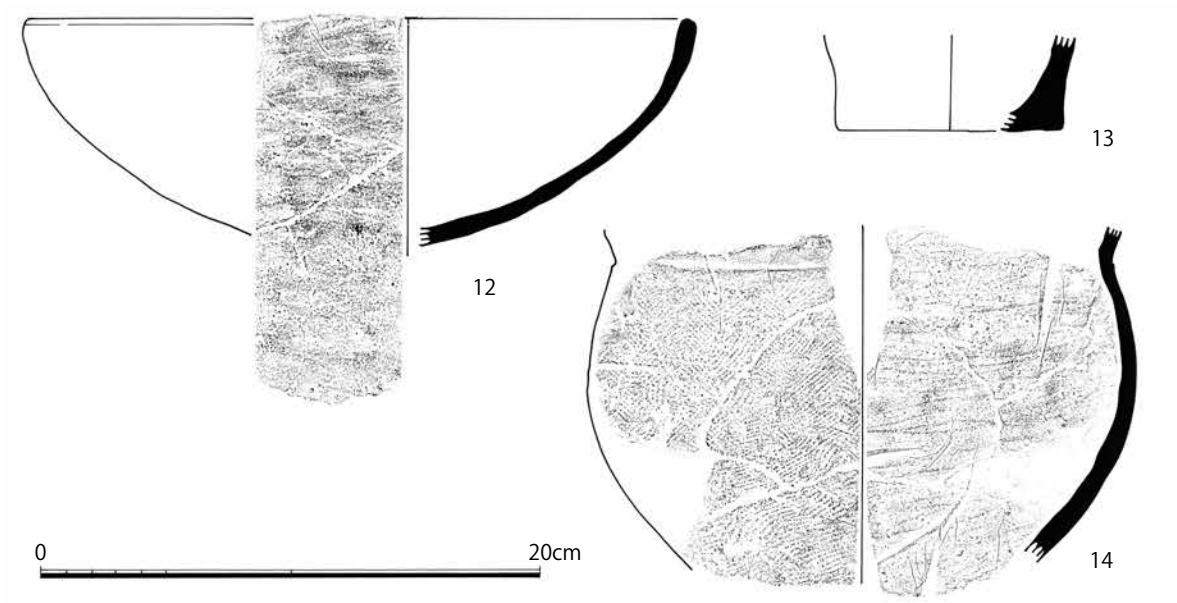
また調査区の中央付近、中世に堆積した砂層より石刀15が出土した。両端を欠損しており、残存長13.4cm、刃と棟の間は2.9㎝、棟幅は最大1.5㎝、鎬間の厚さは最大で2.0㎝である。重さ126.2ｇ、比重は2.65で、頁岩製の可能性が考えられる。表面を丁寧に研磨して仕上げる。

第４次調査地では住居址や土器溜まりが確認され、縄文時代後期に属する多くの遺物が出土した。今回の出土土器は凹線文が中心で、凹線内は未調整のものが多く、間隔も狭い。石刀の出土が特筆され、小型で全体に丁寧に磨かれており、大きさ、加工の度合いからみて縄文時代晩期以前の所産と考えられ、土器と同様、後期後半のものと推測している。南側の調査地と比較すると遺構はかなり希薄であり、遺物の出土も少ない。



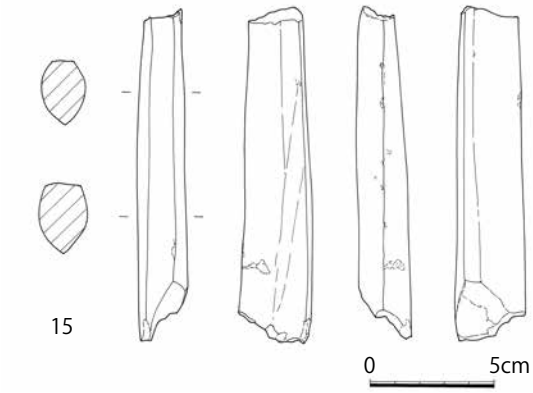
第９図　SX02平面図

写真６　SX02検出状況（南西から）



第10図　SX02出土遺物

写真７　石刀出土状況（南から）



第11図　石刀実測図

（２）弥生時代の遺構・遺物

調査区南西部で土坑状の形状のものを含む溝６条と、北西部で土坑を３基検出した。

【溝】

SD03

南北方向の溝で、検出長約8.5m、幅約0.6m、深さは約0.4mである。断面の形状はＶ字形で、鋭角に掘り込まれる。北側から約1.5mの地点で溝底が約0.2m下がり、段を形成する。緩やかな下がり地形のはじまる傾斜変換点に応じた段と思われる。長さ20㎝ほどの石が４個、埋土上層で等間隔に並ぶ状況が見られたが、性格については明らかでない。弥生土器の小片とサヌカイト製の石鏃27が出土した。

SD04

検出長3.0m、検出幅0.9m、南西隅での深さ0.6mである。西側と南側の調査区外に拡がる。底は緩やかに南下がりとなるが、土壌化層を掘りすぎた感があり、本来は北側で深さ0.1mほど、中ほどから深くなり、南側で深さ0.4mほどに落ち込むものと思われる。最深部から拳大の礫が１個出土、その他には土器片数点が出土した。16の甕は、くの字に屈曲する頸部から口縁端部を上方に摘まみ上げる。内外面とも細かいハケ調整を施す。17は器種不明の胴部片で、沈線が２条刻まれる。胎土に角閃石を含み、色調はやや茶褐色を呈し、河内産の可能性がある。18は底径8.0㎝の甕の底部で、外面はハケ調整、内面は櫛状の工具によるナデ調整である。19の底部の外面は細かいヘラによるミガキ調整である。

SD05

検出長1.5m、幅約2.0mの溝で南側に続く。深さ0.6mまで掘削したが、下層の深さ0.4mは土壌化による変色の可能性が高い。但し、締まりのない土壌であった。本来は深さ約0.2mで、平底であったと思われる。弥生土器の小片が出土した。

SD06

検出長3.0m、幅約2.0m、深さ0.6mの溝で、調査区外南側に伸びるであろう。弥生土器と思われる小片が出土したが、図化し得なかった。

SD07

検出長3.4m、南壁際での幅約1.4m、北側は2.1mを測る。南壁際での深さは0.3mである。南に続く断面の形状はU字形を呈するが、北側での底は平坦になっており、断面の形状は箱形である。遺物の出土はなかった。

SD08

SD05の北側に位置し、北辺はSD04、06の北辺と揃う。幅1.3m、長さ2.5m、深さは0.8mと深い。平底で断面の形状は箱形である。埋土下層から弥生土器の小片とサヌカイト製石鏃21が出土した。

５条の溝からの出土遺物は少量であったが、SD04出土の甕は弥生時代中期のものと考えらえる。南北方向のSD04～07は並行し、東西方向の溝SD08がSD05の北側で４本の溝に直交する方向に掘削される。南側、第４次調査の近接地では、弥生時代後期後半の方形周溝墓１基が検出されている。SD04・05・06・08を一連のものと捉え、その配置から周溝墓を構成する溝の可能性が考えられる。南側が未検出であり、またSD07の存在も含め、不明な点は多い。

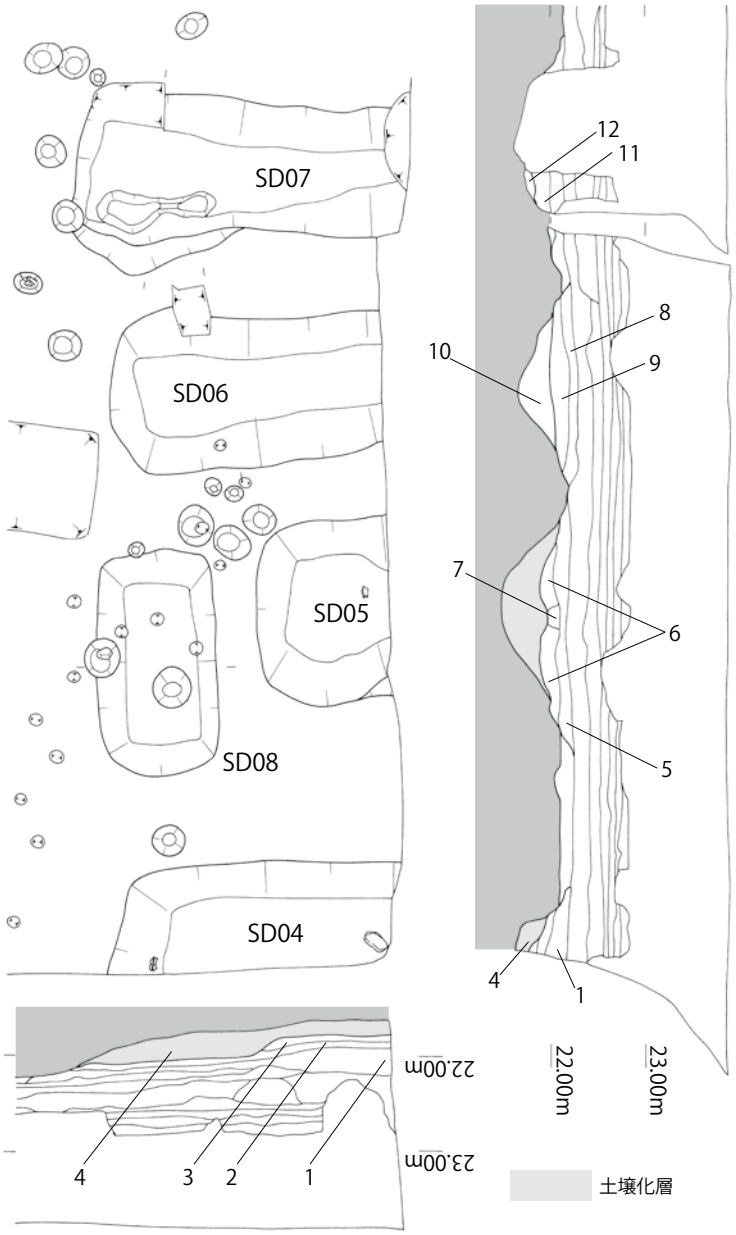
SD04
1．暗褐色砂質土
2．灰黄色粘性砂質土
3．暗黄灰色砂質土
4．濁灰黄色砂質土（しまり悪い）

SD05
5．淡褐灰色粘性砂質土
6．暗褐白色粘性砂質土
7．暗灰褐色粘性砂質土

SD06
8．淡褐灰色粘性砂質土
9．淡褐白色粘性砂質土
10．濁灰黄色砂質土（しまり悪い）

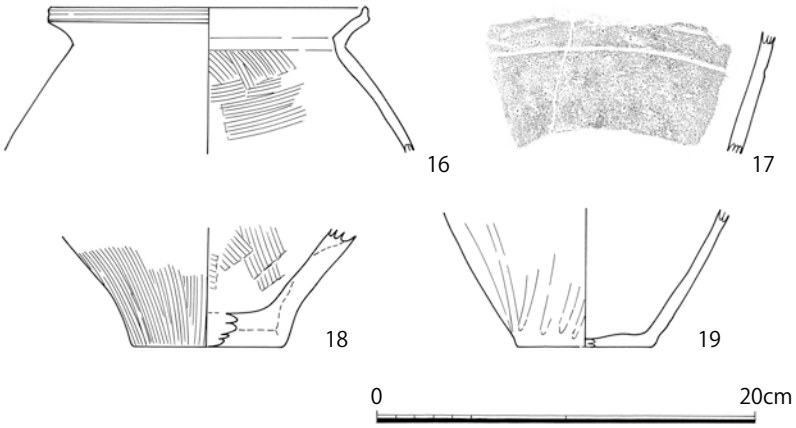
SD07
11．褐色砂質土
12．淡茶褐色砂質土

0　2 m



第12図　SD04 ～ 08平・断面図

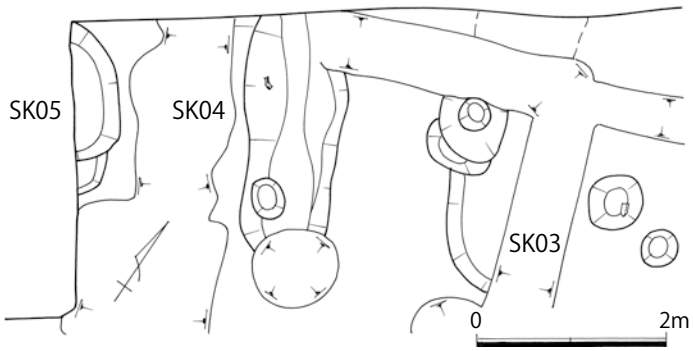
写真８　SD04遺物出土状況
（北から）



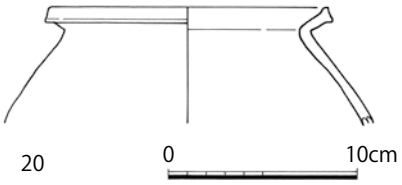
第13図　SD04出土遺物

【土坑】

SK03～05は調査区北西隅で検出した土坑で、３基が並行する。攪乱の影響や調査区外に伸びるため判然としないが、SK05が長さ約1.5m、SK03と04が長さ約2.0m、幅はいずれも1.0mほどで長方形に近い平面形をした土坑と考える。底面は比較的平たく、断面の形状は箱形となる。出土遺物に乏しいがSK04から甕20が出土した。くの字に強く屈曲する頸部で、口縁端部は肥厚して撥形に近い形態となる。

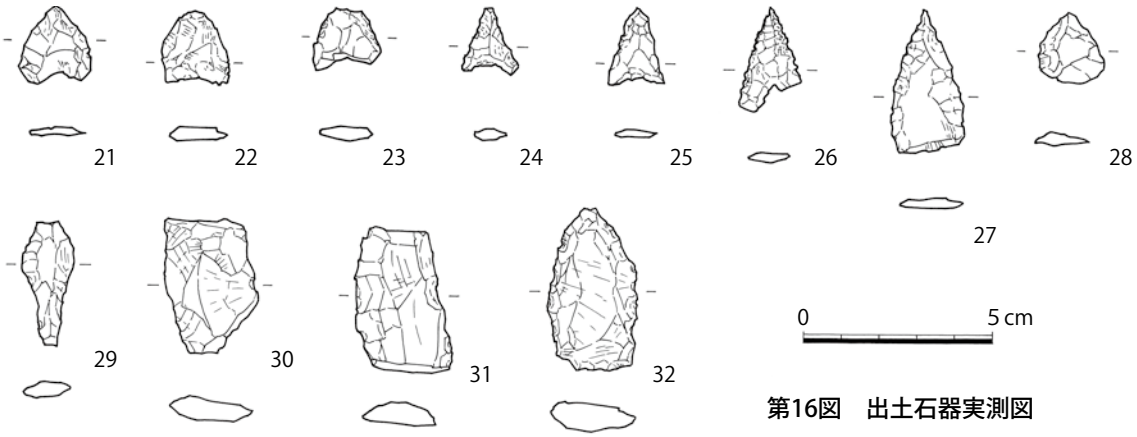


第14図　SK03～05平面図



第15図　SK04出土遺物

また弥生時代の遺構のほか、遺物包含層や旧耕土層からサヌカイト製石鏃、楔形石器が出土した。石鏃21～23は凹基式で基部の抉りは浅い。24～26は細身で抉りがやや深い。26は微細な剥離調整である。27は平基式、28は円基式の石鏃である。29は有茎式の石鏃と考える。30～32は楔形石器で現存長4.0㎝、幅2.0㎝ほどである。出土位置、法量は一覧の通り。石鏃は小さく、軽いことから縄文時代のものが大半と考える。SD03出土の27は弥生時代のものであろう。



第16図　出土石器実測図

第３表
出土石器一覧

遺物番号	遺物名	出土位置	長さ（㎝）	幅（㎝）	厚さ（㎝）	空中重量（g）	体積（㎤）	比重
21	石鏃	SD08	2.00	1.90	0.25	0.90	0.35	2.57
22		西：灰色砂	1.90	1.80	0.40	1.27	0.48	2.64
23		東半鋤溝	1.80	1.80	0.40	1.42	0.54	2.62
24		地山面	1.80	1.40	0.35	0.60	0.23	2.60
25		東：包含層	2.00	1.50	0.30	0.61	0.23	2.65
26		西：灰色砂	2.70	1.55	0.30	0.76	0.29	2.62
27		SD03	3.60	1.95	0.30	2.60	1.00	2.60
28		SD03	1.80	1.70	0.30	1.01	0.39	2.58
29		西：近世耕土層	3.20	1.40	0.40	1.60	0.61	2.62
30	楔形石器	SD02	3.60	2.40	0.60	7.41	2.90	2.55
31		東：古代耕土層	3.80	2.40	0.90	10.32	3.90	2.64
32		東：中世耕土層	4.20	2.40	0.70	8.92	3.51	2.54

（3）古墳時代の遺構・遺物

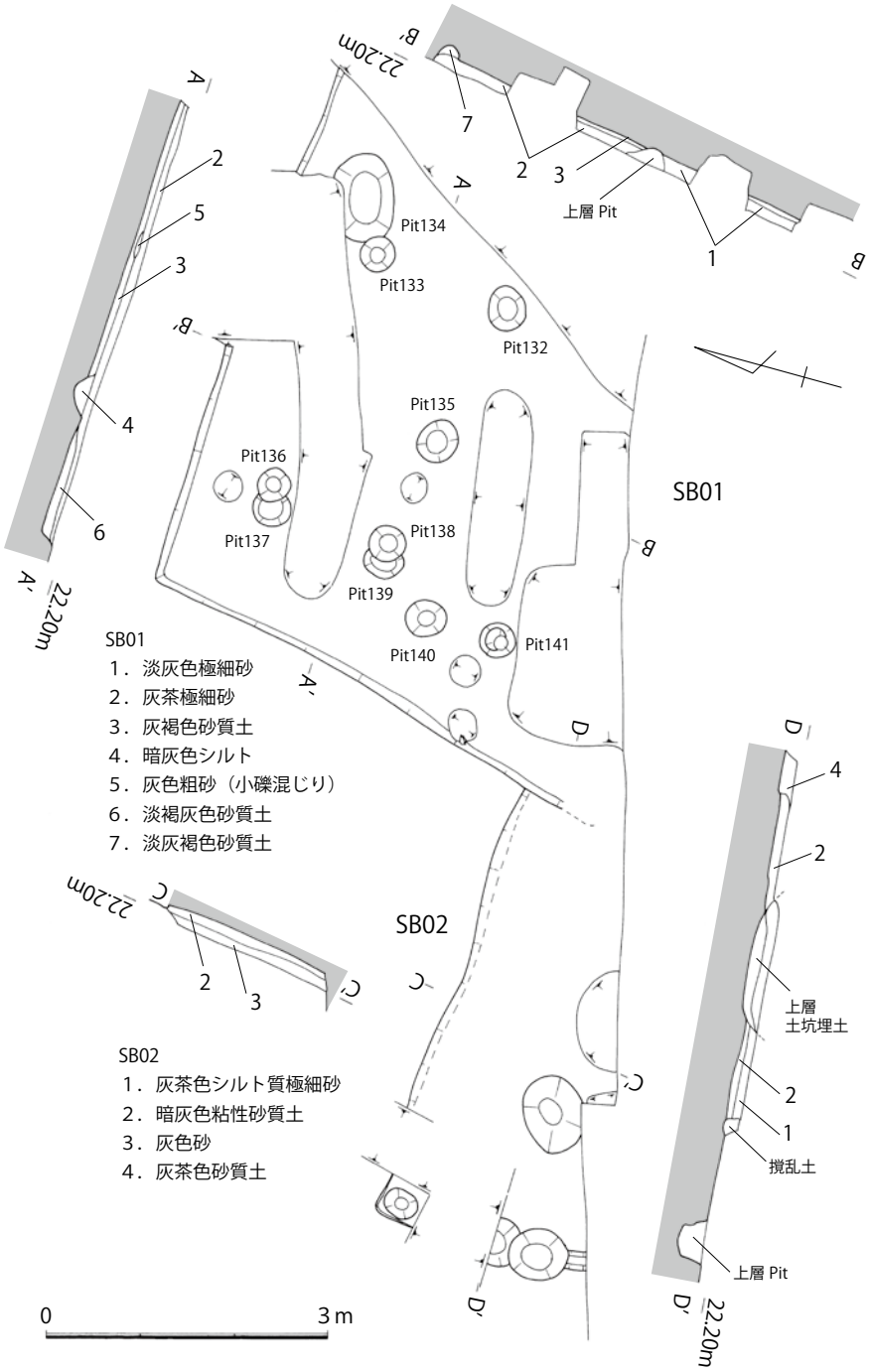
竪穴建物２棟、溝１条、土坑1基、柱穴を検出した。

【竪穴建物】

調査区南西部で竪穴建物と考えられる落ち込みを２基確認した。調査区外に続くことや攪乱の影響により全体の規模など不明な点が多い。

SB01

一辺約6.0mの平面方形を呈する落ち込みと考えられるが、南辺は不明瞭である。深さ0.15～0.2mで、上層の淡灰色極細砂の堆積を除去すると下部は不明瞭である。灰茶色極細砂層除去後の面で数基の柱穴を確認し、Pit132、135から古墳時代の須恵器片が出土



第17図
SB01・02平・断面図

したものの、主要な柱穴になるかは判然としない。北側、西側の壁際の一部で溝状の細く浅い落ち込みを検出したが、周壁溝であるかは明らかでない。

出土遺物のうち、図化できた33・34は須恵器の坏身である。33は復元口径11.0㎝、器高4.4㎝、底部外面1/2に回転ヘラ削りを施す。内面は回転ナデの後、不定方向のナデ調整。34は口径11.4㎝、器高4.4㎝で、底部は丸みを帯びる。回転ヘラ削りは全体の1/3強の範囲である。受部の張り出しは水平で、丸みを帯びて甘い。

SB02

SB01と同様、灰茶色のシルト質極細砂が堆積していたが、この層を除去すると明確なプランはほとんど残らない。南側が不明であるが、一辺5.0m程度の方形の落ち込みであり、建物であればその規模はSB01と同程度と考える。西辺の一部で周壁溝の可能性のある細い筋状の痕跡を確認したが浅かった。

出土遺物は少なく、35～39の須恵器坏身の口縁部は全周の1/5程度である。口径は12.0～14.0㎝前後、口縁の立ち上がりは低い。また坏蓋40･41の天井部と体部の境の稜は鈍い。

【溝】

SD02

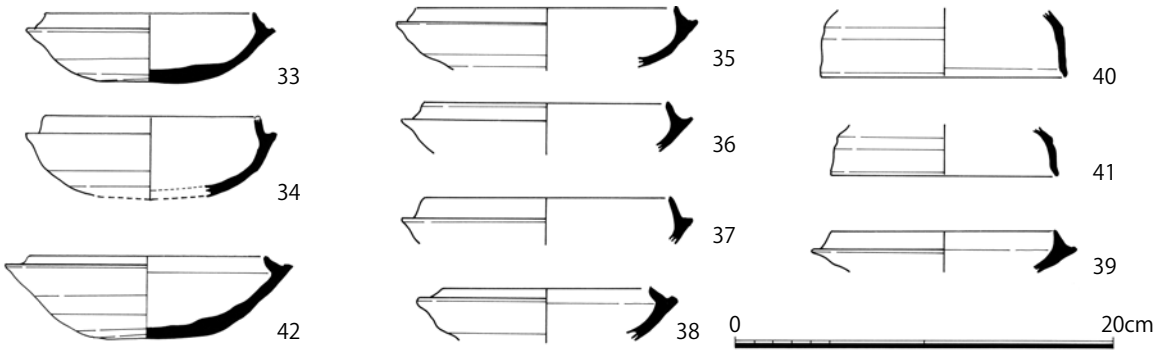
SB01の東側で検出した溝で、検出長は南北約8.4m、最大幅約0.8m、深さ約0.3mである。埋土は灰褐色粘質土を基調とし、一部洪水に伴う砂と互層となる。南側での溝の形状は、洪水砂の影響による地山面の凹凸との判別が困難である。

須恵器の坏身42が出土した。口径12.5㎝、器高4.4㎝、底部の1/3をヘラ削りし、口縁部の立ち上がりは低く内傾する。この坏が出土した部分は溝の周囲が長径2.0m、短径1.3m、深さ0.3mの楕円形の土坑状となる。暗灰色粘質土が堆積するSK01としていたが、土層観察では南側の凹凸面の一部と考えられ、溝が切り込む状況であった。

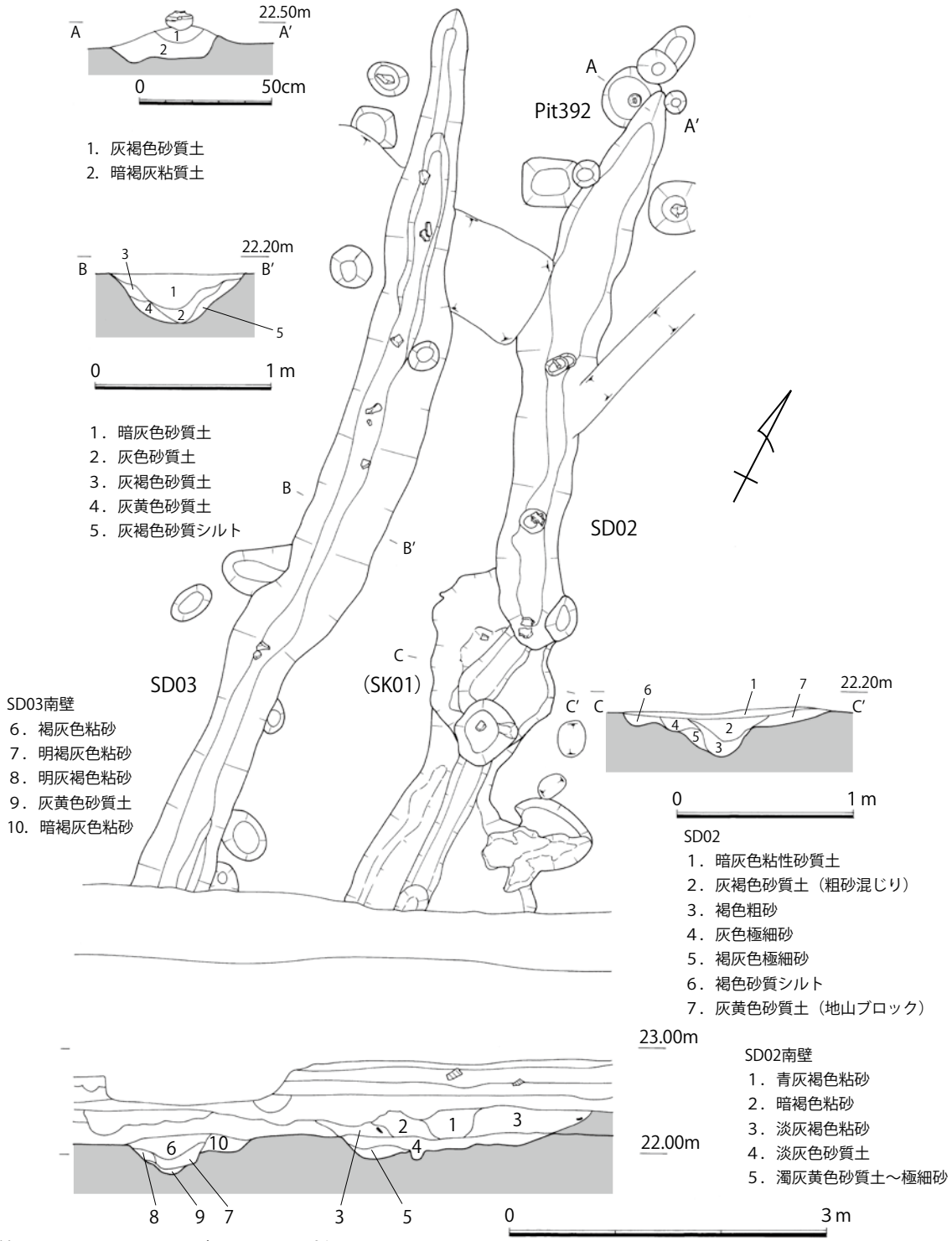
平面プラン検出の段階では、SB01がSB02を切り込むものと判断していたが、土層観察用のセクションでは明確な切り合いは確認できなかった。調査区の南壁でもSB01の埋土は確認できず、重要な箇所は近代の溝により削られるため、状況は明らかでない。南壁近くでコーナーを形成したものと想定している。出土遺物からはSB02が後出と考えられる。

周辺ではSD02に切られる柱穴Pit329から瓔43が出土した。最大径10.4㎝、穿孔の上下に沈線が１条ずつ巡り、中は刺突文で飾る。柱穴の規模は径0.3m、深さ0.2mである。

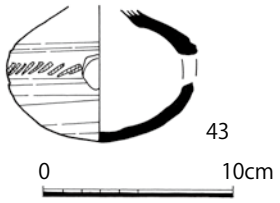
また調査区東半の中世耕土層より滑石製の紡錘車44が出土している。破損し上半部を欠く。最大径3.4㎝、残存高は0.8㎝である。線刻による文様などは認められない。



第18図　SB01・02及びSD02出土遺物　　33・34：SB01　35-41：SB02　42：SD02



第19図　SD02・03及びPit392平・断面図



第20図　Pit392出土遺物

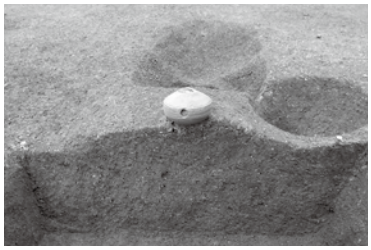
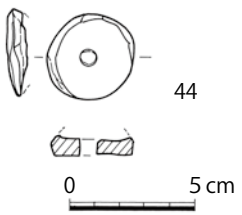


写真９　Pit392遺物出土状況（南から）



第21図　旧耕土層出土紡錘車実測図

（4）古代の遺構・遺物

調査区全域で約700基の柱穴を検出した。柱穴からの出土遺物は少なく、小片のものが多い。時期決定が困難であったが、ごく一部Pit392のような古墳時代や飛鳥時代の柱穴が存在するようだが、ほとんどの柱穴は奈良～平安時代に属するものと考えられる。

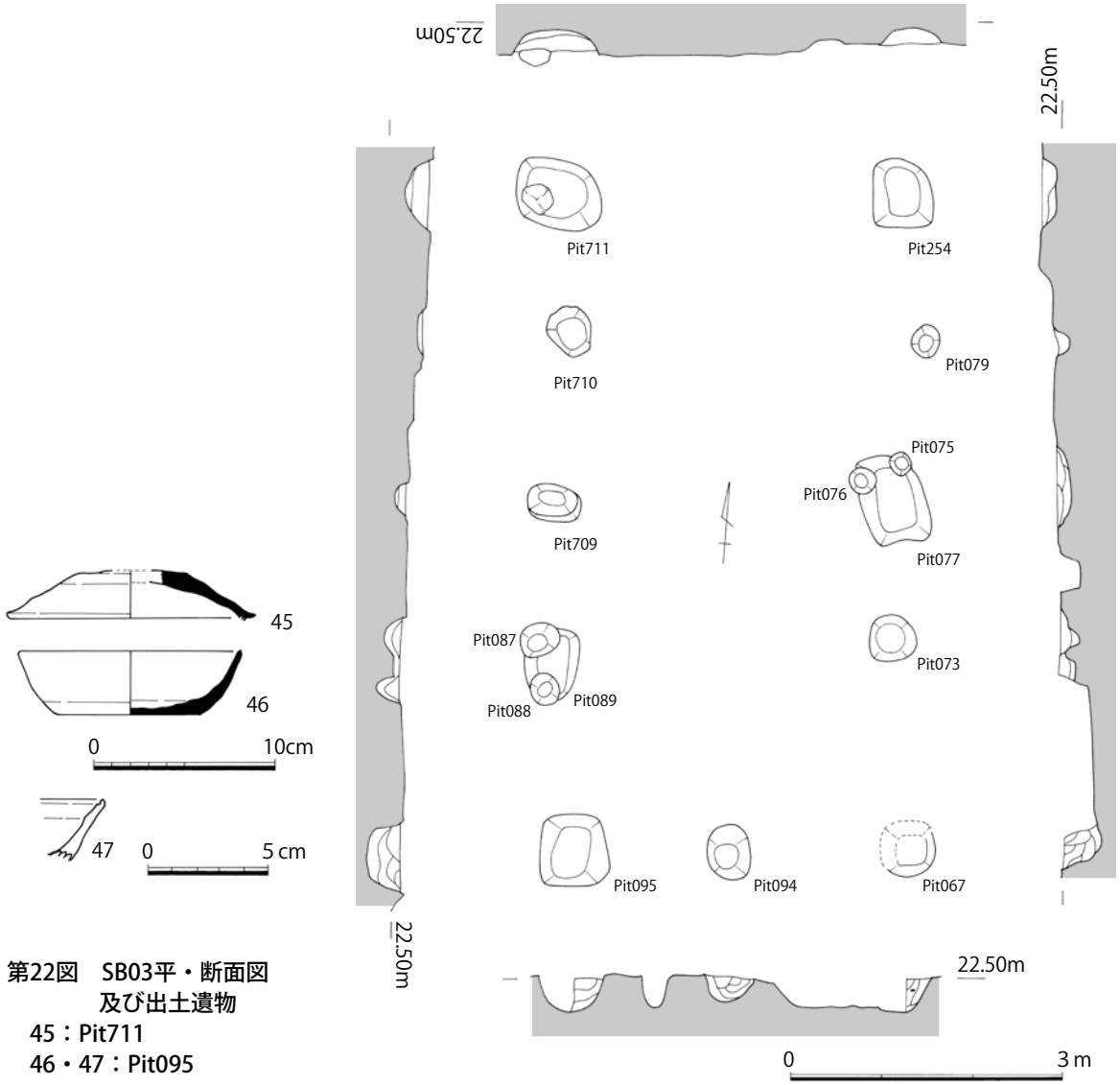
10棟の掘立柱建物を復元したほか、井戸３基、土坑を検出した。

【掘立柱建物】

SB03

東西２間（約3.6m）×南北４間（約7.2m）、北側に伸びる可能性がある。建物の方位はＮ２°Ｗである。柱間が広く、東側の柱掘形の並びは歪である。柱掘形は、Pit077、089、711が長辺約0.7mの長方形で、そのほかは円形である。Pit077、089の掘形内で径0.2mの２基の穴を検出した。柱痕跡か別の柱穴か判然としない。Pit711では30㎝大の石が埋土上層より出土した。

須恵器の蓋45は天井部に粗いヘラ削りの痕を残す。46の坏は底部からの立ち上がりに厚みはあるが、口縁部にかけて薄くなる。47は土師器の坏で、口縁端部に沈線による小さな段が形成される。図化し得た土器はやや古相を示すものと考えられる。

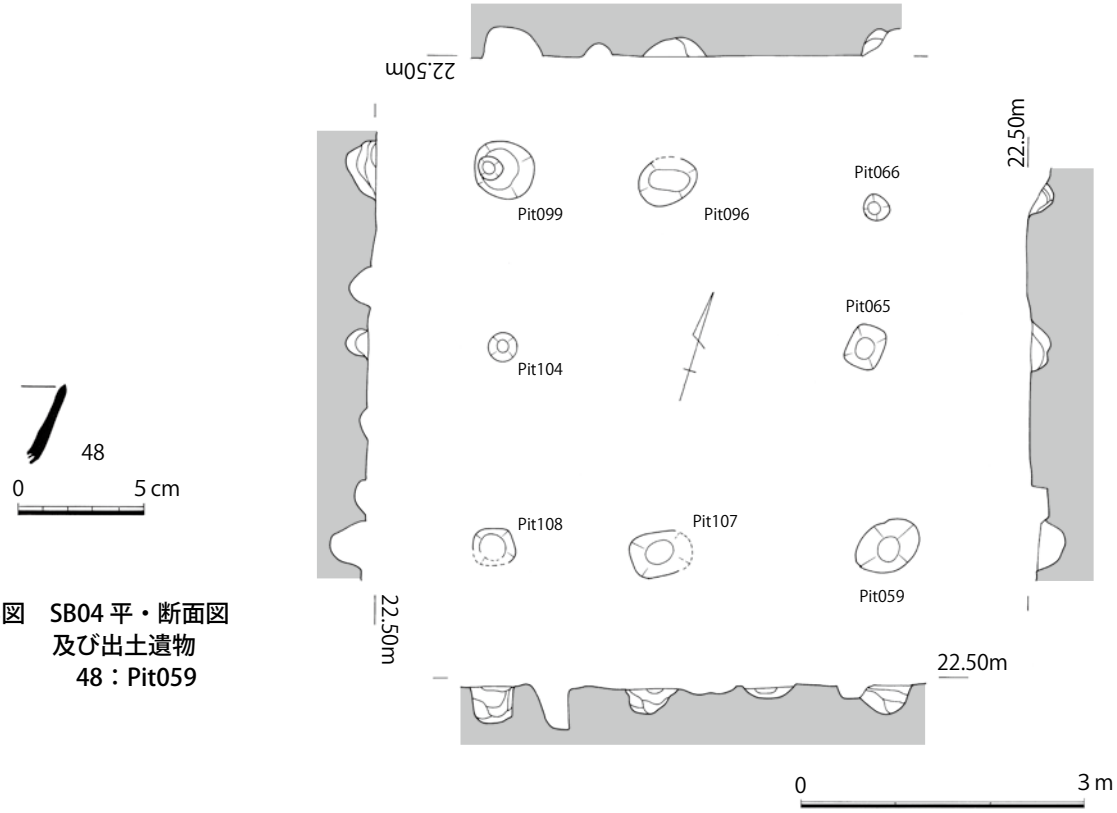


第22図　SB03平・断面図
及び出土遺物
45：Pit711
46・47：Pit095

SB04

東西２間（約4.1m）×南北２間（約4.0m）の側柱のみで構成される建物と考えられる。方位はＮ12°Ｗである。柱穴は径0.2～0.6m、深さ0.2～0.5mで、北東隅のPit066と西辺中央のPit104の規模が小さい。中央の柱列と東辺の柱列との間は2.1mで、西辺との間隔1.6mに比べ、やや柱間が広い。SB03と切り合い関係にあり、後出する建物である。

出土遺物は少量でいずれも小片であった。図示し得たのは須恵器の坏48のみである。外側に直線的に伸びる体部をもつ。平安時代頃のものと考えられる。

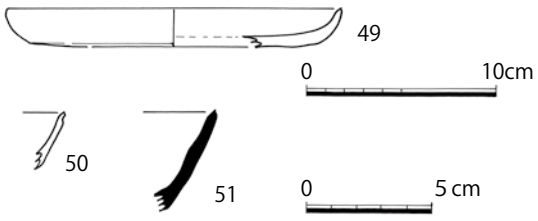


第23図　SB04 平・断面図
及び出土遺物
48：Pit059

SB05

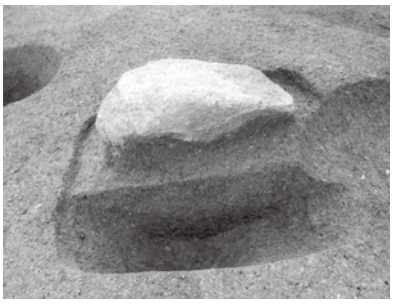
調査区北西で検出した東西４間（約7.2m）×南北３間（約6.4m）の建物である。方位はＮ２°Ｗである。攪乱の影響も大きいが、部分的に柱穴が確認されず、当初からなかったと思われる箇所がある。柱穴は径、または一辺が0.2～0.7m、深さ0.1～0.5mで、ばらつきがある。南東隅のPit507、512は平面方形で深さがある。Pit221では一辺40㎝ほどの石が据えられていた。

図示し得た遺物は３点である。49は復元口径18.0㎝の土師器の皿である。表面の摩耗がひどいが、全体にナデ調整と思われる。50は土師器の坏の小片で、口縁端部内側に沈線による段が付く。51は須恵器の坏で体部は直線的に伸びる。



第24図　SB05出土遺物
49・50：Pit173、51：Pit208

第25図　SB05平・断面図



Pit221　（北から）

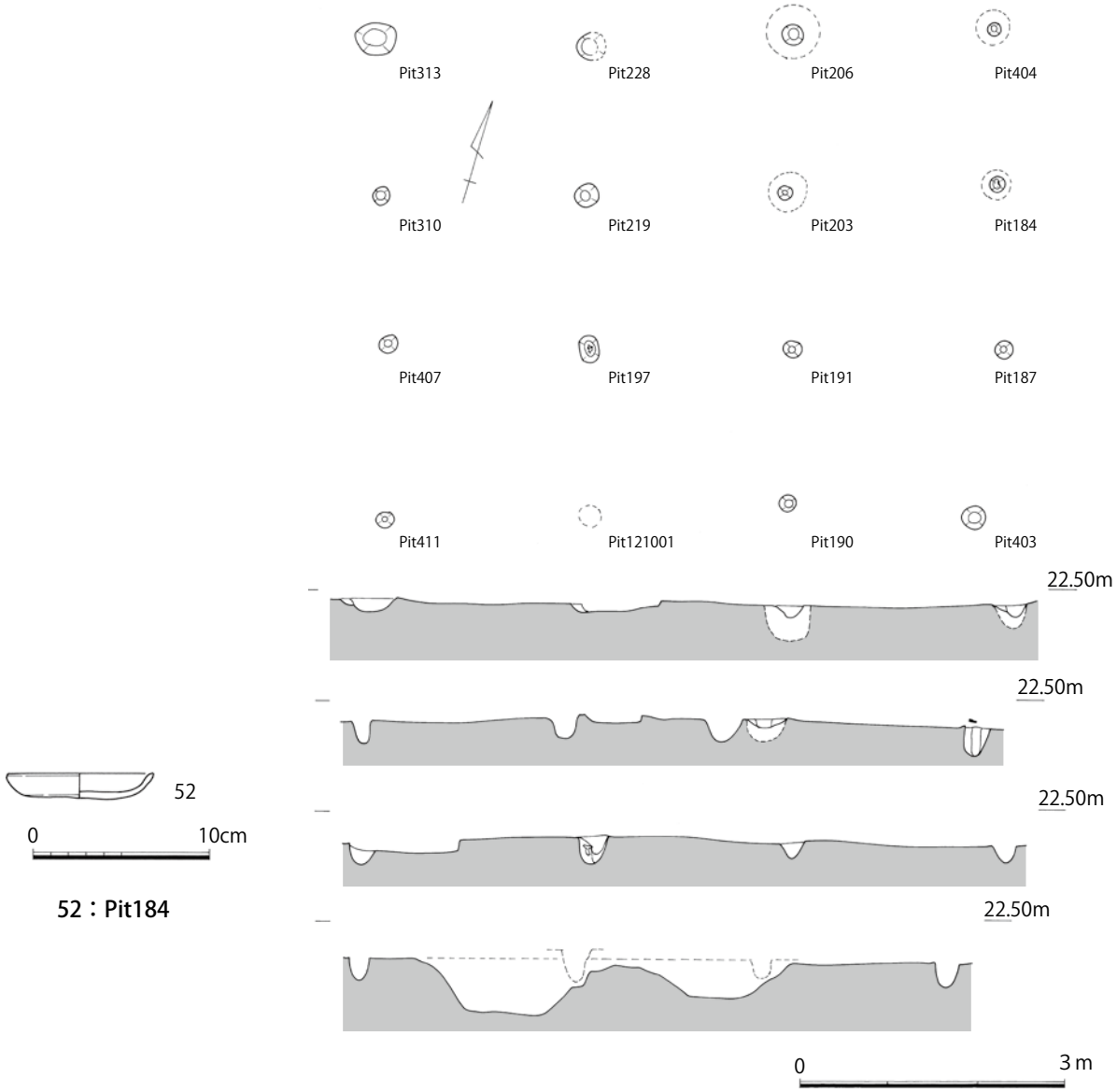
Pit173　（東から）

写真10　SB05
柱穴検出状況

SB06

調査区南西部で検出した東西３間（約7.0m）×南北３間（約5.6m）、総柱の建物である。方位はＮ15°Ｗで、南側に伸びていた可能性がある。ほとんどの柱穴では黒褐色粘質土を単一埋土とする径0.1～0.15mの円形の痕跡を検出したが、建物の北東に位置するPit184、203、206、404の４基の柱穴では黒褐色土の周囲の土色に変化が認められた。掘形とも考えられるが明確なものとはいい難い。

図示できた遺物にPit184出土の土師器の皿52がある。出土状況より、柱の抜き取り後に埋納されたものと考えられる。口径8.3㎝、口縁部を強くナデ上げる。他にPit197から須恵器の坏や土師器の鍋の脚部、Pit411から瓦器埦の口縁部片が出土したが、いずれも小片であった。平安時代後半の建物と考えられる。



第26図　SB06平・断面図及び出土遺物

SB07

調査区中央北端で検出した東西５間（約4.5m）×南北１間（約1.0m）の柱列である。北側や東側に伸びていた可能性がある。柱穴の掘形は径0.3～0.4m、深さは0.2～0.3m、柱間は狭く、柵列の可能性も高い。柱列の方向軸は他の建物と異なりN36°Eである。Pit262、267の埋土には焼土や焼土塊の小片が混じる。

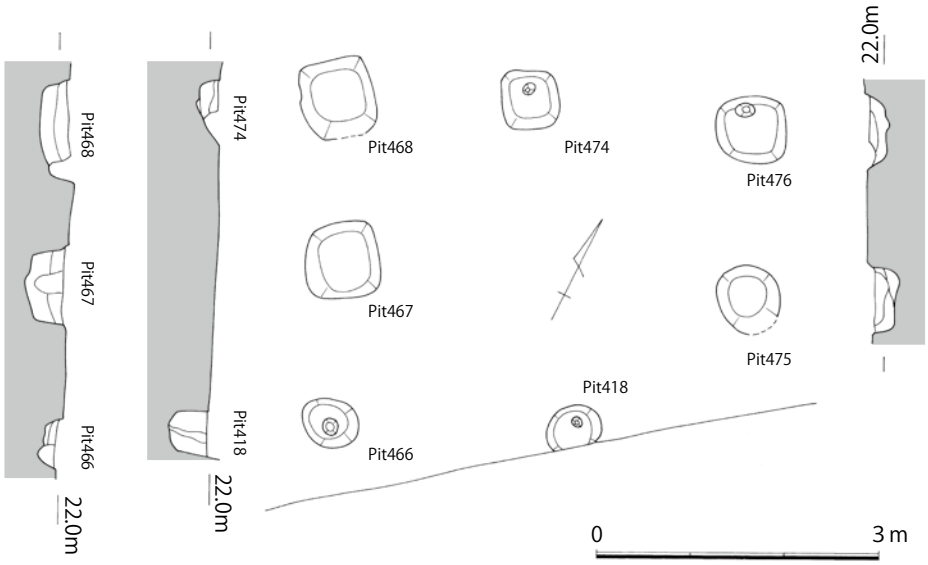
出土遺物は小片が多い。図示した53は復元口径11.0㎝、残存高5.0㎝の小型の土師器の粗製の甕で、外面は粗いハケ調整、体部内面は板状工具によるナデ調整、緩く外反する口縁部の内側は粗いハケ調整である。頸部に指押えの痕跡がわずかに残る。

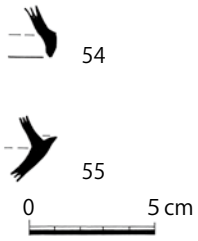
第27図　SB07平・断面図及び出土遺物

SB08

調査区南東部で検出した建物で、南東隅の柱を含め南側の状況は明確でないが、柱穴の配置より東西２間（約4.5m）×南北２間（約3.6m）の側柱のみの建物と推測する。建物の方位は北から22°西に傾く。柱痕は確認できていないが、Pit474、476などの底面では小さな窪みを検出しており、柱の沈み込みによるものと考える。窪みの径は0.15m ほどである。

出土遺物は図化できたものが少ない。55は須恵器の坏身片で口縁部の立ち上がりはやや内傾し器壁は薄い。受部は水平に小さく伸びる。54は高坏と考えられる脚部の小片である。このほか須恵器の坏や土師器の皿の小片が出土しており、54・55はやや古相を示すもので混入の可能性がある。





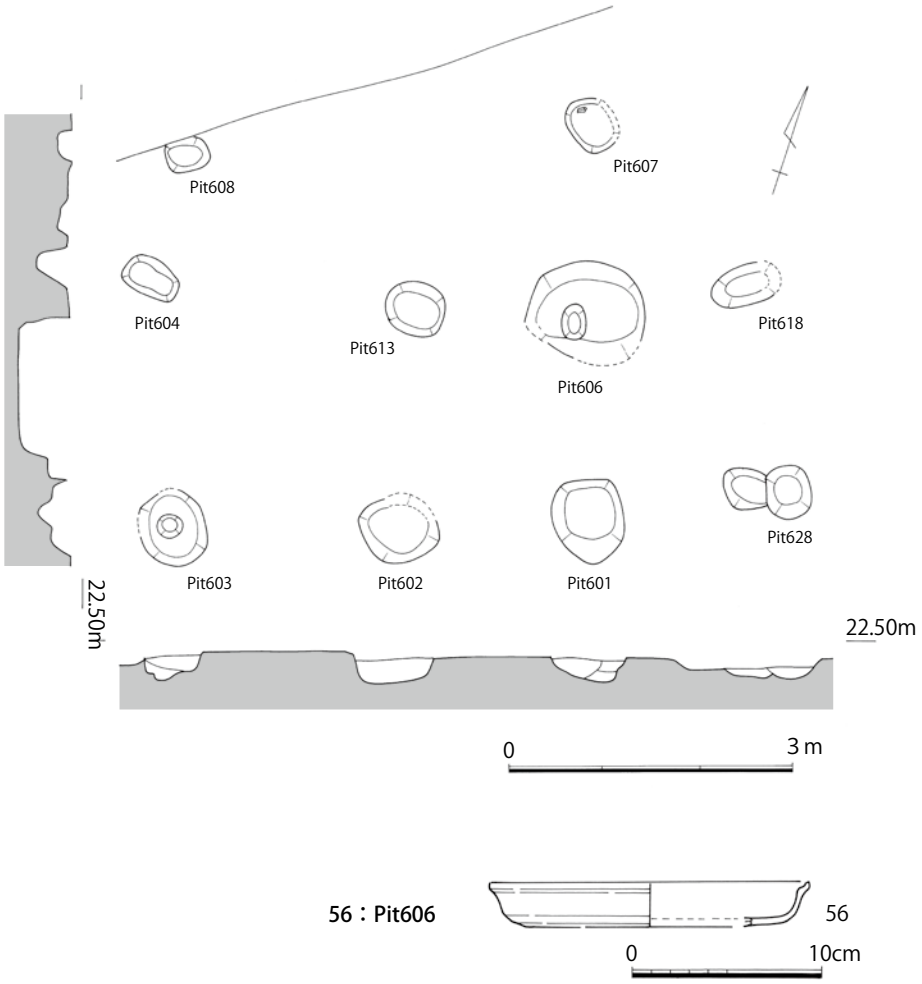
54：Pit475
55：Pit476

第28図　SB08平・断面図及び出土遺物

SB09

調査区北東部で検出した。規模は東西３間（約6.4m）×南北２間（約4.3m）で、径0.5m、深さ0.2mほどの柱穴を主とするが、Pit606の掘形の平面形は長径1.0m×短径0.6mで、やや大きな楕円形を呈する。建物の方位はＮ18°Ｗである。柱間の長さにばらつきがあり、広いところで約2.5m、狭いところでは1.8mほどである。建物の東半、Pit601、606、618、628の柱穴に重複する位置で平面形が長楕円形を呈する落ち込みであるSX01を検出した。埋土に炭や焼土を含み、やや砂質を帯びた土が混じる。土間状の部分があった可能性がある。

図化し得た出土遺物56は土師器の皿で、強いナデにより体部から口縁部にかけて屈曲し、端部はやや肥厚する。復元口径17.0㎝、器高2.4㎝である。

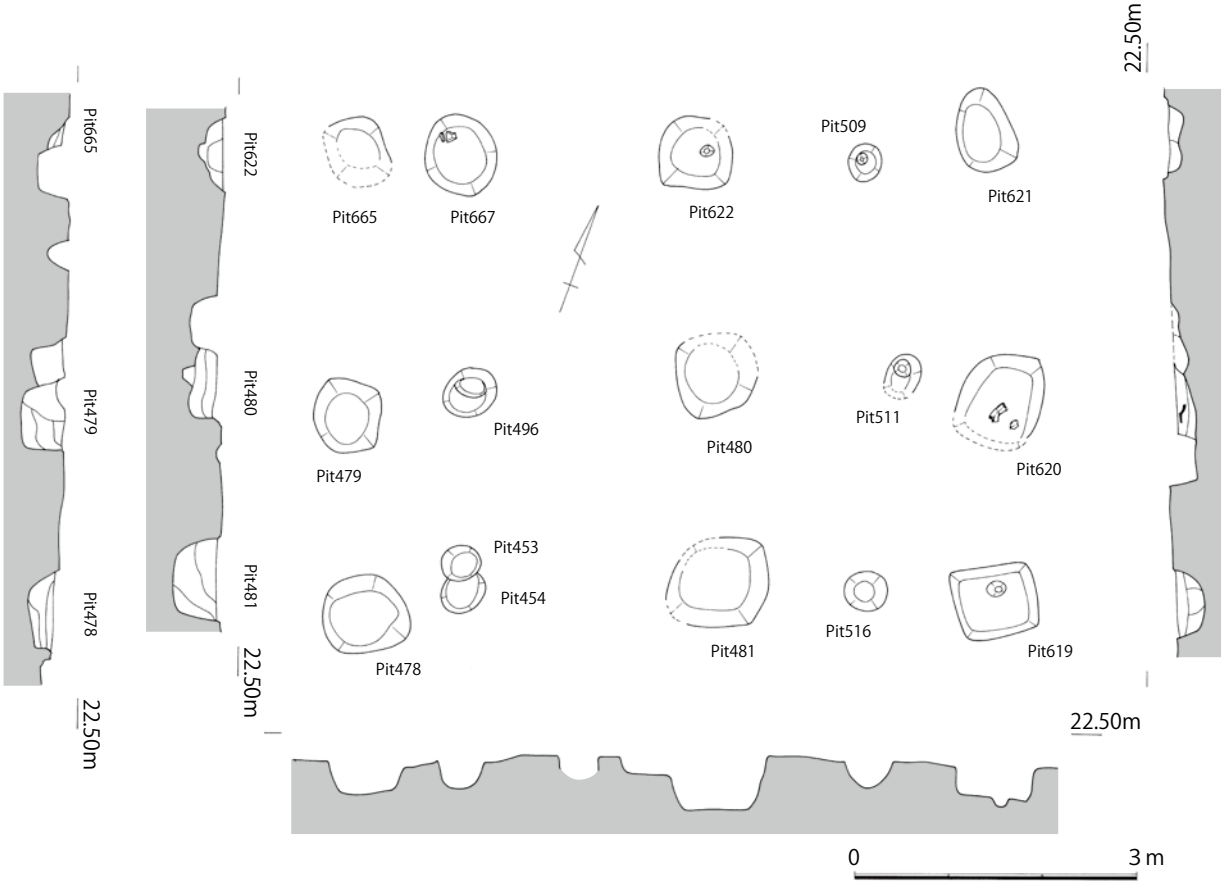


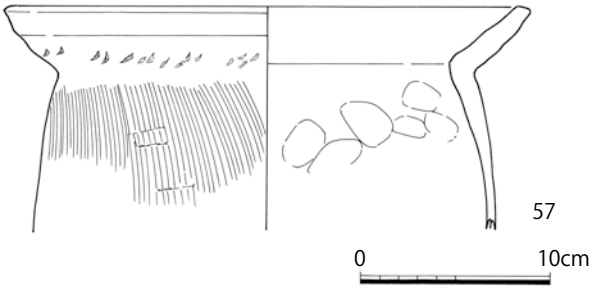
第29図　SB09平・断面図及び出土遺物

SB10

東西４間（約6.5m）×南北２間（約5.2m）の建物で、方位はＮ18°Ｗである。径、または一辺0.5～0.8mの柱穴と径0.2～0.5mの円形の大小の柱穴列が交互に並ぶ。大型の柱穴の間隔は約3.0mあり、小型の柱穴はその間にやや歪に並ぶ。小型の柱穴の深さは0.2mと大型の柱穴の半分ほどである。建物が重複する可能性もあるが、小型の柱穴は束のようなものと考えられ、ここでは１棟の建物と考えておく。

図化できた遺物は少ない。土師器の甕57は復元口径28.0㎝、外面を細かいハケにより調整し、頸部に２個１対の間隔で爪形の刻みを入れる。このほかには土師器の皿の小片などがわずかに出土した。





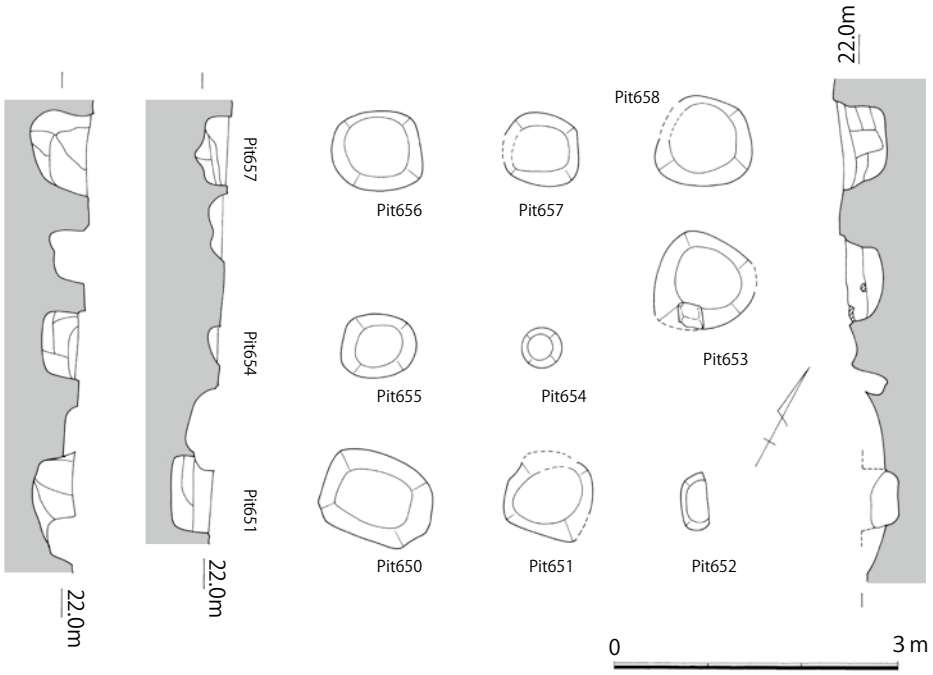
第30図　SB10 平・断面図
及び出土遺物
57：Pit620

写真11　SB10柱穴検出状況
左 Pit620（東から）
右 Pit516（東から）

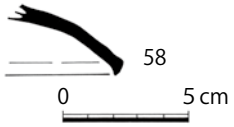
SB11

東西２間（約3.6m）×南北２間（約3.8m）、位置的にSK08と切り合い関係にあるが、埋土が近似し、検出時には前後関係は明らかにできなかった。東に伸びた可能性があるが、後世の溝SD09により削られこれも明らかでない。中央の柱穴１基が径0.3mと規模は小さいが、総柱の建物になるものと考えられる。建物の方位はＮ23°Ｗである。側柱は長径0.7m、短径0.6mの平面隅丸方形、または長方形の掘形の柱穴である。柱痕跡が確認できた柱穴での柱の径は約0.2mと推測される。

図示し得た出土遺物は須恵器の蓋58のみである。体部はやや屈曲して丸みを帯びる。口縁端部は強いナデにより外側に面をつくる。



第31図　SB11 平・断面図



第32図　SB11出土遺物
58：Pit653

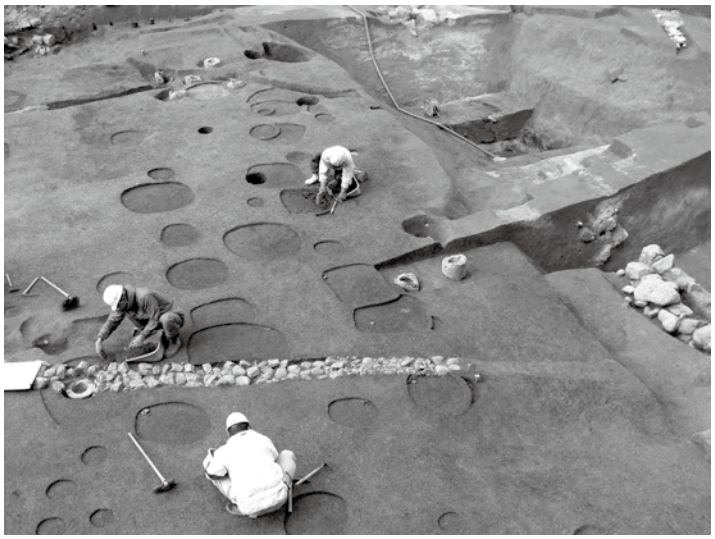
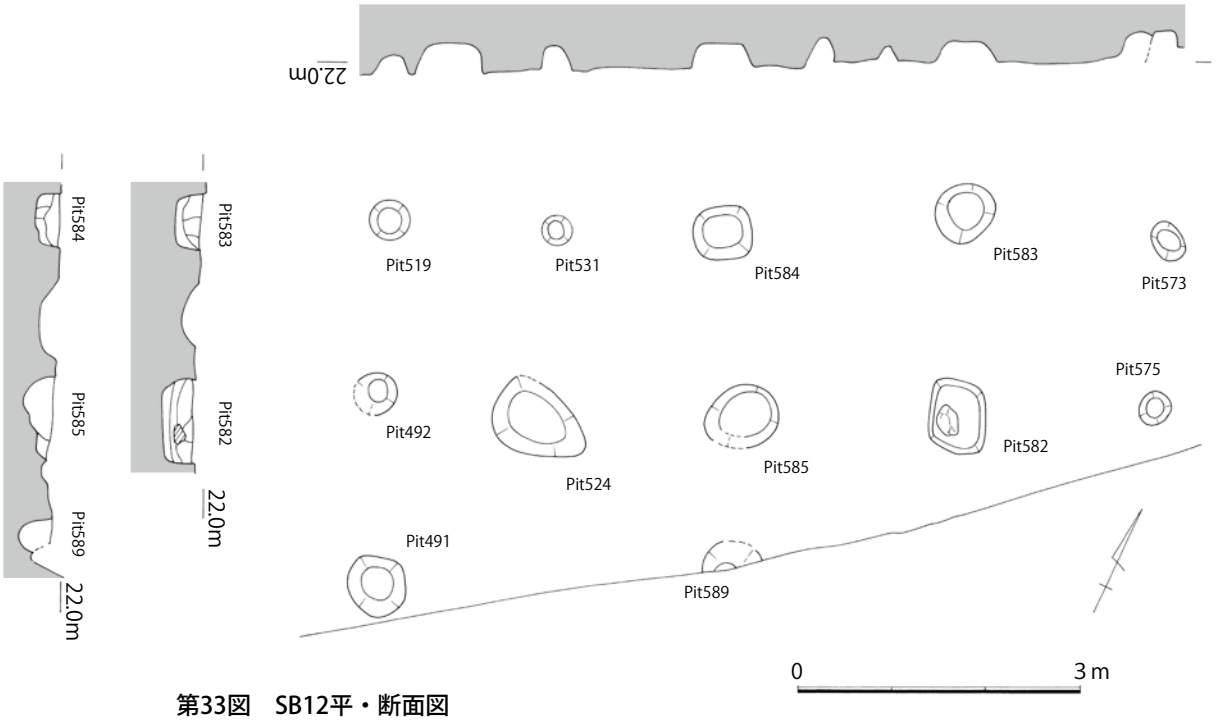


写真12　SB11検出作業風景

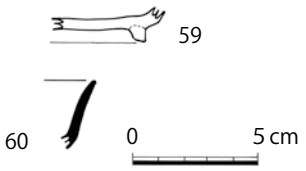
SB12

調査区の南東部で東西４間（約8.2m）×南北２間（約3.8m）分を検出した。南側への拡がりの詳細は不明である。建物の方向は真北より西へ25度振る。Pit582で小さいが礎盤と考える石を検出した。Pit582や583、584で確認した柱痕跡から、柱の径は0.15mほどと推測される。

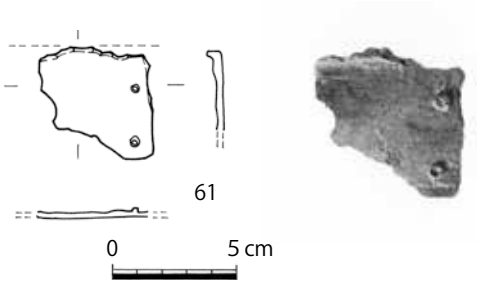
出土遺物に乏しいが、59は土師器椀の底部片で、断面台形の高台が付く。60は須恵器坏の破片でわずかに外反する口縁を小さくすぼめる。



第33図　SB12平・断面図



第34図　SB12出土遺物
59：Pit582、60：Pit585



第35図　旧耕土層出土巡方実測図
及び写真（写真13）

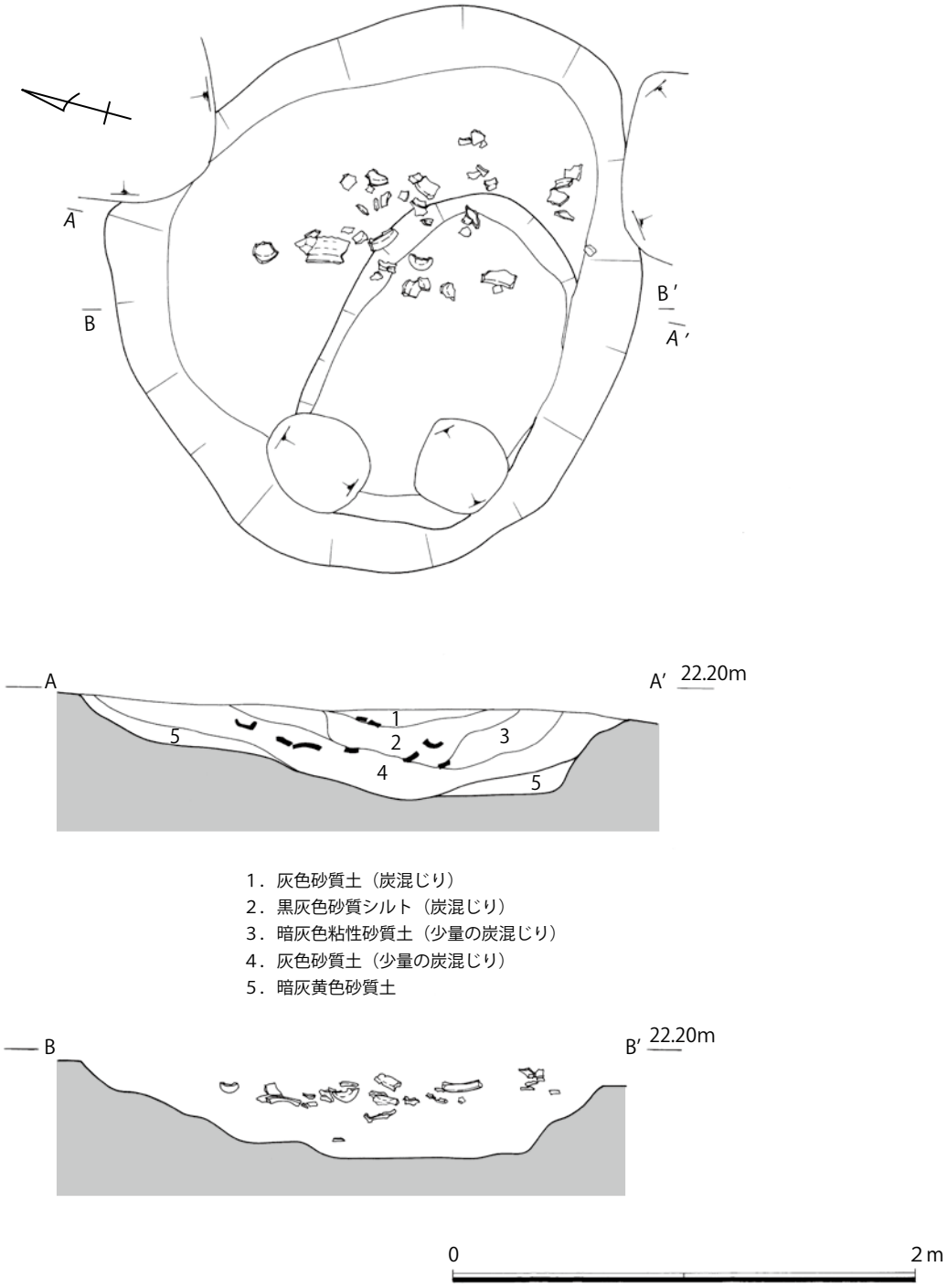
調査区全体で検出した柱穴の埋土は、灰色系の粘質土、暗灰色系の粘質土、暗褐色系の粘質土に分類できる。灰色系埋土のものは少なく、径0.2～0.3mで、出土遺物から中世を含むそれ以降の時代のものと考える。暗灰色、暗褐色系の埋土をもつ柱穴は、一辺0.7mほどの平面方形の掘形のものが多くみられ、規模が大きい。遺物の出土に乏しいが奈良～平安時代のものと推測する。柱穴内に柱痕や根石が遺存するものはわずかであり、それらを施した痕跡は少ない。

またSB11とSB12の間の上層に堆積する中世旧耕土層より銅製の巡方と考えられる破片61が出土した。全体の大きさ、形状などは不明である。

【土坑】

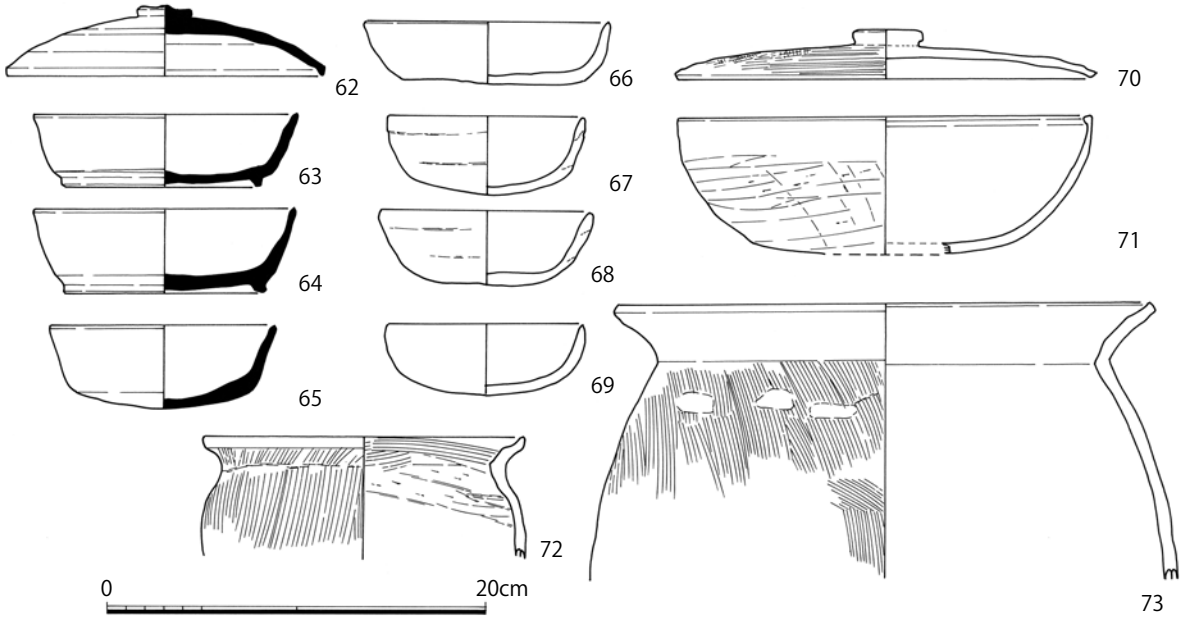
SK07

調査区中央で検出した長径約2.5m、短径約2.3m、平面形がやや歪な円形の土坑で、皿状に窪み、南側が一段深くなる。最深部の深さ約0.3mである。上層には黒灰色や暗灰色のやや粘性のある砂質土、下層に灰色砂質土が堆積し、埋土と周囲に炭の分布が認められる。埋土上層の黒灰色砂質シルト層からは完形の土器を含む比較的多くの遺物が出土したが、下層や南側の一段下がる底には小さな破片がわずかに含まれる程度であった。



第36図　SK07 平・断面図

出土遺物は、62が口径16.8㎝の須恵器蓋で、端部は内側に強く屈曲する。平たい円形のつまみが付く。63・64は須恵器の坏で口径14.0㎝、器高4.0㎝前後で、緩やかに外反する体部に断面台形の高台が付く。65は底部がやや丸まった須恵器の坏で、口径12.0㎝、器高4.4㎝である。土師器の坏66は口径13.2㎝、全体をナデ成形する。67と68は粗製の坏で粘土紐の積み上げ痕を残す。69は体部が丸形の坏で口径10.4㎝、器高3.8㎝である。70は大型の土師器の蓋で口径22.6㎝、扁平な体部に円形の大き目のつまみが付く。外面は細かい格子ミガキを暗文とする。口縁端部は丸く収める。土師器の埦71は口径22.0㎝、器高7.2㎝、口縁端部は内側に張り出し、上面は平たくなる。外側の調整は1.0～1.5㎝幅のケズリの後、ナデ調整である。蓋70と埦71はセットである。72は小型の土師器の甕で、口径17.0㎝、短く外反する口縁端部を上方に摘み上げる。外面の頸部以下と口縁内側に粗いハケ調整の痕跡が残る。内面に板状工具によるナデ痕がみえる。73は口径28.0㎝の土師器の甕で口縁部は大きく外反する。内面はナデ調整、外面は８本／㎝の細かいハケによる調整である。奈良時代後半のものと考えられる。



第37図　SK07出土遺物

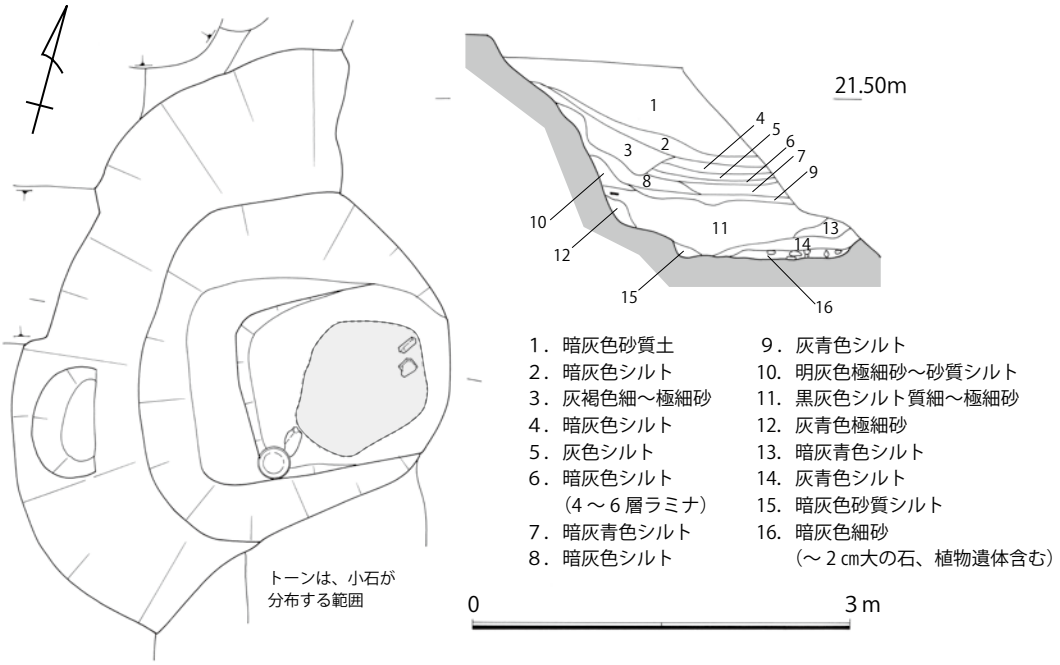
SK08

調査区の東端、後述する中世末～近世にかけての溝SD09の西肩で検出した土坑である。溝により切られるが、一辺約3.0ｍの平面隅丸方形の土坑と考えられる。検出した深さは約1.3ｍで、埋土は砂層とシルト層が互層堆積し、滞水を繰り返したものと考えられる。底の中央の径0.5ｍの範囲に小礫が拡がる。自然堆積か、あるいは意図して敷かれたものか明らかではない。礫の直上には植物遺体を含む層の堆積があった。

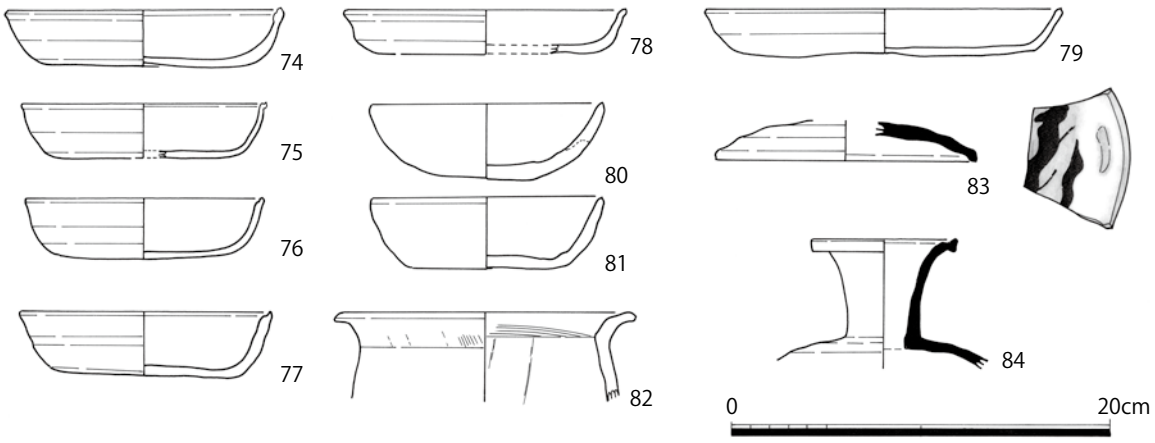
また溝SD09の西斜面下方の堆積から奈良時代の遺物がまとまって出土した。この堆積は、SD09の流れが肩部に残っていたSK08の埋土を削り落としたか、あるいは崩落したものと考えられる。

出土遺物の多くは、埋土上層の暗灰色砂質土とSD09の下方に堆積した崩落土から出土した。下層では、植物遺体層の上部から完形の土師器の皿74が１点とわずかに数点の土器片が出土、中間層である暗灰色と灰色の互層となるシルト層の堆積からの遺物の出土はなかった。

74～77は土師器の坏である。78と79は土師器の皿で、74～79は精良な土器である。80と81は粗製の坏で、指押さえとナデ成形である。82は小型の土師器の甕で、体部外面と口縁部内側はハケ調整、体部内面には板状工具によるナデの痕跡が残る。83は植物遺体上部から出土した須恵器の蓋の破片で、内側に墨痕が認められ、硯に転用されたものである。84は口径7.8㎝の小型の長頸壺の頸部である。奈良時代後半の遺構と考えられる。



第38図　SK08平・断面図



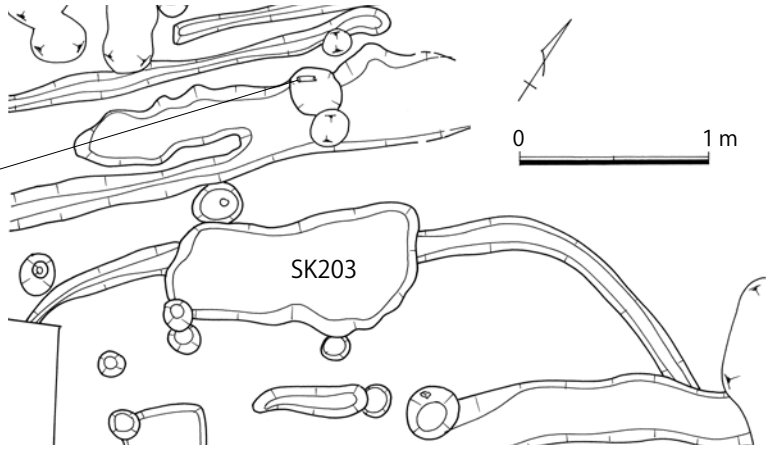
第39図　SK08出土遺物

SK203

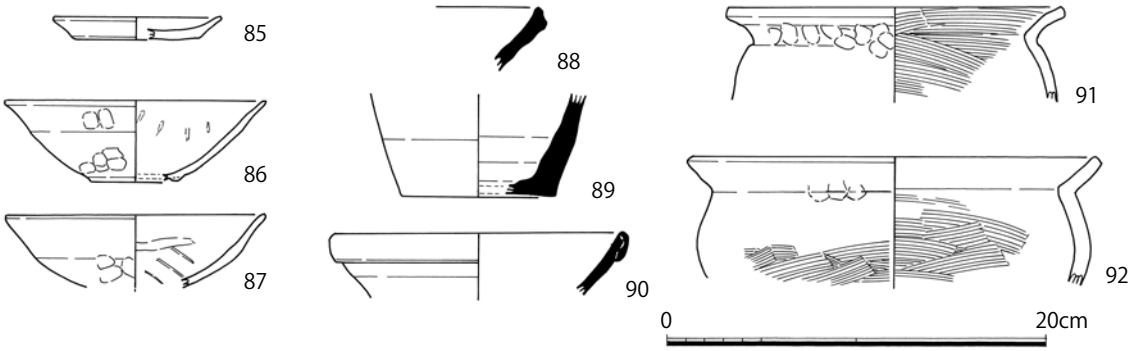
調査区中央南半において検出した長辺約1.5m、短辺約0.9m、深さ約0.2mの平面長方形の落ち込みである。灰色砂を埋土とする。周囲との差はあまり大きくはないが、浅い窪地地形の底に近い。

出土遺物は、85が瓦器の小皿で口径9.0㎝、器壁は肉厚である。86・87は瓦器の椀で内面に微かに並行するミガキ痕がみえる。外面の指押さえの跡も不明瞭である。88は須恵器の鉢の口縁部で、89は底径8.2㎝の須恵器の壺の底部である。90はⅣ類の白磁碗で、釉調は良い。土師器の甕91は頸部外側に指押さえ痕が明瞭に残る。内側は細かいハケ調整である。92も内外面ともに細かいハケがみえる。いずれも体部は丸みを帯びる。

周辺では SK205など、SK203と同じく砂を埋土とする浅い落ち込み 4 基を検出した。



第40図　SK203平面図



第41図　SK203出土遺物

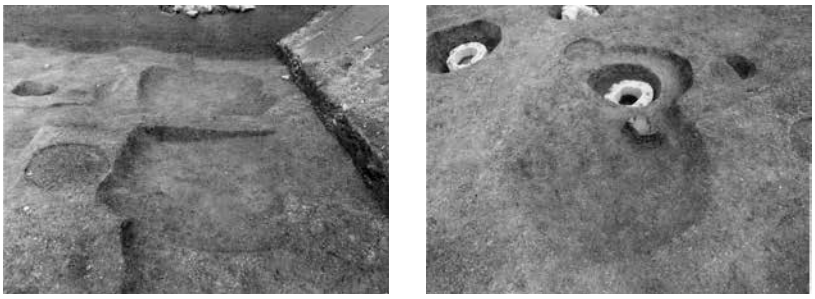


写真14
SK203及び SK205検出状況
左 SK203（北から）
右 SK205（西から）

【井戸】

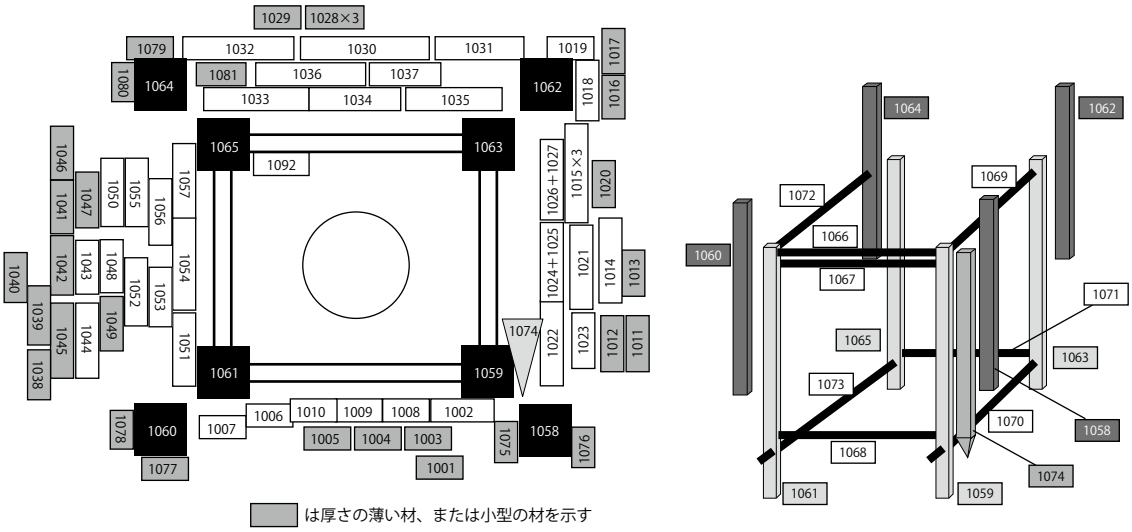
調査区の中央で３基の井戸を検出した。井戸の南側は浅い窪地となり、灰色細砂～粗砂が堆積する。井戸はこの窪みに沿う位置に構築されていた。

SE01

南北約2.8m、東西約2.4m、平面楕円形の落ち込みを検出した。南側は後世の耕作地の形成に伴う段と現代建物のコンクリート基礎により削平、攪乱され、当初の形を残していない。北側に幅0.4mほどの緩やかな傾斜部が巡り、本来は一辺3.2mほどの隅丸方形の掘形であったと推測される。検出面下0.5mで井戸側の上端を検出し、この部分までは北側を中心に拳大の石の混じる層が堆積する。この層を取り除くと30～50㎝大の石を１～２段に積んで方形にめぐらせた状況を確認した。上部に石組み構造をもっていたと考えられる。井戸は縦板組隅柱横桟留構造である。隅柱が計８本、２組の井戸側を検出した点が特異である。検出面から掘形最深部までの深さは約1.8mで、検出面から1.0m下までの幅は2.0m、それ以下は井戸側幅に近い約1.0mとなり、断面の形状は漏斗状となる。二重となった外側の井戸側は掘形上部の幅広の部分に収まる。縦板は65枚を取り上げた。取り上げ時に崩壊した材を含むと70枚近くの材が使用されていた。内側の木組みは底から35～45㎝に下の横桟、検出レベルに上の桟がある。上の枘穴は腐食により上半を失う。北辺の上桟は原位置になかったが、南辺上部より出土した1066材が相当するものと考える。

一方、外側の柱材には下方に枘穴はあるものの、横桟材を伴っていない。また南東隅の内側の柱1059材と外側の柱1058材の間に1074の杭状の材が差し込まれていた。外側の柱の周りには材1075～1080材など、幅、長さともに小さな材が添えてある。北東外側隅柱1062材の周りにも1018、1019材などの厚みはあるが細く短い材が添えてある。なお、横桟1072材は南西内側隅柱から北西の外側隅柱に挿入されていた。

内側の横桟は長さ70～78㎝、枘部を除く内法寸法は58㎝～62㎝、南辺から出土した北辺の上桟と考えた1066材のみ72㎝と10㎝ほど長いが、枘の出は小さい。隅柱材の長さ（高さ）は外側が74～87㎝、内側は98～102㎝である。外側の３本は84㎝か87

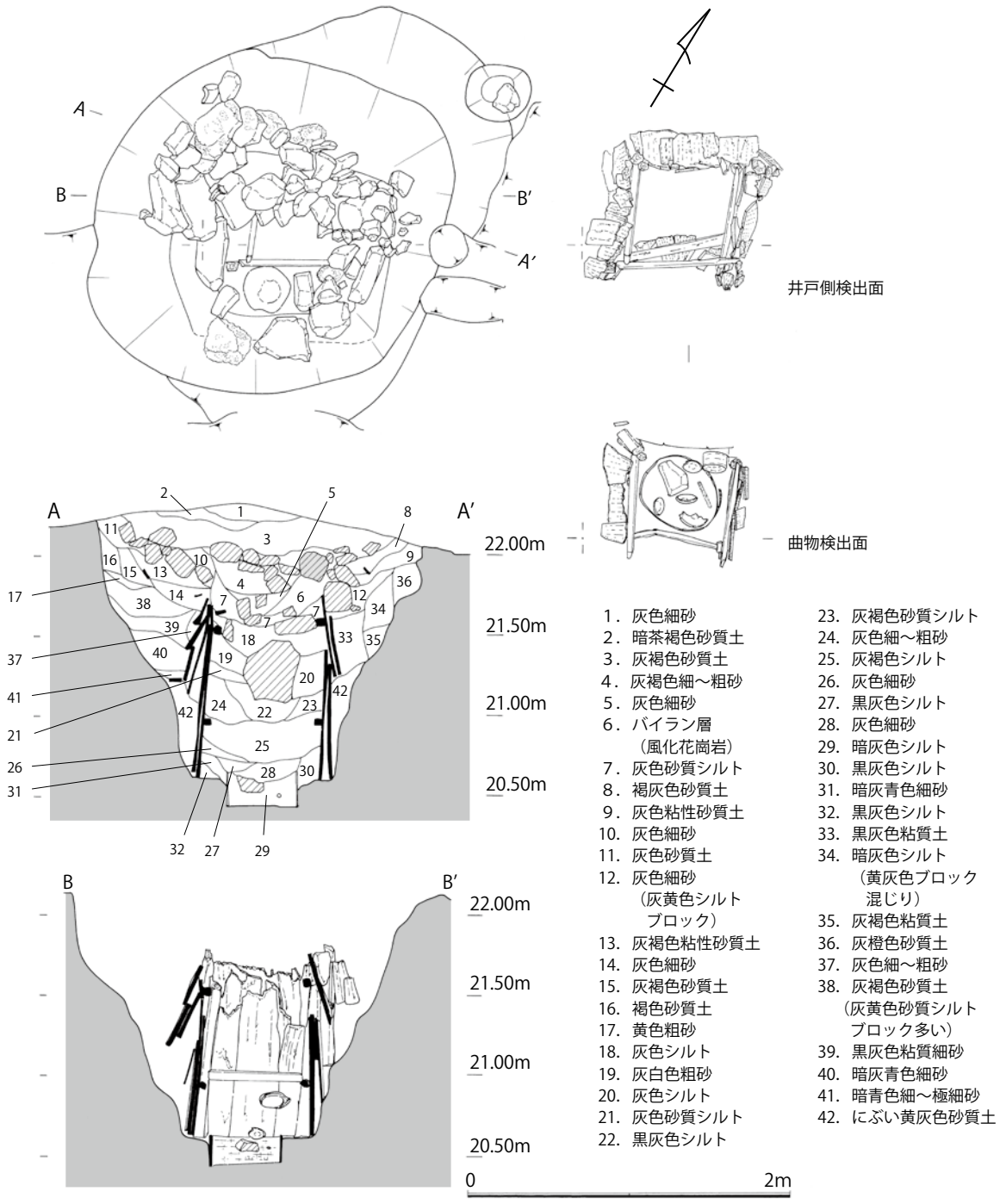


井戸側材　　井戸枠材

第42図　SE01井戸側模式図

cmで、74cmの南西外1060材のみ極端に短い。枘穴の穿孔状況は、外側の隅柱1058材はＬ字に貫通しているが、他は貫通せずに途中で止まる。北東1062材は浅い２つの穴が並び、施工の際に開け直したものと考えられる。内側隅柱の枘穴は直交穿孔されるが、その間の木壁はいずれも１cmほどの隙間しかない。貫通、非貫通と穿孔状況で内外隅柱は異なる。

多量に使用される側板材であるが、ほとんどの材に手斧痕が認められる。割剥ぎ材の外側を調整する。縦板1032など調整痕の顕著な特に大型の材では、手斧の刃幅は８cmほどと推測する。市内では13世紀前半に構築された土坑墓への副葬品として二葉町遺跡で手斧の出土例があり、刃幅は４cmである。厚みのある幅10cm前後の細い材で



第43図　SE01平・断面図

は幅４㎝ほどの痕跡が多い。隅柱も４面とも顕著な手斧痕が残る。下端が荒々しく、斜めに切り出されたものが半数である。穿孔のある縦板材は建築部材などからの転用材の可能性がある。

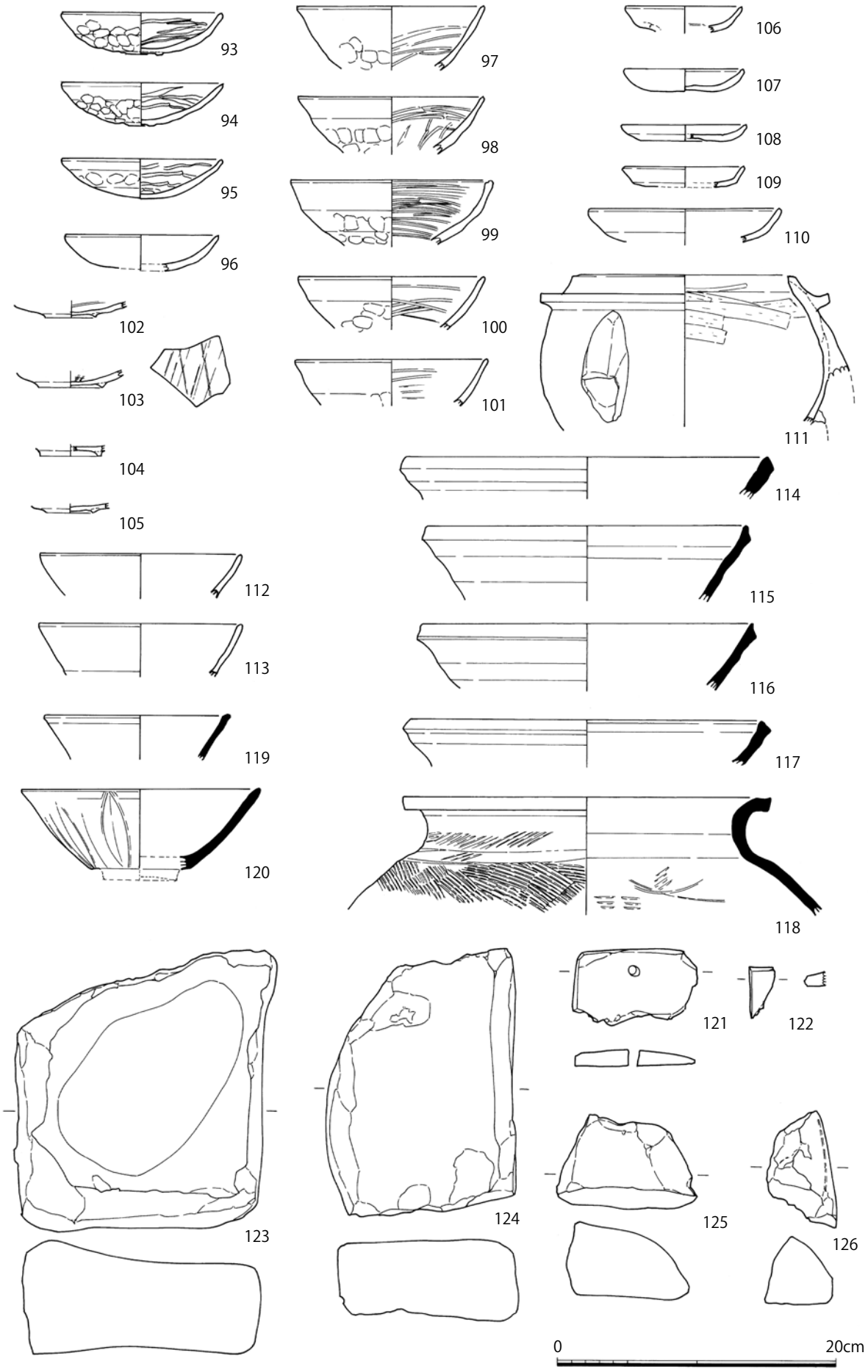
重ねた材の間や内側材、外側材の間には砂とともに小片の土器片が挟まり、粗く切断された加工材や手斧屑が出土した。この場で加工が行われた痕跡である。側材の腐食状況からは井戸側を上下二段、二重に備えた構造ではなく、外側が傷んだ後に内側に新たに井戸側を構築したようで、補修が行われ、その際の井戸浚えにより井戸側内に堆積した遺物が内外の側材の間に入り込んだものと考えられる。

また二重となった内側と外側の縦板材間には傷んだ材が挟まった箇所が多い。側材のほとんどはツガ属の材で、改修を考えた場合の古材や新材による位置的な材の違いは特に認められない。隅柱と横桟の木組み材、側板材の各部材による使い分けも認められないが、唯一内側の下の横桟のみ４本ともにコウヤマキが用いられる。

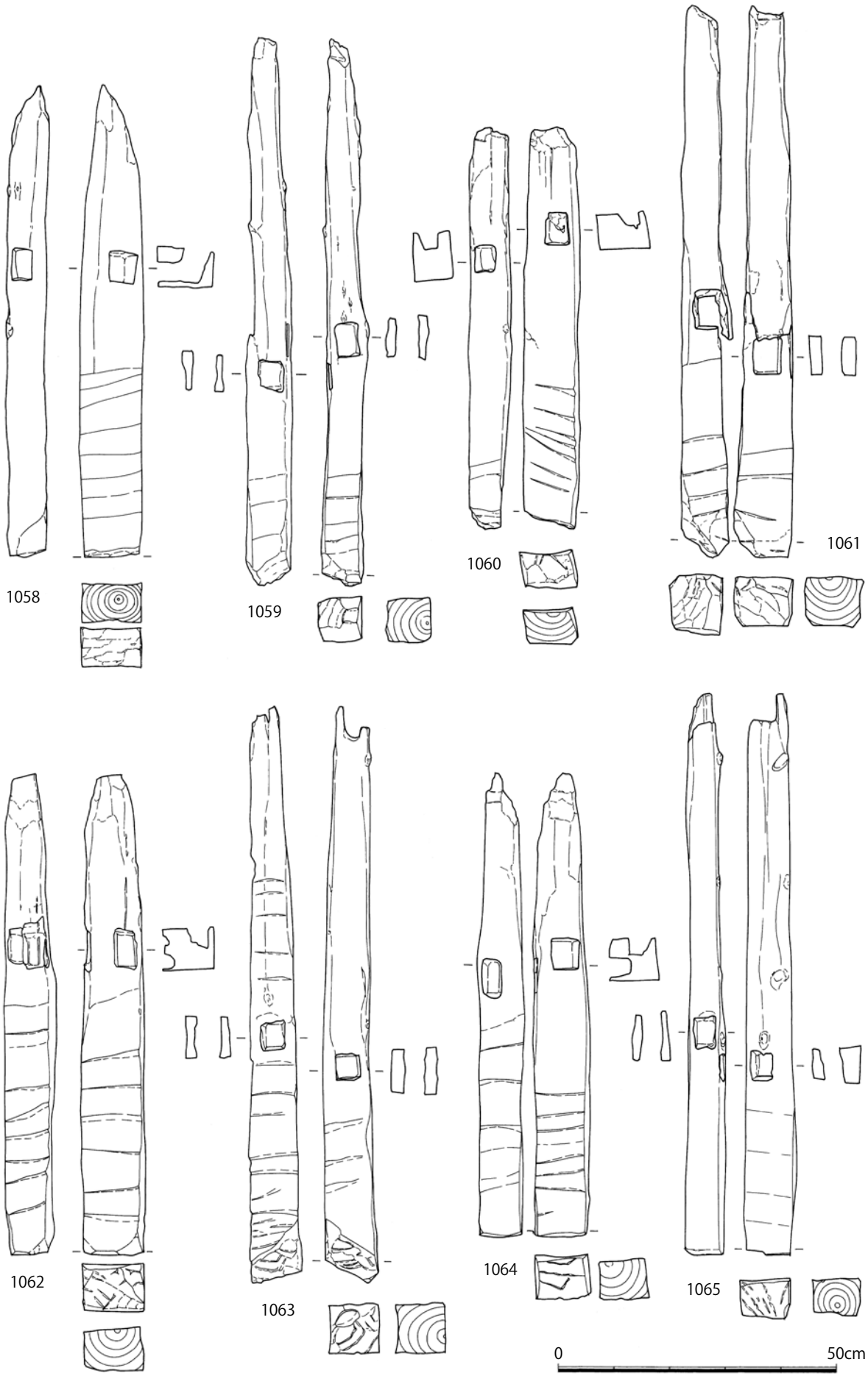
底の中央を掘り窪め、曲物一段を据えていた。曲物123は内法径52㎝、高さ16㎝、ヒノキ材を用い、同じくヒノキ材の帯板１枚を下半に巻く。本体内面に垂直方向の罫引きがある。本体、帯板ともに一重に巻き、４カ所にあて板を挟み樺皮で綴じる。下端に２段２列の木釘孔があり、元々補修された曲物であったと考えられる。この曲物上面から瓦器埦と土師器の鍋、直上のシルト層から柄杓の小型の曲物（本体124＋底板125）、イスノキ材の櫛が出土した。出土遺物の大半は上層の石混じりの堆積からである。細かい土器片が内側、外側材の間から出土する一方、植物遺体層を含む曲物直上層からの土器の出土はわずかである。植物遺体層の形成から、井戸は廃棄された後もしばらく開口していたと考えられ、シルト層が堆積することからも徐々に埋没していったものと考えられる。40㎝大の花崗岩が一石、落ち込んでおり、井戸鎮めに伴う可能性もある。

出土遺物は93～96が曲物の上面から出土した瓦器埦である。口径11.6㎝、器高3.0㎝前後、径の小さい扁平な体部で、93、94の底面にわずかに粘土紐を貼り付けた高台が付く。97～105は瓦器埦である。埦の口径は14.0㎝前後、99は環状のミガキが密に入るが、それ以外はやや粗い間隔、指押えによる成形も雑である。底部片の高台は断面小さな三角形である。106は口径8.4㎝の瓦器の小皿である。107～110は土師器の皿で、上層の礫群から出土した107～109は口径8.4～8.9㎝、掘形出土の110は復元口径14.0㎝、二段のナデ成形で強く外反する。111は土師器の鍋で、曲物内から出土した。復元口径15.0㎝、残存高10.8㎝、口縁部は強いナデ成形である。体部内側、頸部から体部にかけて板状工具によるナデが施される。112・113は須恵器の埦で体部は直線的に伸びる。114～117は須恵器の鉢で復元口径23.0～26.0㎝、口縁部の肥厚するもの、断面三角形で薄いものがある。118は上層の石の間から出土した須恵器の甕で口径26.4㎝、外面頸部から肩部に叩き痕がある。頸部と肩部の境は強いナデにより幅広の沈線様に凹む。119はＶ類の白磁碗、釉調は良好である。120は復元口径17.2㎝の青磁碗で幅広の連弁文の彫りは浅い。121は滑石製の石鍋を再加工した温石で、122の滑石片にも再利用のための加工痕が認められる。123～126は砥石でいずれも三面に明瞭な使用痕がある。123は重さ4,808ｇ、124は重さ2,662ｇ、井戸側上の石組みに転用されていた。

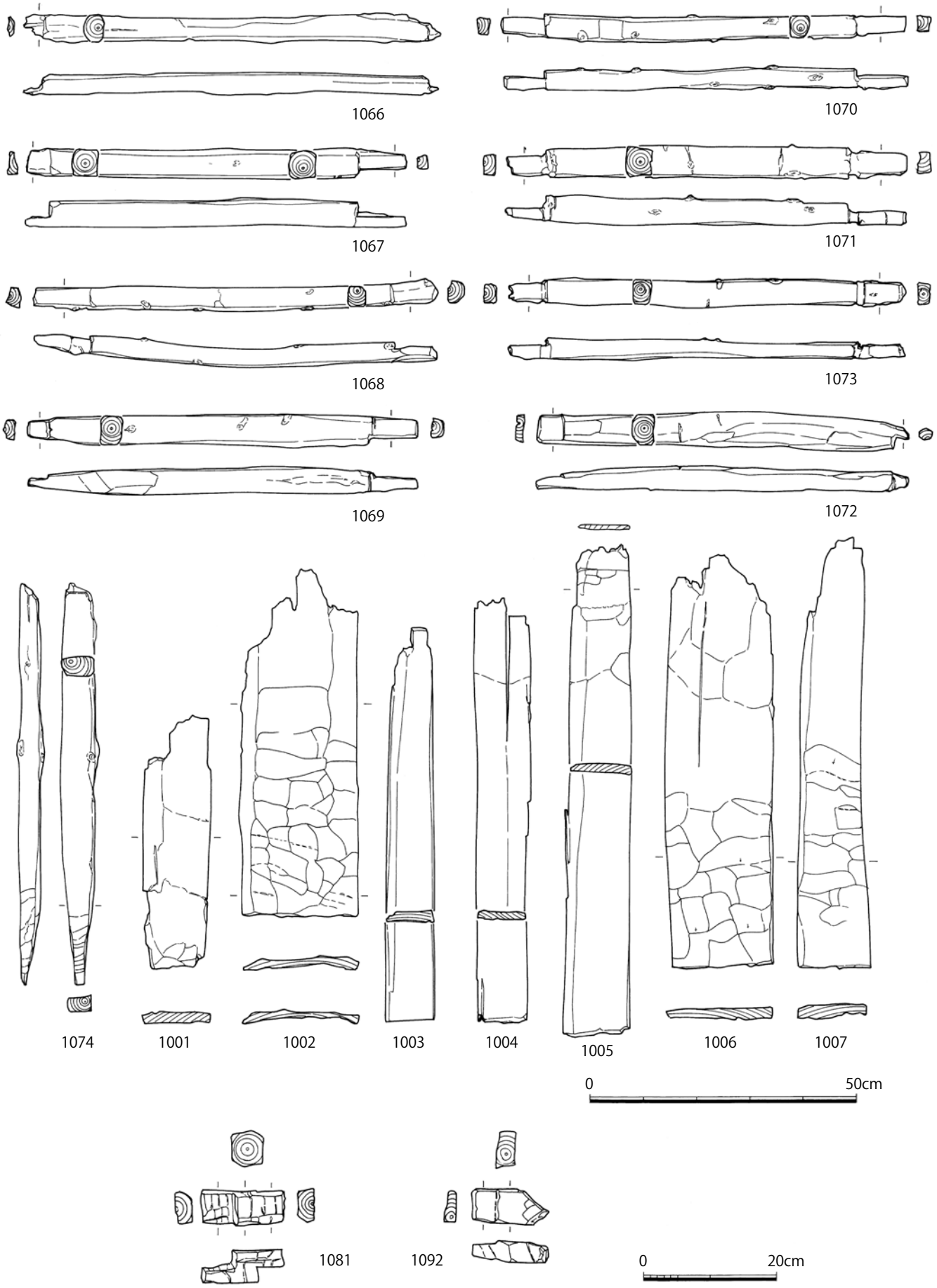
内外の側板材間出土の遺物や曲物上の出土遺物から、12世紀中頃に構築され、12世紀中か13世紀初頭頃に廃絶されたと考えられる。



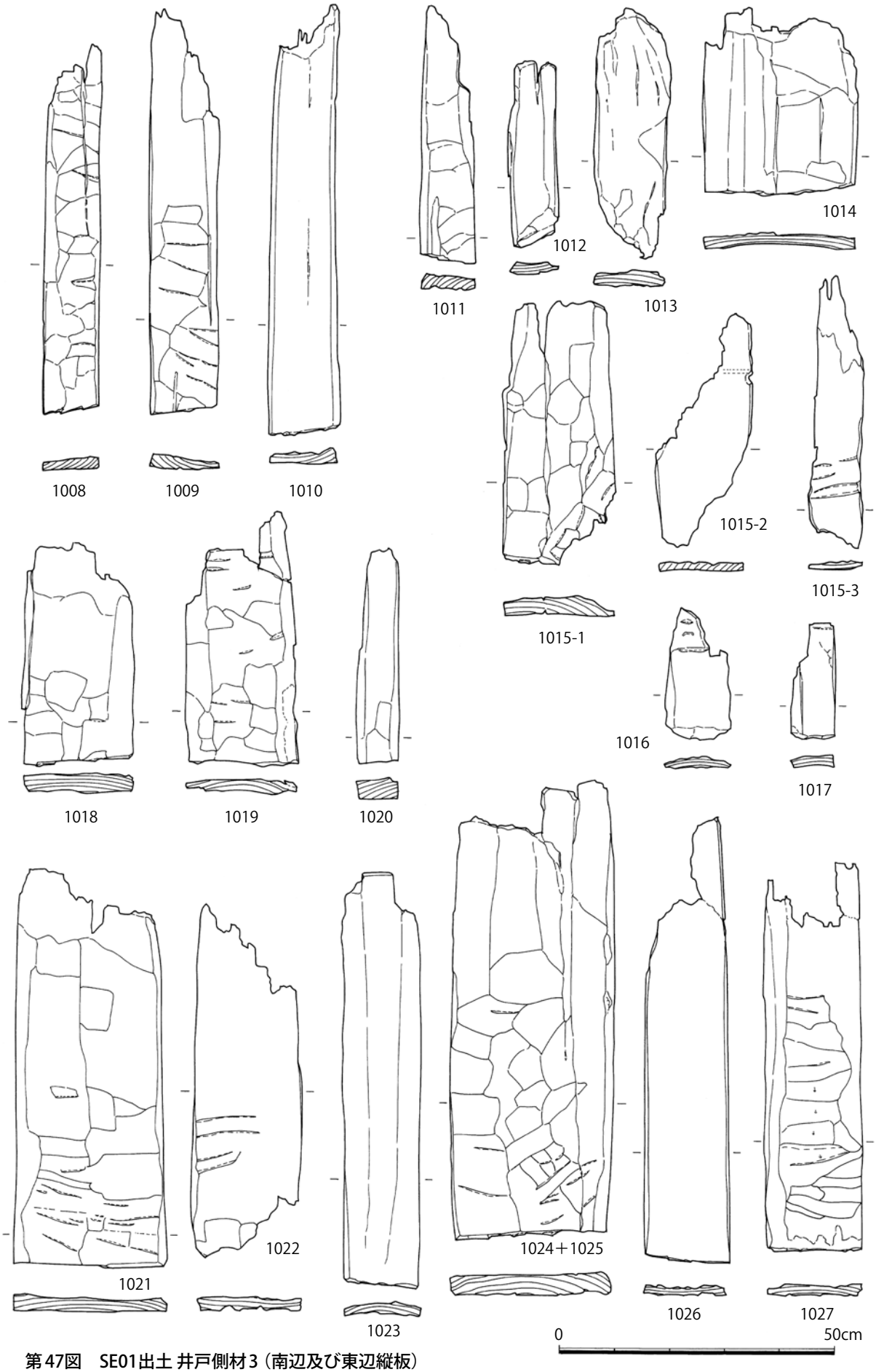
第44図　SE01出土遺物



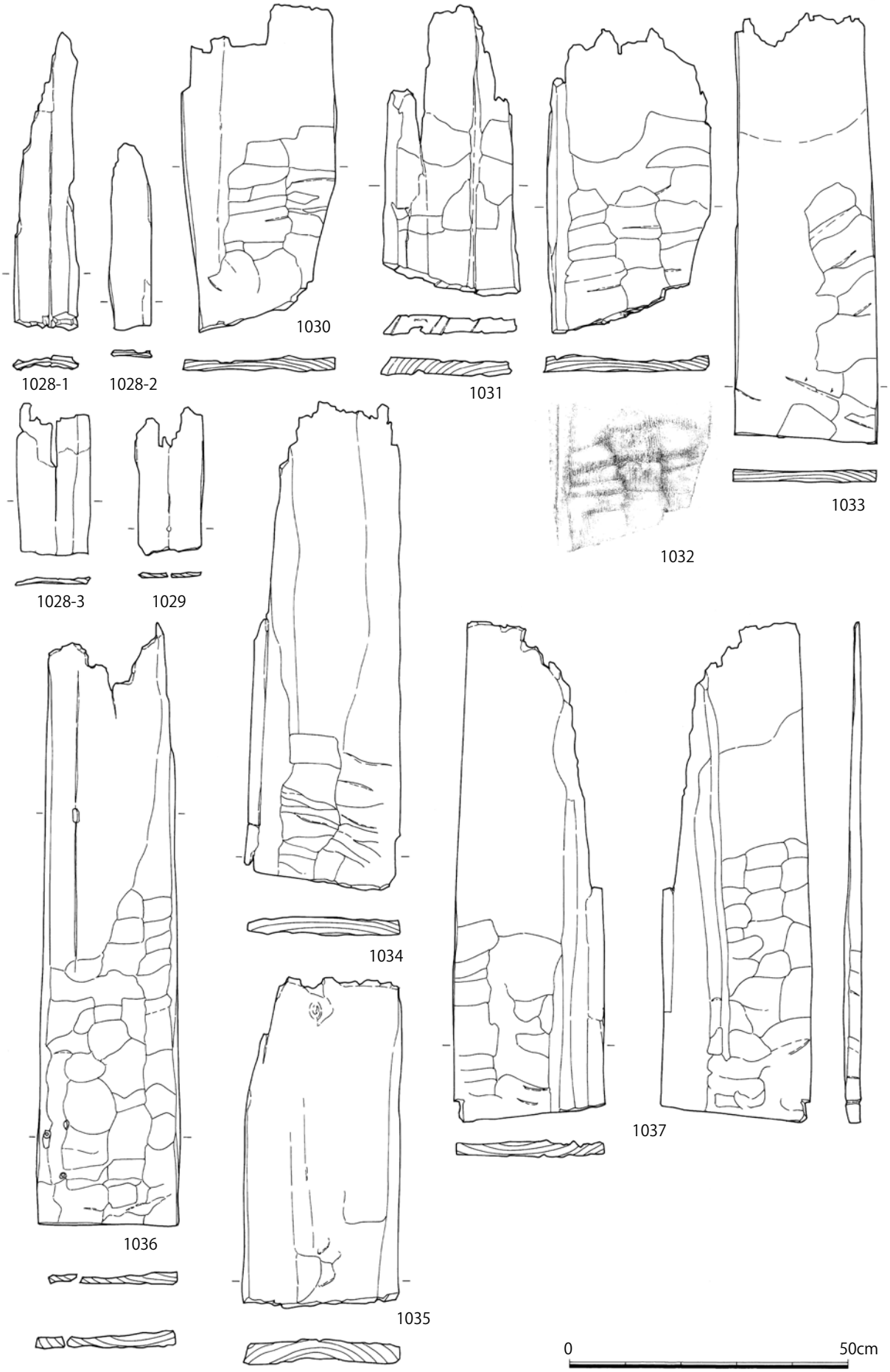
第45図　SE01出土 井戸側材１（隅柱）



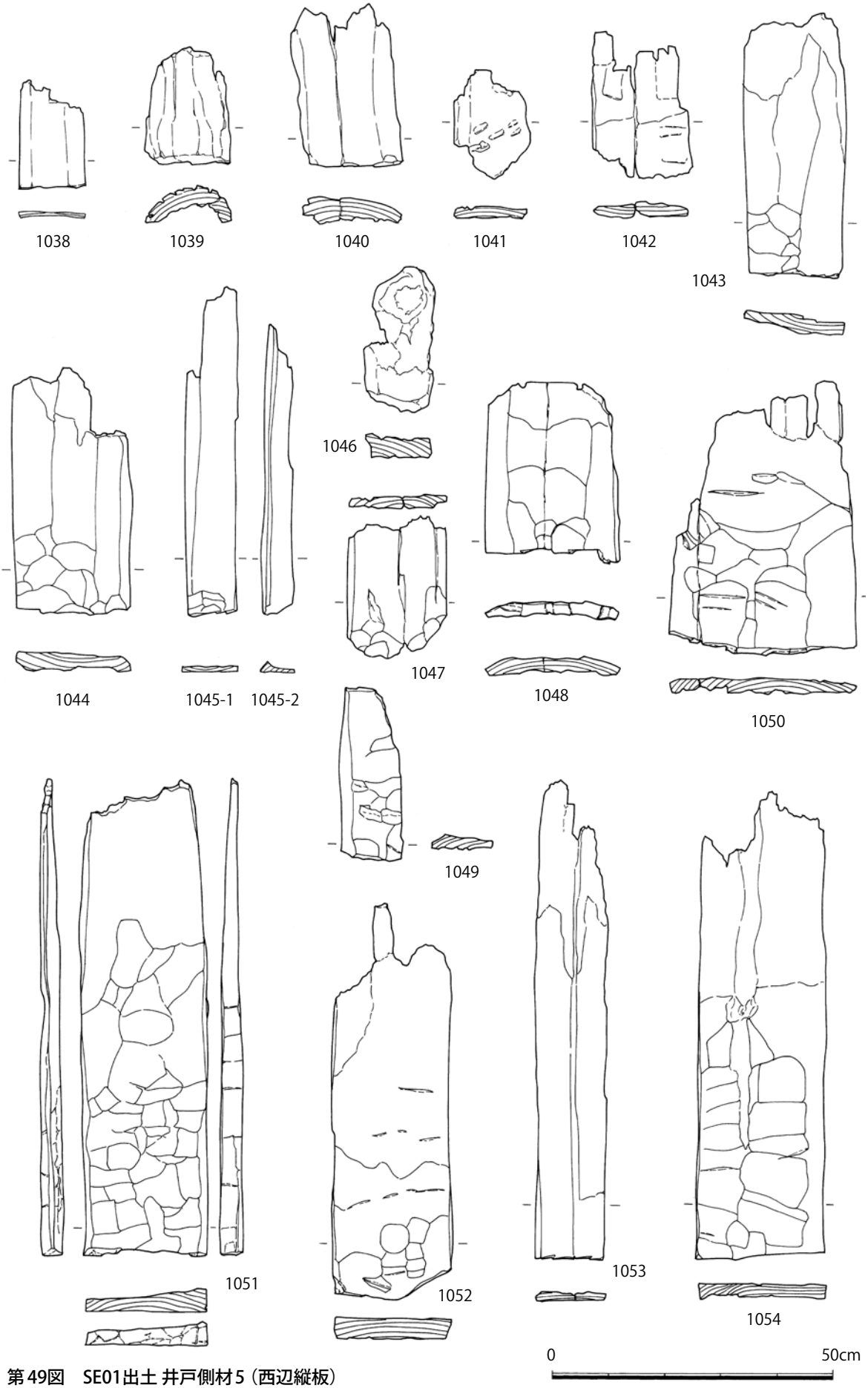
第46図　SE01出土 井戸側材２（横桟・南辺縦板）及び加工木



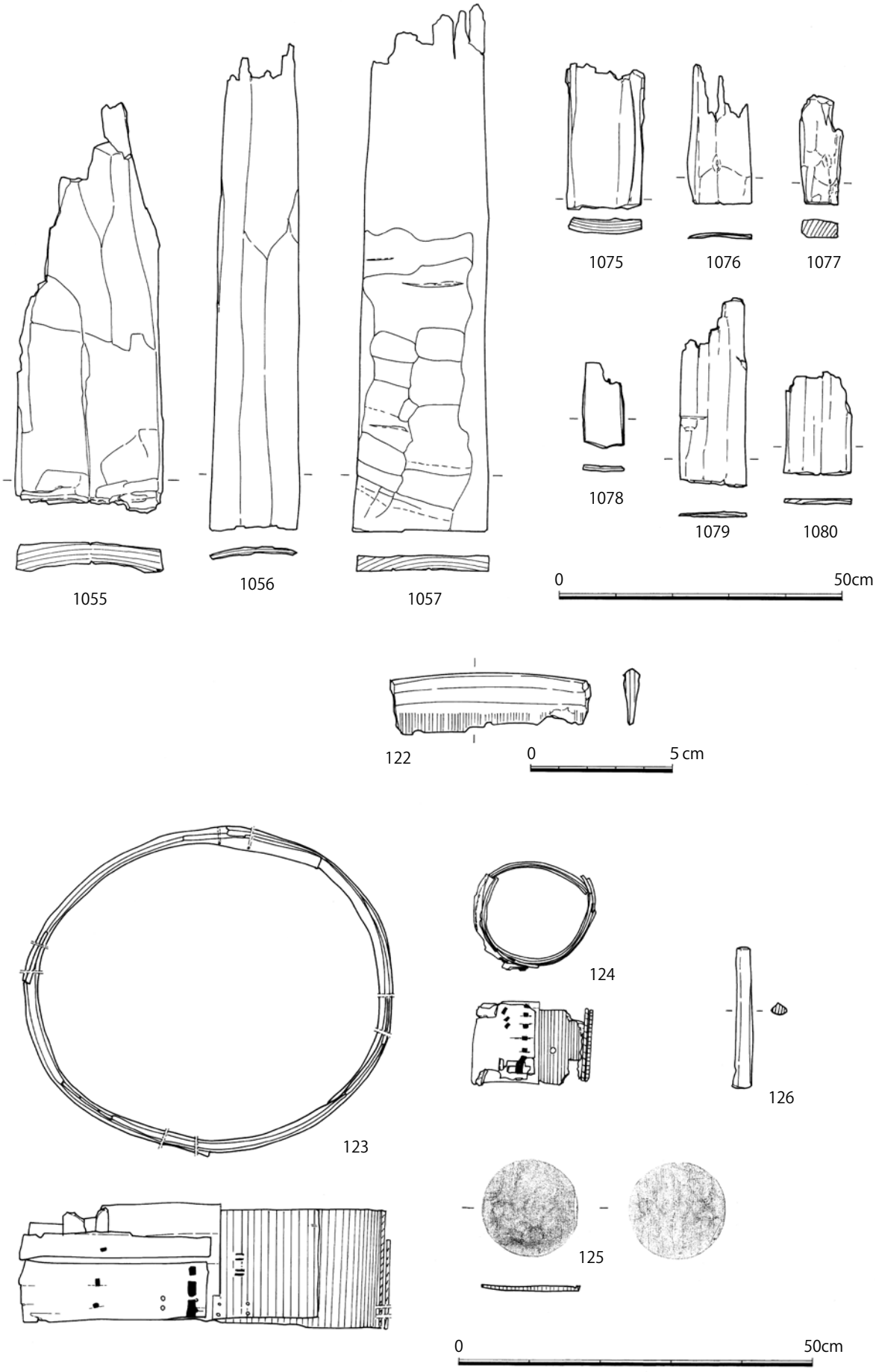
第47図　SE01出土 井戸側材3（南辺及び東辺縦板）



第48図　SE01出土 井戸側材4（北辺縦板）



第49図　SE01出土 井戸側材5（西辺縦板）



第50図　SE01出土 井戸側材6（西辺縦板）及び木製品

SE01

遺物番号		現場取上番号		サイズ（最大値）長さ × 幅 × 厚さ	出土位置	状態	備考
1001	南側板	WS −	1	48 × 12.5 × 2	外側	3 分割	
1002		（SW）	2	66 × 22 × 2.5	内側		チョウナ　弧状
1003			3	75 × 9 × 2	外側		
1004			4	80 × 10 × 1.5	外側		
1005			5	92 × 12 × 1.5	外側		上部 桟のあたり痕
1006			6	77 × 12 × 2	内側		チョウナ 下端切断痕
1007			7	82 × 12 × 2	内側		チョウナ 下端切断痕粗い
1008			8	67 × 14 × 2	内側	3 分割	チョウナ 1003 の内側
1009			9	73 × 12.5 × 2.5	内側		チョウナ 1004 の内側
1010			10	79 × 12.5 × 2.5	内側		1005 の内側
1011	東側板	WE −	1	47 × 10 × 2.5	外側		幅狭い チョウナ 厚みあり
1012			2	34 × 9 × 2.5	外側		小材　下端削り
1013			3	46 × 13 × 2.5	外側	傷み	
1014			4	35 × 28 × 2	外側		下端切断痕
1015			5	48 × 20 × 4	中間	2 分割	-1 チョウナ 厚みあり 3 本一括
1016			6	25 × 13 × 2	北東外隅柱外	添材	小材　下端切断痕
1017			7	22 × 8.5 × 2	北東外隅柱外	添材	小材　下端切断痕
1018			8	40 × 21 × 4	北東外隅柱外	添材	チョウナ 厚い 東縦板の最北材
1019			9	47 × 20 × 2.5	北東外隅柱外	添材	チョウナ 北縦板の最東材
1020			10	39 × 8 × 4	外側		小材　厚みあり
1021			11	73 × 27 × 3	内側		チョウナ　下端切断痕
1022			11-2	65 × 21 × 3	中間	表皮残 傷み	1021 と同材?
1023			12	76 × 14 × 2	中間		下端切断痕
1024			13	85 × 30 × 4	内側	3 分割	チョウナ　厚みあり
1025			13-2	- - -	-	面取・杭状	1024 と接合
1026			14	82 × 15.5 × 2	内側	2 分割	
1027			14-2	71 × 17.5 × 2	-	2 分割	チョウナ　（未同定）
1028	北側板	WN −	1	55 × 12 × 2.5	外側	2 分割	小材 1028-1 ～ 3 一括 弧状
1029			2	28 × 13.5 × 1	外側	2 分割	穿孔　薄い
1030			3	60 × 28 × 2	外側		チョウナ 下端切断痕粗い 斜め
1031			4	53 × 25 × 3.5	外側	3 分割	チョウナ 下端切断痕粗い 斜め
1032			5	56 × 30 × 2.5	外側		チョウナ 下端切断痕粗い 斜め
1033			6	77 × 26 × 2.5	内側		チョウナ 下端切断痕
1034			7	88 × 29 × 4	内側	2 分割	チョウナ　厚みあり
1035			8	60 × 29 × 4	内側		厚みあり　下端切断痕
1036			9	109 × 36 × 3	中間		チョウナ　穿孔 4 カ所
1037			10	91 × 28.5 × 3.5	中間	2 分割	チョウナ表裏 側面チョウナ痕
1038	西側板	WW −	1	20.5 × 12 × 1	外側		小材　弧状
1039			2	21 × 16 × 4	外側	2 分割 傷み	未加工　曲がり材
1040			3	28 × 18 × 4.5	外側	2 分割 傷み	厚みあり　弧状
1041			4	20 × 14 × 2	外側		小材　傷みあり
1042			5	26 × 26 × 3	外側	3 分割 傷み	
1043			6	48 × 19 × 3.5	中間		チョウナ　弧状
1044			7	44 × 22 × 3.5	中間		チョウナ
1045			7-2	58 × 10 × 1.5	中間	2 分割	1044 の外 1045-2 は別材
1046			8	26 × 13 × 4.5	外側	傷み	厚みあり　節あり
1047			9	26 × 18 × 2.5	外側	2 分割 傷み	下端切断痕粗い
1048			10	32 × 24.5 × 3	中間	2 分割	下端切断痕粗い
1049			11	30 × 11.5 × 3	中間		小材　厚みあり
1050			12	50 × 34 × 3	中間	5 分割	チョウナ 下端切断痕粗い
1051			13	85 × 23 × 4.5	内側	2 分割	チョウナ 側面チョウナ痕
1052			14	71 × 21 × 4	中間	4 分割	チョウナ 厚みあり 下端切断痕
1053			15	86 × 13 × 2	内側	2 分割	
1054			16	85 × 23 × 2.5	内側		チョウナ
1055			17	73.5 × 26 × 4	中間	3 分割	厚みあり
1056			18	87 × 16 × 1.5	内側	2 分割	
1057			19	95 × 24 × 2.5	内側	2 分割	チョウナ　下端切断痕
1058	隅柱	W −	7	87 × 11.5 × 8	南東外隅柱		1 穴（柱材すべて
1059			13	100 × 8.5 × 8	南東内隅柱	折れ	チョウナ下端切断痕）
1060			9	74 × 10 × 6	南西外隅柱		ホゾ穴浅い
1061			15	100 × 9.5 × 9	南西内隅柱	折れ	
1062			21	87 × 11 × 8	北東外隅柱		1 穴 2 段　ホゾ穴浅い
1063			18	104 × 9 × 9.5	北東内隅柱		
1064			20	84 × 10.5 × 8	北西外隅柱		ホゾ穴浅い
1065			17	101 × 10 × 7	北西内隅柱		
1066	横桟		1	79 × 5 × 4	北上桟？		南外枠上で出土 ホゾ小
1067			4	72 × 5.5 × 5	南上桟		
1068			11	76 × 5 × 4	南下桟	折れ	
1069			10	74 × 6 × 5	東上桟		
1070			14	76 × 5 × 4	東下桟		
1071			19	75 × 6 × 4	北下桟		
1072			12	70 × 6 × 4	西上桟		北西外隅柱に結合
1073			16	75 × 5 × 3.5	西下桟		
1074	杭状材		8	75.5 × 7 × 4.5	南東内・外隅柱間		楔状
1075	添材		2	26.5 × 13.5 × 2.5	南東外隅柱添材		小材　厚みあり
1076			3	25 × 11.5 × 1	南東外隅柱添材		小材
1077			5	20 × 7 × 3	南西外隅柱添材	傷み	小材　厚みあり
1078			6	15.5 × 7.5 × 1	南西外隅柱添材		小材
1079			22	34 × 12 × 1	北西外隅柱添材		薄い
1080			23	18 × 12 × 1	北西外隅柱添材	2 分割	薄い
1081	加工材		24	12 × 5 × 5	北西内・外隅柱間		ホゾ削り出し
1082	曲物	R-087		本体			集水桝
1083		SE01　No.7		帯板			遺物掲載番号 123
1084				あて板　1			
1085				2			
1086				3			
1087				4			
1088	曲物	R-086		本体	北辺		柄杓
1089		SE01　No.6		柄の補強（あて）板			遺物掲載番号　124
1090				底板			遺物掲載番号　125
1091	櫛			7 × 2 × 0.6	柄内 植物遺体層上		遺物掲載番号　122
1092	加工材			12 × 4 × 2.4	曲物底材付属 北西		切断痕

第 4 表　SE01・02井戸側材及び木製品一覧

SE02

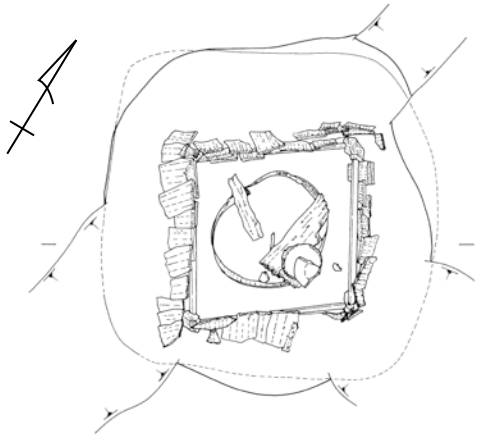
遺物番号		現場取上番号		サイズ（最大値）長さ × 幅 × 厚さ	出土位置	状態	備考
2001	南側板	S −	1	30 × 4.5 × 1	外側	2 分割	小材　薄い
2002			2	13 × 6 × 1	外側		小材　薄い
2003			3	39.5 × 6 × 1.5	外側	3 分割	
2004			4	30 × 10 × 1.5	外側	2 分割	薄い
2005			5	42 × 9.5 × 1.2	外側		
2006			6	39 × 11.5 × 1	外側		薄い
2007			7	46 × 23 × 3	内側 南東柱際		チョウナ　厚さあり
2008			8	39 × 16 × 1.5	内側 南西柱際		チョウナ
2009			9	40 × 11 × 3	内側		厚さあり 下端切断痕 斜め
2010			10	36.5 × 11 × 1	内側		薄い
2011			11	33 × 6 × 1	内側	3 分割	薄い　「南 - 間材」
2012	東側板	E −	1	43.5 × 10 × 2	内側		
2013			2	41 × 8.5 × 2	外側		削ぎ
2014			3	36 × 14.5 × 1.5	外側	2 分割	
2015			4	36 × 7 × 1.5	内側		
2016			5	33 × 13 × 1.5	外側	3 分割	
2017			6	34.5 × 7 × 1.5	外側	2 分割	
2018			7	39 × 10 × 1.5	内側	4 分割	薄い
2019			8	44.5 × 10.5 × 1.5	内側	2 分割	
2020			9	39.5 × 10 × 3	内側		2020-1・2 一括 20-1 厚さあり
2021			10	36 × 12 × 2	内側 北東柱裏側	5 分割	
2022			11	40 × 6 × 3	外側		両側面削り　厚さあり
2023			12	50 × 11 × 2	外側	2 分割	チョウナ 厚さあり 2019 重ね
2024			13	40 × 8.5 × 1	外側		2020 の重ね
2025	北側板	N −	1	38 × 7.5 × 1	内側		薄い
2026			2	42 × 9 × 1.5	内側	8 分割	薄い
2027			3	46 × 14.5 × 2	内側		チョウナ刃 厚さあり
2028			4	46 × 11 × 3	内側		厚さあり　弧状
2029			5	39 × 6 × 1	外側 北東柱裏側	3 分割	薄い
2030			6	42 × 9.5 × 2	外側	2 分割	
2031			7	47 × 13 × 2	外側	2 分割	厚さあり
2032			8	49 × 11 × 1.5	外側		
2033			9	35 × 11 × 1.5	外側	2 分割	
2034			10	44 × 14 × 2.5	外側		上部あたり痕 厚さあり
2035			11	42 × 14 × 1.5	外側	2 分割	
2036			12	33 × 13.5 × 1.5	外側 北東柱裏側		
2037			13	35 × 9 × 1	外側 北西柱裏側	2 分割	薄い
2038			14	35 × 9 × 1.5	外側 北東柱裏側	2 分割	薄い
2039	西側板	W −	1	31 × 10 × 1	外側（最外）	3 分割	薄い　チョウナ？
2040			2	32 × 9 × 1.5	外側（最外）	2 分割＋ハギレ	上部あたり痕
2041			3	36.5 × 9 × 1	外側（最外）	3 分割	薄い
2042			4	39 × 12.5 × 1.5	外側		厚さあり
2043			5	30 × 7.5 × 1	外側		薄い
2044			6	33 × 9 × 1	内側		薄い
2045			7	32 × 10 × 1	内側	4 分割	薄い
2046			8	33 × 10 × 1.5	外側	2 分割	
2047			9	39 × 11 × 1.5	内側		上部あたり痕？
2048			9-2	27.5 × 9 × 1	外側	2 分割	2047 と同材、剥離か？
2049			10	38 × 9 × 1	内側		上部あたり痕あり 剣頭状加工
2050			11	40 × 12 × 1	外側 北西柱際	3 分割	2050-1・2・3 一括 薄い
2051			12	41 × 11 × 1.5	外側		
2052	隅柱		P1	59 × 6 × 5	南東		（柱材すべてチョウナ）
2053			P2	52 × 6 × 4	北東	2 分割	
2054			P3	56 × 5 × 4	北西		
2055			P4	49 × 6 × 5.5	南西		
2056	横桟		B1	71 × 6 × 2.5	南	2 分割	（横桟すべてチョウナ）
2057			B2	73 × 6 × 3.5	東		断面△材
2058			B3	71.5 × 6 × 3	北		
2059			B4	73 × 3.5 × 3.5	西		
2060	曲物			本体			集水桝
2061				帯板　1			
2062				2			挿図写真 14
2063				3			
2064				あて板　1			
2065				2			
2066				3			
2067	板材			37 × 13 × 1	曲物内出土		薄い
2068	棒状				曲物内出土		

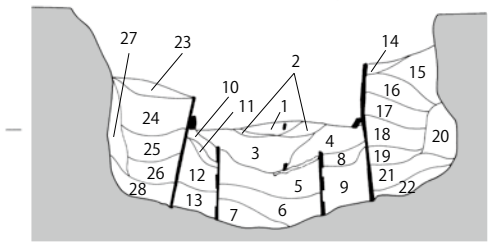
写真 15　内側桟の外隅柱への結合状況

SE02

掘形は一辺約1.3mの隅丸方形を呈する。検出面から0.2mほどで井戸側上面を検出し、底までの深さは約0.9mである。縦板組隅柱横桟留構造の井戸である。横桟の内法は62～63㎝、柱材は５㎝角で井戸側の木組みは一辺約70㎝の方形となる。南辺、北辺の縦板材には手斧痕もある厚さ１～２㎝の厚みのある材を用いるが、東辺、西辺の縦板材は割剥ぎ材で、厚さ１㎝内外の薄い材を多用する。材を重ね、隙間を埋めるように並べる。SE01と同様、材はツガ属が多い。井戸側底のレベルに底板を抜いた曲物を据え、基底部への掘り込みはない。曲物は取り上げの際に崩壊した。

出土遺物は少ない。検出面に近い最終埋土内から瓦器埦127が出土した。口径14.8㎝、器高5.2㎝、断面三角形の高台が付く。体部内面、見込みに並行する暗文を施し、上半に圏線状のミガキを施す。曲物は検出時の状況では径約40㎝、高さ約36㎝、ヒノキの薄い板材を丸め、樺皮で綴じる。帯板は３枚あり、本体とそれぞれ樺皮で綴じる。平安時代後期に機能した井戸と考えられる。



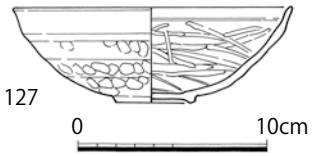


1．暗灰色シルト
2．灰色細砂
3．暗灰色シルト
4．灰青色細砂
5．灰色砂質シルト
6．暗灰色砂質シルト
7．暗褐色シルト
8．灰色シルト
9．淡灰青色極細砂
10．灰色細砂
11．暗灰色シルト
12．灰青色極細砂
13．黄褐色粗砂
14．灰褐色砂質土
15．暗灰黄色細砂
16．暗灰色細砂
17．暗青灰色細砂
18．暗灰色細～極細砂
19．暗灰青色シルト質極細砂
20．濁灰青色細～粗砂
21．黄灰色細砂
22．にぶい灰青色細砂
23．暗灰色シルト
24．灰黄色細砂
25．灰褐色シルト
26．暗黄灰色シルト
27．黄灰色砂質シルト
28．灰黄色砂質シルト

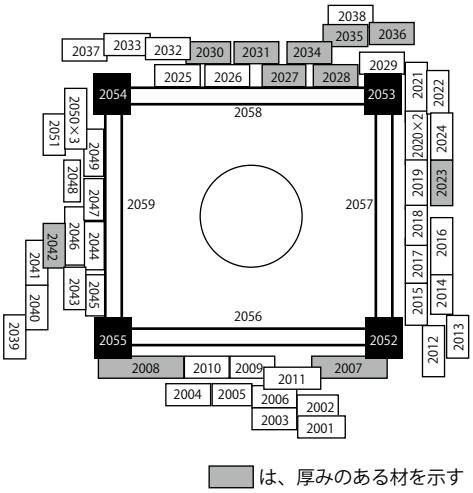
0　1m

第51図　SE02平・断面図

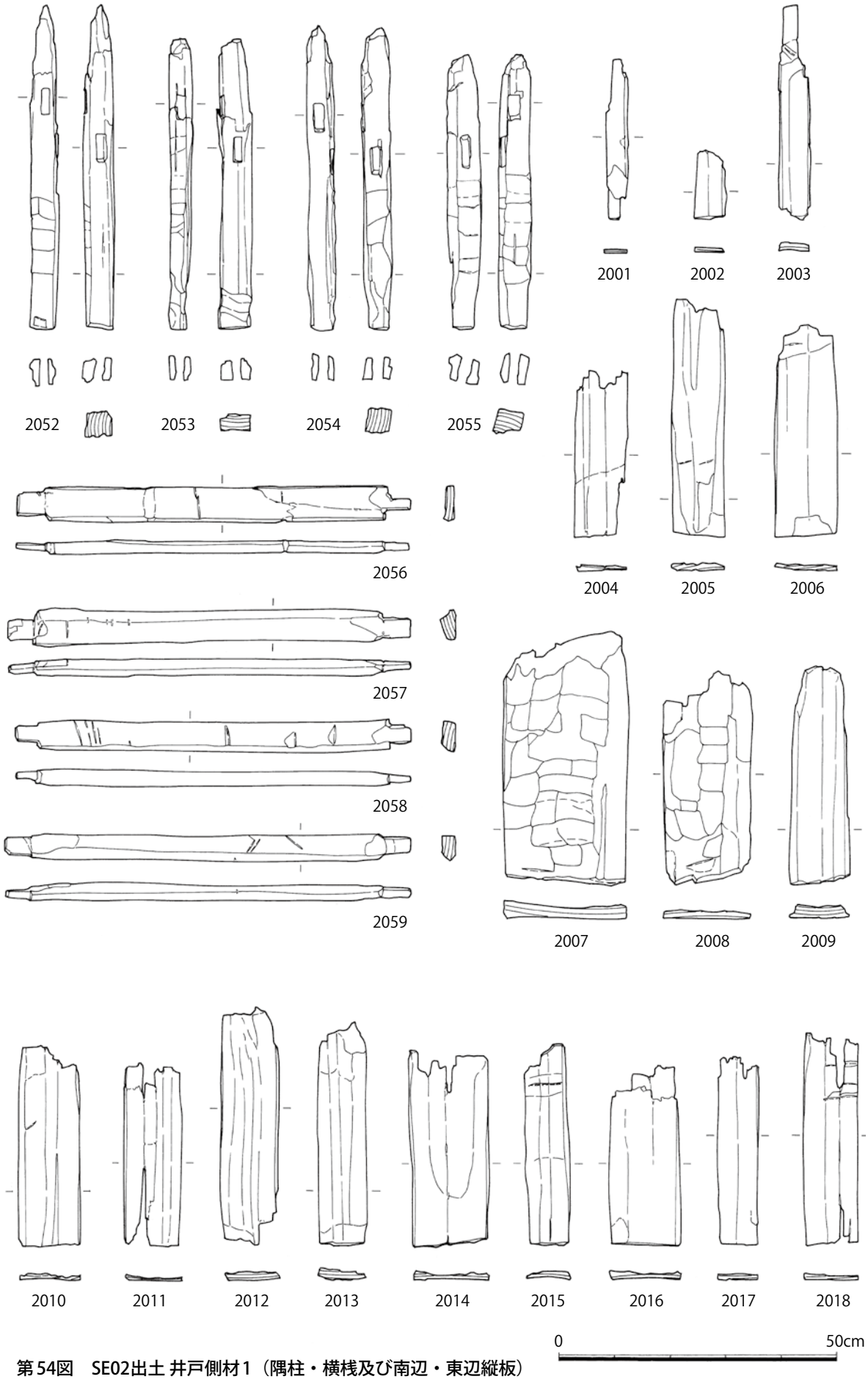
写真16　SE02曲物検出状況
（南から）



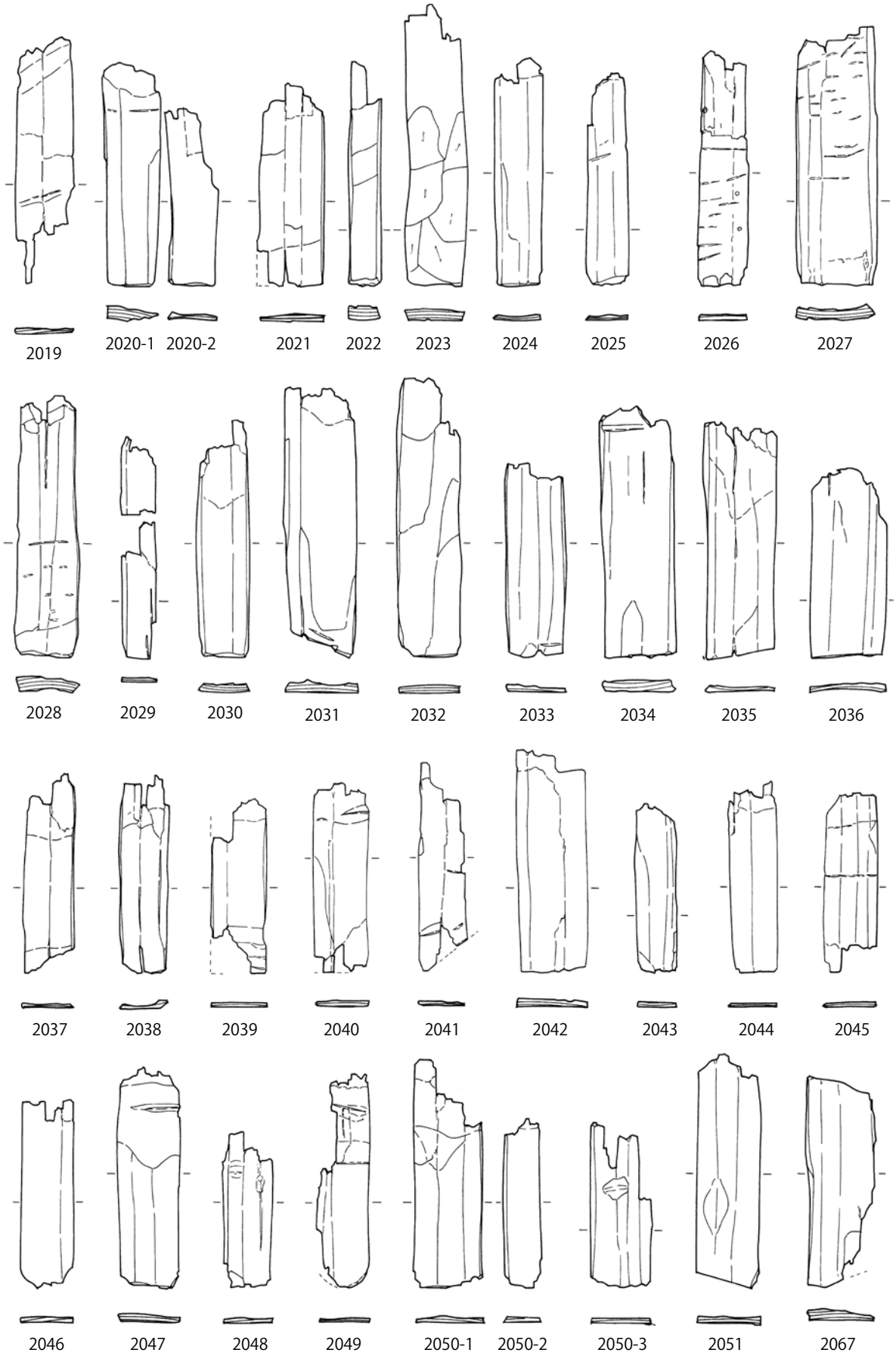
第52図　SE02出土遺物



第53図　SE02井戸側模式図



第54図　SE02出土 井戸側材1（隅柱・横桟及び南辺・東辺縦板）



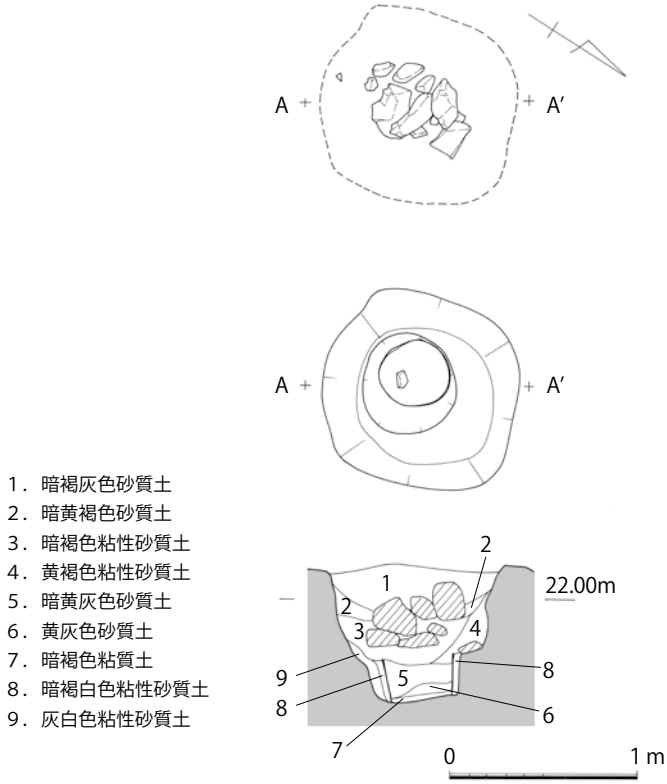
第55図　SE02出土 井戸側材2（東辺・北辺・西辺縦板）及び板材

SE03

調査区中央、SK07の南側に位置し、SK07を切り込む。掘形の平面形は一辺約1.0mの隅丸方形を呈する。埋土の中ほどから拳大～人頭大の、花崗岩の角礫を含む10個ほどの石が出土した。底の中央を径0.5mで掘り窪め、中に曲物を据えていた。小規模な井戸、または水溜め状の施設と考える。

出土遺物は128・129が土師器、130が須恵器の蓋で、復元口径15.0～20.0㎝、口縁端部は外側が平らになる。131～133は断面台形の高台の付く埦の底部で、131が土師器、132・133が須恵器である。134は復元口径10.6㎝の平底の坏で、底部はヘラ切り後にナデ成形である。

集水枡に転用された曲物135は劣化し、ほとんど厚みを残さず、取り上げ時に崩壊した。検出時の径は約40㎝、高さが約20㎝で、本体側板に帯板を樺皮で綴じる。下端で木釘穴２ケを確認した。側板はヒノキ材、帯板材は針葉樹としか判明しなかった。



第56図　SE03平・断面図

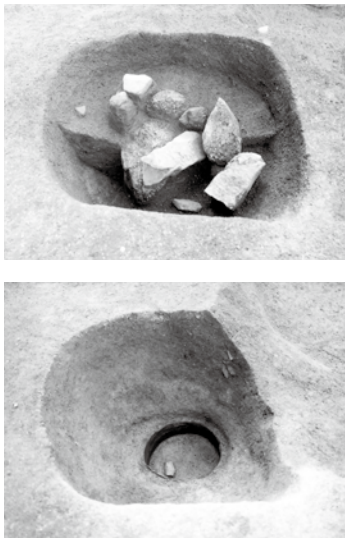
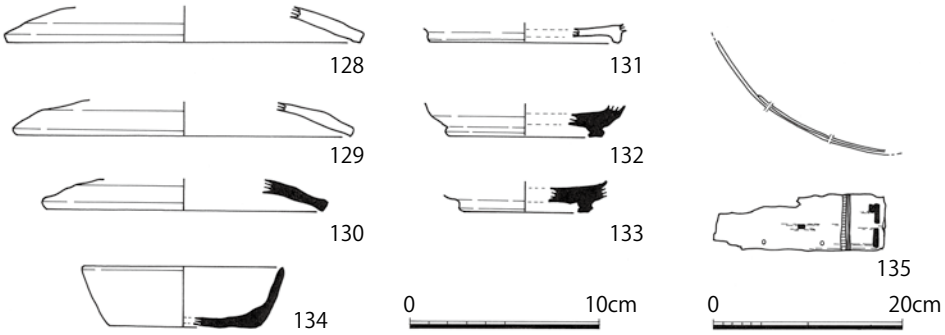


写真17　SE03検出状況（東から）
上：石の検出状況　下：曲物



第57図　SE03出土遺物

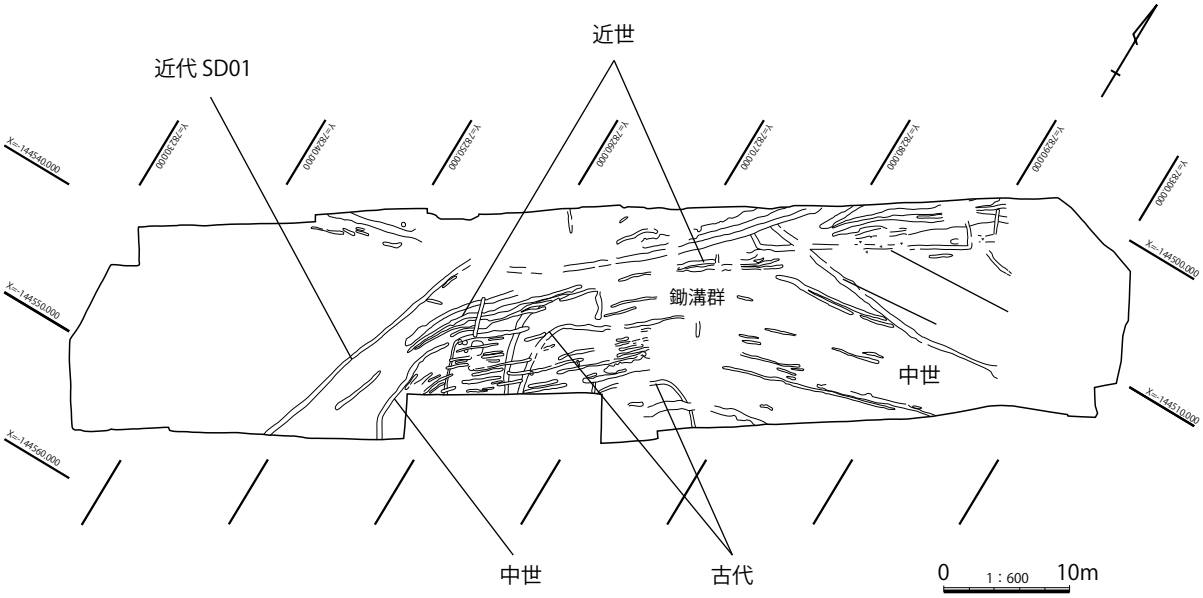
（5）中世～近代の耕作痕について

調査区の東２／３の範囲で耕作に伴う多数の溝を検出した。調査区の北西側は一段高い平坦面となり、段の上では削平の可能性はあるものの、ほとんど耕作痕を確認しておらず、落ち際と北端でわずかに検出したに留まる。調査区南西部では耕作痕を確認していない。調査区の中央から北東にかけて、この段の下に近代の溝SD01が掘削され、溝に沿うように近世、中世のやや幅の広い溝が並行する。この段が境界として認識され続けてきたことが判明し、幅広の溝に沿うそれぞれの時代の小規模な耕作溝を多数検出した。

また調査区の中央付近は周囲より若干の窪地となっており、南に開く浅い谷地形を形成していたと考えられる。この微地形に沿って逆Ｕの字形に緩く弧を描き、並行する溝３条を検出した。溝は幅約0.4m、深さは0.1～0.2m、埋土は暗褐色粘質土である。溝中からの遺物は少ないが、遺構を覆う旧耕土層や砂層出土の遺物から、平安時代末頃の耕作痕かと考えられる。

古代末の耕作地は調査地内の微地形に沿った小規模なものであったが、中世以降はやや耕作地を東西に長く区画し、規模を大きくして行ったものと考えられる。基本的には明治時代の地図にも残るように扇状地地形に沿った耕作地の形状が踏襲され、明治時代の後半になり、耕土層の上に真砂土による整地が行われ、建物が構築され市街地化が進んでいった様子が確認できた。

植物珪藻体（プラントオパール）分析の結果からは、地山直上に堆積する下層包含層＝古代末の堆積から上層の明治時代の耕土層まで、いずれの時代の耕土層からもイネが検出され、上層包含層からはムギが検出された。周辺の環境復元に関する考察の結果、陸穂の可能性が指摘されるが、中世の頃には可耕地が扇状地扇央部にも拡がるものと推測され、連綿と活発な生産活動が行われた様子が確認された。



第58図　古代末～近代耕作痕平面図

（6）中世末～近世の遺構・遺物

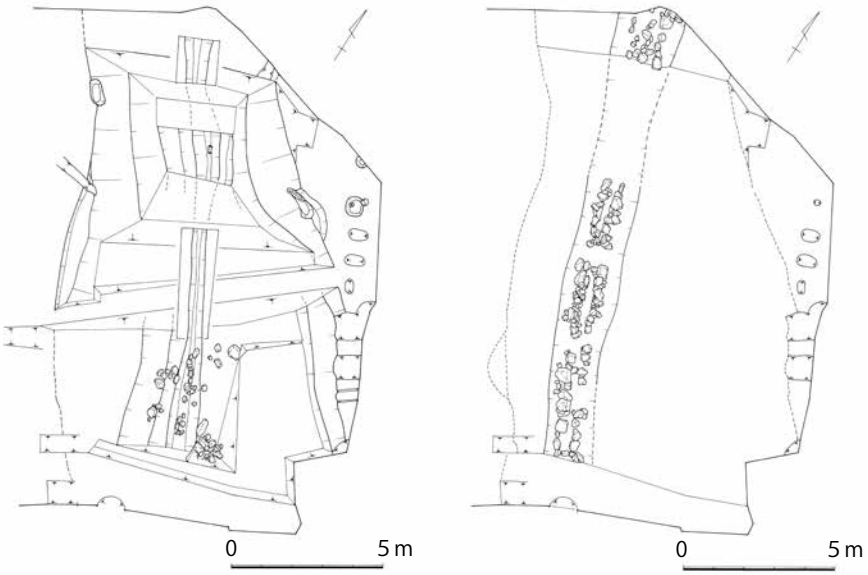
調査区の東端で大規模な溝を１条検出した。西側には耕作地が拡がっていたと思われる。

SD09

現代の区画に沿い、北西から南東方向に流れる大規模な溝を検出した。検出長約15.5m、最大幅約9.5m、溝の北端での深さ約2.5m、南端の最深部で約2.7mを測る。肩に沿って暗灰色粘質土～シルト層が堆積しており、しばらくは開口していたと考えられる。その後、洪水による砂で一気に埋没する部分と、シルト質の砂で徐々に埋没した部分が存在する。堆積状況から埋没過程は大きくは４つに分けられる。溝がほぼ埋まった上面に石組み溝が構築され、近世の遺物が大量に出土した。中間には遺物を含まない砂のみの堆積が続く。最下層には中世末の遺物を含む砂の流れがある。

溝全体での断面の形状は北端ではＶ字状で、中央から南半にかけては箱型に近い。西肩では検出面から約1.5m下に幅約1.0mのテラス状の段があり、ここから上の傾斜はきつい。反対に東肩は直線的ではあるが、西肩に比べ傾斜はやや緩やかである。北端の最下層、Ｖ字状の最深部は溝底を刻む深い筋状の流れで南端まで伸びる。南端では溝底は幅3.0mほどあるが、中央のみが幅約0.6mで深くなる。この部分に灰白色の粗砂が堆積し、流れに沿って拳大のものから、南壁際では長さ60㎝を超す石が出土した。南壁際での大きな石は積み重なる状況であるが、流れの作用により重なり合ったものか、あるいは人為的に積み上げたものか明らかでない。流れの中に石があまり含まれないことを考えると付近に人工的な構造物、または石を投棄する状況があったと推測する。遺物の出土は大半が上層の石組み溝内からで、それ以外には最下層の砂層から中世末の瓦片、陶器片が出土した。

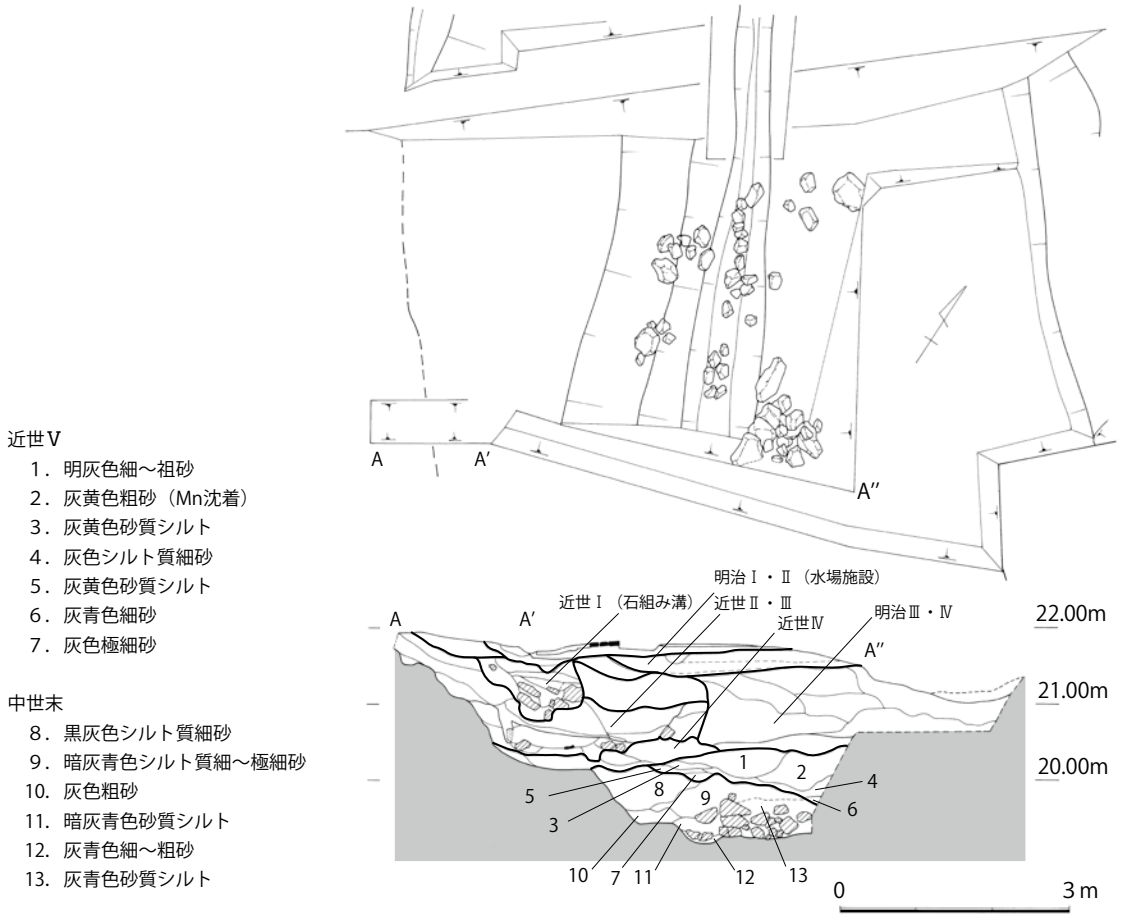
136は壺の口縁部から肩部の破片で、肩部外面は叩き、内面の調整は不明である。137の甕の肩部片にはヘラ記号がある。138は丹波甕の肩部の破片で、外面は格子叩き、緑黄色に発色した釉薬に覆われる。内面には粘土の積み上げ痕が明瞭に残る。139の備前擂鉢は口縁端部を大きく上方に拡げる。スリ目は７条以上ある。140は備前擂鉢の底部である。粘土の積み上げ後の調整が粗く、スリ目は同心円状に刻まれ上下に伸びない。



第59図　SD09平面図　（左：最下層　右：上層石組み溝）

141は唐草文の軒平瓦で、花隈城跡第３次調査出土の瓦と同文と考えられる。142は軒丸瓦の小片で珠文２個と巴文１個がわずかに残る。厚みはなく、近世初頭にかかるものかと推測する。143の丸瓦は玉縁部を欠く。外面を粗く筋状にナデ上げる。内面に布目が残り、釣り紐かと考えられる痕跡がある。

最下層から出土した遺物は室町時代後半～近世初頭にかかるものと考えられ、溝の形状や規模を考えた場合、南西700mに位置する花隈城との関連性を考える必要があろう。石をほとんど含まない埋土の中で、石の集積には何らかの意味があるのだろう。護岸、または防御施設などの可能性を想定すべきと考えているが、今回の検出範囲内では明確なものではない。

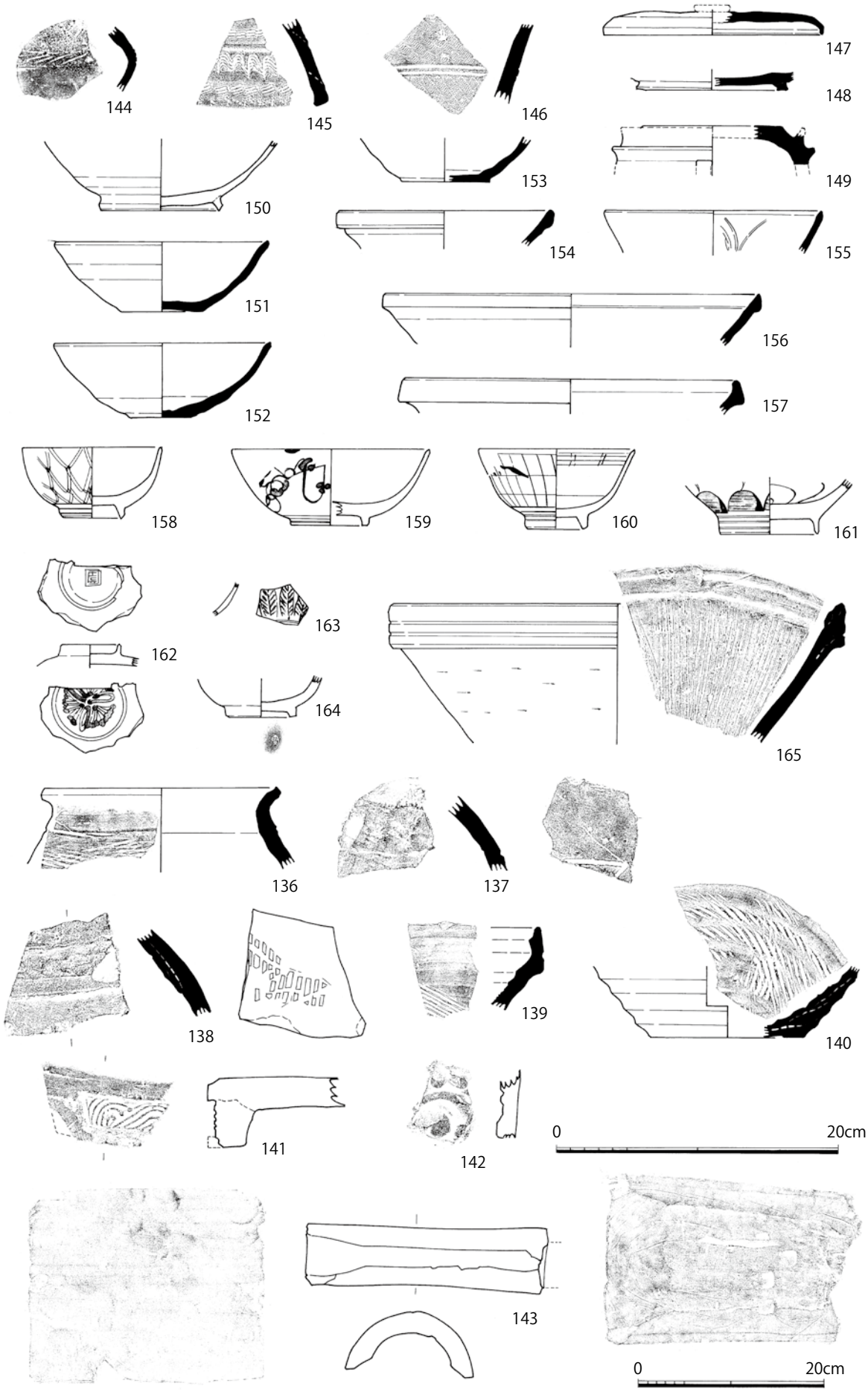


第60図　SD09最下層石組み 平・断面図

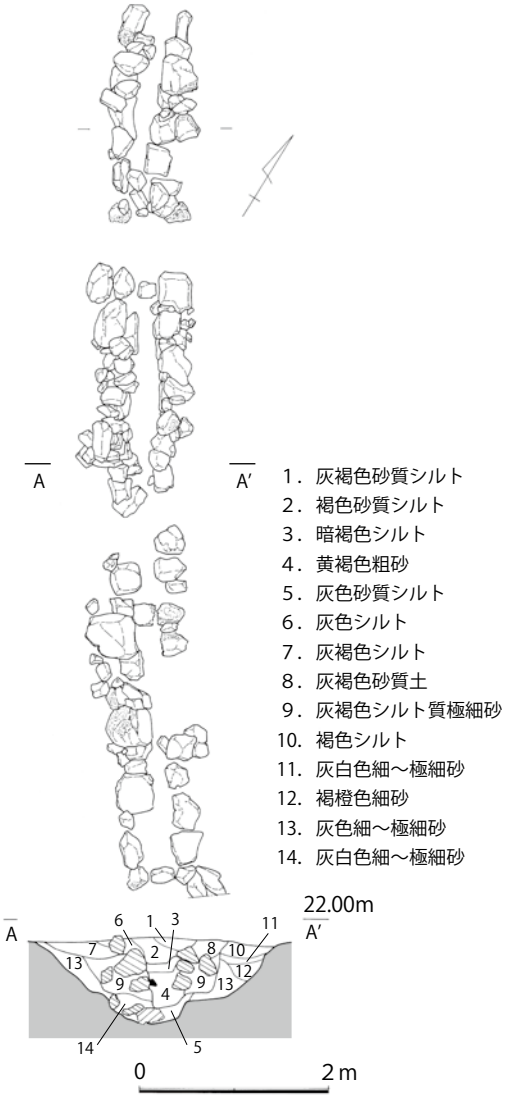
石組み溝

SD09が灰黄色の粗砂でほぼ埋没した段階に西肩寄りに築かれた溝である。検出長約15.0m、南端は明治時代に構築された水場施設と瓦積み井戸により失われる。掘形の最大幅は約4.0m、花崗岩を３～５段、積み上げる。石組みの内法は0.4m前後で、深さは最深部で約1.0mを測る。北側の溝底T.P.21.70m、南側はT.P.20.80mで、0.9mほどの高低差がある。上層にシルト層が堆積し、以下は黄褐色の粗い砂や灰色のシルトが薄い層をなす。

古墳時代から近世までの多くの遺物が出土した。やや摩耗が認められることから、調査地の北側、あまり遠方ではない範囲からの流れ込みがあったと推測する。集落の拡がりや近隣の集落の存在が想像される。



第61図　SD09出土遺物



第62図　SD09上層石組み溝 平・断面図

写真18　SD09上層石組み溝検出状況（南から）

写真19　SD09上層石組み溝
土層断面（南から）

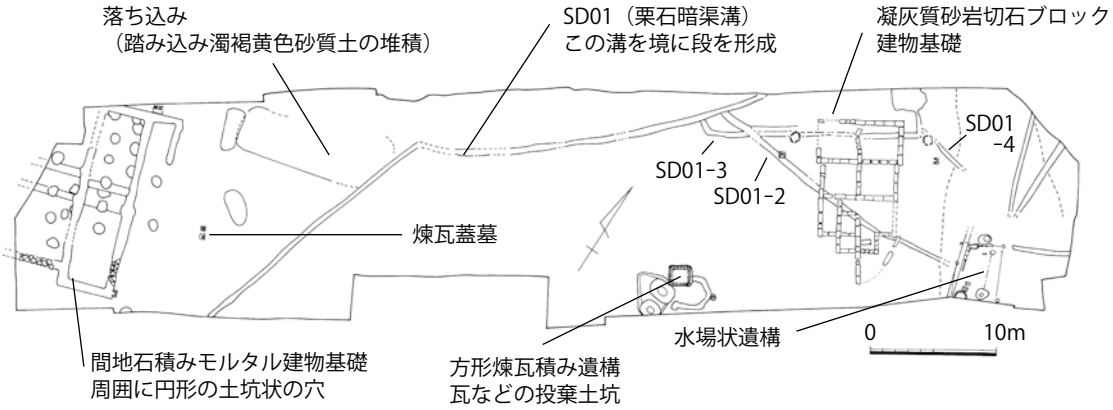
144～146は古墳時代の須恵器である。144は瓿、145は器台、146は甕の破片で、波状文で飾る。147は奈良時代の須恵器の蓋で復元口径14.0㎝、口縁端部を下方に直角に折る。つまみの形状は不明である。148は埦の底部で高台の断面はしっかりした台形である。149は須恵器の円面硯である。150は灰釉の埦で底径8.5㎝である。151～153は須恵器の埦で復元口径15.0㎝ほどのものと考えられる。154は白磁の碗、155は青磁の碗の破片である。須恵器の鉢156は口縁端部を上方に伸ばし、157は下方に肥厚する。

出土遺物には古墳時代から江戸時代までのものが含まれるが、ほとんどは近世の陶磁器で、158～165など18世紀代のものが中心である。二重網文や草花文、格子文をはじめとする肥前系染付の他に青磁蓋162、景徳鎮産の青花碗163、京焼の埦164などが出土している。擂鉢165は明石、または堺産である。

SD09は遺物の出土状況や堆積の様子から、しばらくは開溝していたが、近世の段階に砂で一気に埋没したと考えられる。ただ、埋没後も窪地で、水の流れはあった。

（7）近代の遺構・遺物

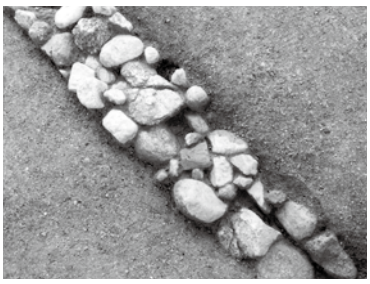
調査区の東西両端で建物基礎を１棟ずつ検出した。土地区画に伴う溝と水場遺構、煉瓦敷きの施設などを検出した。



第63図　明治時代遺構平面図

SD01

調査区西半の南側から北に向かい、30mほど先で北東へと角度を変える。30mほど先の北壁際で確認した方形の石組みの落ち込みにつながる長い溝を確認した。調査区内での溝の検出長は約60mである。溝の中に扁平な石を立てて壁とし内部に栗石を詰める。その上に大きめの扁平な石を架構する。壁際の落ち込みは調査区外に続き、上部を攪乱で失うため全体の規模は不明であるが、50㎝角の花崗岩の石組みを一段分確認した。落ち込みの手前の２カ所で切り合いを確認した。SD01-1の栗石が最終的に詰められた痕跡であるが、形状からはSD01-2・3・4が分流と考えられる。分岐箇所では溝の中ほどに小さいながらも立石を確認した。栗石が充填された段階では立石は機能しない。元々は板材などを添える台で、仕切りに用いたかと推測する。分岐した流れはSD09埋没後の窪みに流れ込む。溝中からの遺物は少ないが、少量の陶磁器片と瓦片、煉瓦片が出土した。この溝の西側が高く、溝を境として東側に一段低い段が形成される。



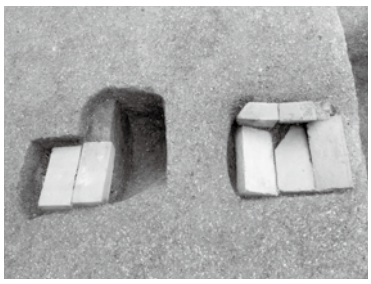


写真20　明治時代の遺構
左上　SD01上面検出状況
中央上　犬の墓上面検出状況
下　犬の骨出土状況
右上　建物基礎１
石列と煉瓦積部
下　建物基礎２
凝灰質砂岩ブロック

SD09上層検出の石組み溝の最上部は明治時代の遺物を含み、細く浅い溝として利用され続けている。明治時代には南東側へ窪地を形成し、SD01からの水や北東、東からの暗渠溝の落とし先となった。明治時代の後半に整地され、市街地化がはじまったと考えられる。

【建物（基礎）１】

西端検出の建物基礎は漆喰敷きに間地石を一段積んだものである。基礎の南東隅、北東隅で煉瓦を１～３段積んだものを検出した。雨落ちか会所底などと考えられる。南東隅の煉瓦積に使用された煉瓦に貝塚煉瓦株式会社の刻印を確認した。調査区中央南壁際のごみ穴と考えられる土坑からは大阪窯業株式会社の刻印が入った煉瓦などが出土した。

また、この建物の東約5.0mの位置で煉瓦を蓋にした一辺0.4mの方形の穴を２基検出した。中から小型犬の骨が１体分ずつ出土した。

【建物（基礎）２】

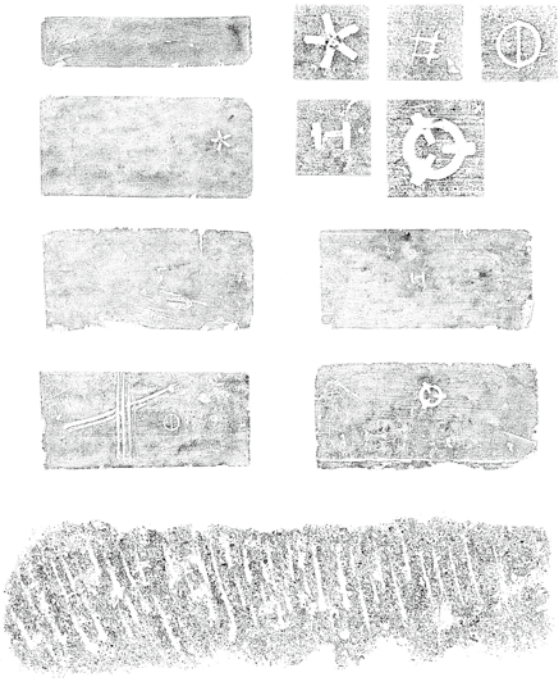
調査区東端、SD09の西側で検出した建物基礎で、砂岩製のブロックを並べる。ブロックは長さ70㎝、幅25㎝、高さ40㎝を基本形状とし、間取りに合わせて長さ調節を行っている。

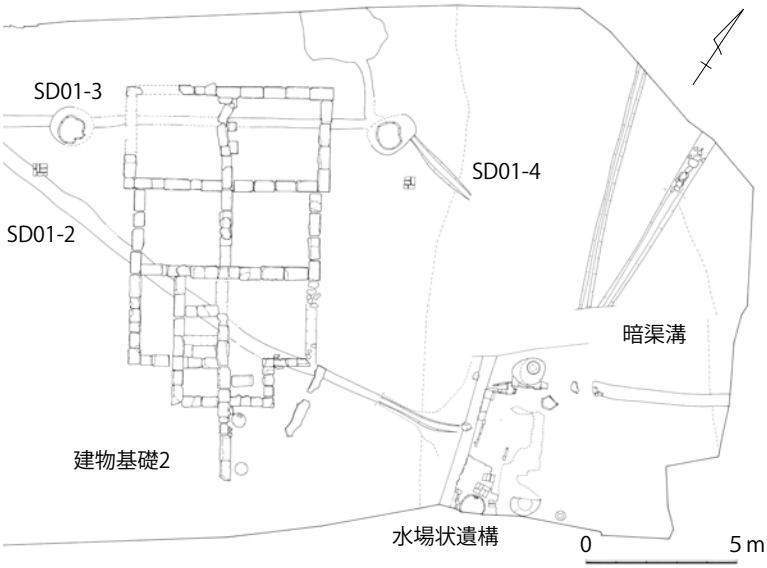
【水場遺構】

SD09埋没後の窪地に構築され、漆喰土間、瓦積み井戸、埋甕、瓦敷きの溝を確認した。SD01から別れた流れはこの施設の溝に取りつく。また調査区の北東隅、東側からも栗石を詰めた暗渠溝が流れ込む。浅い窪みに達した部分では栗石は充填されず、素掘り溝となる。

南側の第４次調査地では、1900年（明治33）開校の中華同文学校の校舎の遺構とその北側にも煉瓦積みを基礎とする建物が良好な状態で遺っていた。今回の調査地の明治期の土地利用については明らかにし得なかったが、一時期、外国人に関連する施設が存在したとの伝聞がある。

また西側の建物１や北側の落ち込み周辺から、鋭利な切断面をもつ牛骨が出土した。観察の結果、骨製品の製作が行われた可能性とともに、西洋料理に供された可能性が指摘されている。





第64図　明治時代の遺構
建物１等出土煉瓦拓影1：8（刻印の拓本1：3）
建物２出土凝灰質砂岩ブロックの拓影　1：10
建物２及び水場遺構周辺平面図　1：250

Ⅲ．生田遺跡第８次調査における植物珪酸体（プラント・オパール）分析

株式会社古環境研究所

（１）はじめに

生田遺跡は、神戸市中央区中山手通３丁目に所在する。六甲山南麓の丘陵裾部に形成された扇状地の扇央付近で、生田川右岸に立地する。今回の調査地は、生田遺跡の範囲の北西端にあたる。現代の盛土層の下に明治時代の整地層、耕土層が堆積し、その下位に近世の耕土層、さらに中世の耕土層の堆積が確認された。

そこで、当該調査地における農耕をはじめとする土地利用の変遷を検討する目的で、植物珪酸体分析を実施することになった。

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生･古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

（２）試料

分析試料は、土壌サンプルⅠの１層（淡灰黄色砂質土：近代旧耕作土）、２層（青灰色砂質土：近世旧耕作土）、３層（灰色砂質土：中世旧耕作土）、４層（褐灰色砂質土：上層包含層）、５層（灰色砂質土）、10層（黄灰色粘性砂質土：SD301下層）、７層（黄灰色砂質土：ベース層）から採取された試料①～⑦、土壌サンプルⅡの１層（淡灰黄色砂質土：近代旧耕作土）、２層（青灰色砂質土：近世旧耕作土）、８層（黄灰色粘性砂質土：SD101）、３層（灰色砂質土：中世旧耕作土）、４層（褐灰色砂質土：上層包含層）、５層（灰色砂質土）、６層（灰褐色砂質土：下層包含層）、７層（黄灰色砂質土：ベース層）から採取された試料①～⑦、補の計15点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

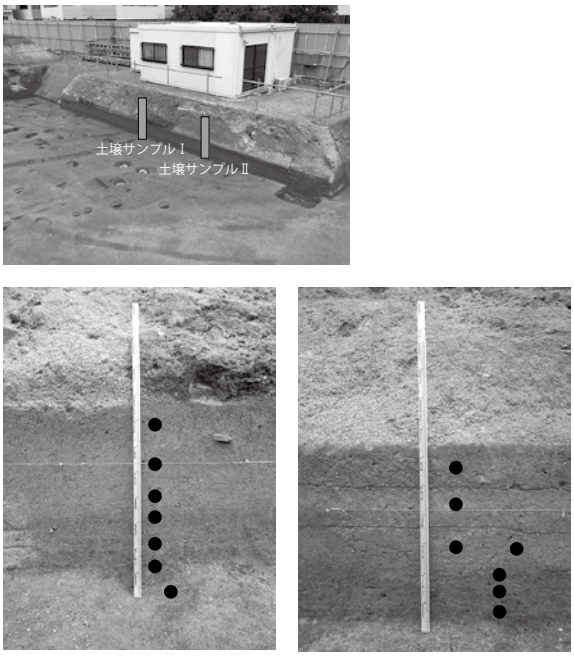
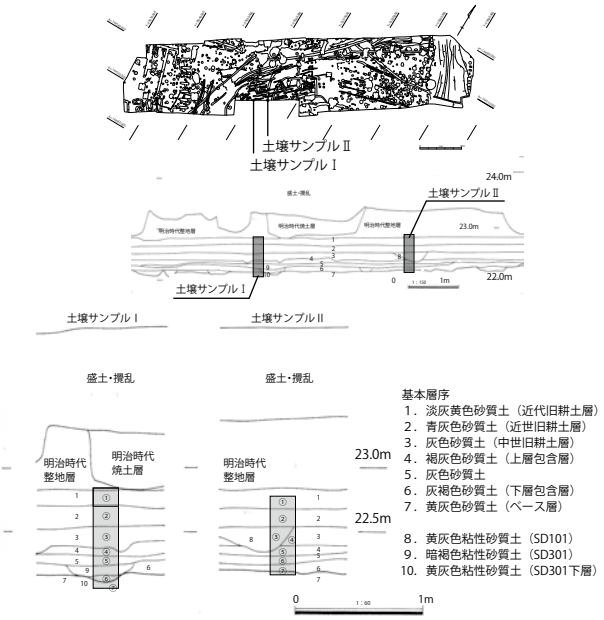


写真21　土壌サンプル採取位置



第65図　土壌サンプル採取位置図

（3）分析方法

植物珪酸体の抽出と定量はガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

2）試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）

3）電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理

4）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

5）沈底法による20μm以下の微粒子除去

6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

7）検鏡・計数

同定は400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山，2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

（4）分析結果

分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである（未分類等を除く）。これらの分類群について定量を行い、その結果を第5表および第66図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、ムギ類（穎の表皮細胞）、シバ属型、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、クスノキ科、その他

（5）考察

1）稲作跡の検討

稲作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山，2000）。なお、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

①土壌サンプルⅠ（第66図上）

１層（試料①）から７層（試料⑦）までの層準について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、２層（江戸時代：試料②）、３層（鎌倉時代：試料③）、４層（平安～鎌倉時代：試料④）では、密度が5,700～9,000個/gと高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

５層（平安時代：試料⑤）と10層（平安時代：試料⑥）では、密度が2,000個/gおよび2,800個/gと比較的低い値であり、１層（明治時代：試料①）と７層（ベース層：試料⑦）では700個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。なお、10層（平安時代：試料⑥）はSD301の埋土下部であることから、当時は周辺で稲作が行われており、そこから何らかの形で遺構内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。

②土壌サンプルⅡ（第66図下）

１層（試料①）から７層（試料⑧）までの層準について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、２層（江戸時代：試料②）では密度が12,900個/gとかなり高い値であり、８層（江戸時代：試料③）、３層（鎌倉時代：試料④）、４層（平安～鎌倉時代：試料⑤）、５層（平安時代：試料⑥）、６層（奈良～平安時代：試料⑦）でも6,200～9,700個/gと高い値である。また、1層（明治時代:試料①）でも3,400個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。なお、８層（江戸時代：試料③）はSD101の埋土であることから、当時は周辺で稲作が行われており、そこから何らかの形で遺構内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。

７層（ベース層：試料⑧）では、密度が2,100個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

２）イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属型（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはムギ類が検出された。

ムギ類（穎の表皮細胞）は、土壌サンプルⅠの４層（平安～鎌倉時代：試料④）から検出された。密度は700個/gと低い値であるが、穎（籾殻）が栽培地に残される確率は低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって、同層準の時期に調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

イネ科栽培植物の中には検討が不十分なものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

３）植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群の検出状況と、そこから推定される植生・環境について検討を行った。下位の７層では、ウシクサ族Ａ、メダケ節型、ネザサ節型、および樹木（照葉樹）のクスノキ科などが検出されたが、いずれも少量である。６層ではネザサ節型が増加し、ススキ属型、チマキザサ節型、およびブナ科（シイ属）が出現している。５層から１層にかけても、おおむね同様の結果であり、部分的にシバ属型なども認められた。おもな分類群の推定生産量によると、６層より上位ではおおむねイネが優勢であり、ネザサ節型も比較的多くなっている。

以上の結果から、下位の７層（ベース層）の堆積当時は、メダケ属（おもにネザサ節）やウシクサ族などは見られるものの、河川の影響など何らかの原因でイネ科植物の生育にはあまり適さない環境であったと考えられる。６層（奈良～平安時代）から１層（明治時代）にかけては、おおむね継続して稲作が行われており、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属（おもにネザサ節）などの竹笹類をはじめ、ススキ属やウシクサ族なども生育していたと考えられる。また、遺跡周辺にはシイ属やクスノキ科などの照葉樹が分布していたと推定される。なお、湿潤な堆積環境の指標となるヨシ属が認められないことから、ここで行われていた稲作については、常時滞水するような湿田ではなく、比較的水はけの良い乾田もしくは畑稲作（陸稲）であった可能性が考えられる。

（６）まとめ

植物珪酸体（プラント・オパール）分析の結果、土壌サンプルⅠの２層（江戸時代）～４層（平安～鎌倉時代）、および土壌サンプルⅡの１層（明治時代）～６層（奈良～平安時代）では、イネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、その他の各層準でも比較的少量ながらイネが検出され、調査地点もしくはその周辺で稲作が行われていた可能性が認められた。SD101埋土の８層（江戸時代）とSD301埋土下部の10層（平安時代）については、周辺で稲作が行われており、そこから何らかの形で遺構内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。土壌サンプルⅠの４層（平安～鎌倉時代）では、少量ながらムギ類（穎の表皮細胞）が検出され、調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が認められた。

６層（奈良～平安時代）から１層（明治時代）にかけては、おおむね継続して稲作が行われており、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属（おもにネザサ節）などの竹笹類をはじめ、ススキ属やウシクサ族なども生育していたと考えられる。また、遺跡周辺にはシイ属やクスノキ科などの照葉樹が分布していたと推定される。なお、湿潤な堆積環境の指標となるヨシ属が認められないことから、ここで行われていた稲作については、常時滞水するような湿田ではなく、比較的水はけの良い乾田もしくは畑稲作（陸稲）であった可能性が考えられる。

参考文献

杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－．考古学と自然科学，19，p.69-84.
杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究，38(2)，p.109-123.
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) －数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) －プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85

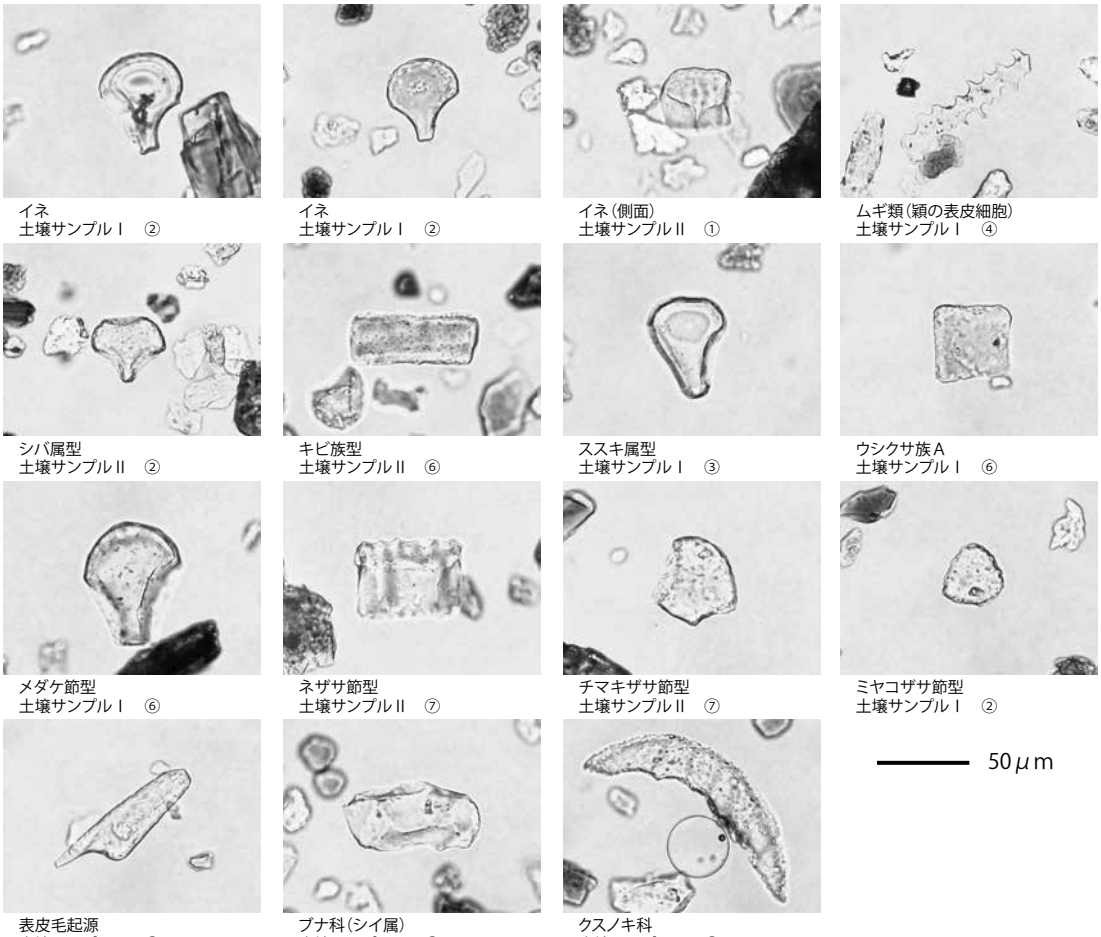


写真22　植物珪酸体（プラントオパール）

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学　名	地点・試料	土壌サンプルⅠ ①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	土壌サンプルⅡ ①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
イネ科	Gramineae																
イネ	*Oryza sativa*		7	62	57	90	20	28	7	34	129	97	64	62	85	77	21
ムギ類（穎の表皮細胞）	*Triticum-Hordeum (husk Phytolith)*		0	0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
シバ属型	*Zoysia type*		7	21	0	7	0	0	0	0	14	0	0	7	0	0	0
キビ族型	*Paniceae type*		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	7	0	7
ススキ属型	*Miscanthus type*		0	21	7	7	7	7	0	14	7	7	6	7	7	7	0
ウシクサ族Ａ	*Andropogoneae A type*		28	42	7	21	7	7	7	41	57	7	19	28	43	35	7
タケ亜科	Bambusoideae		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
メダケ節型	*Pleioblastus sect. Nipponocalamus*		14	21	14	7	7	14	0	20	21	7	13	21	21	7	14
ネザサ節型	*Pleioblastus sect. Nezasa*		76	111	72	104	61	14	21	116	165	104	121	118	121	126	28
チマキザサ節型	*Sasa sect. Sasa etc.*		0	21	7	0	7	0	0	0	0	7	6	14	7	28	0
ミヤコザサ節型	*Sasa sect. Crassinodi*		0	7	7	7	7	0	0	7	0	7	0	7	0	0	0
マダケ属型	*Phyllostachys*		0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	0	0
樹木起源	Arboreal		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ブナ科(シイ属)	*Castanopsis*		0	7	7	7	14	0	0	14	7	7	13	7	7	14	0
クスノキ科	*Lauraceae*		0	7	7	7	0	0	7	14	7	14	13	7	28	7	7
その他	*Others*		14	7	14	7	14	21	7	27	14	14	13	14	21	7	0
植物珪酸体総数	Total		145	325	201	271	143	91	50	286	422	277	267	297	348	307	83

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・㎝）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出

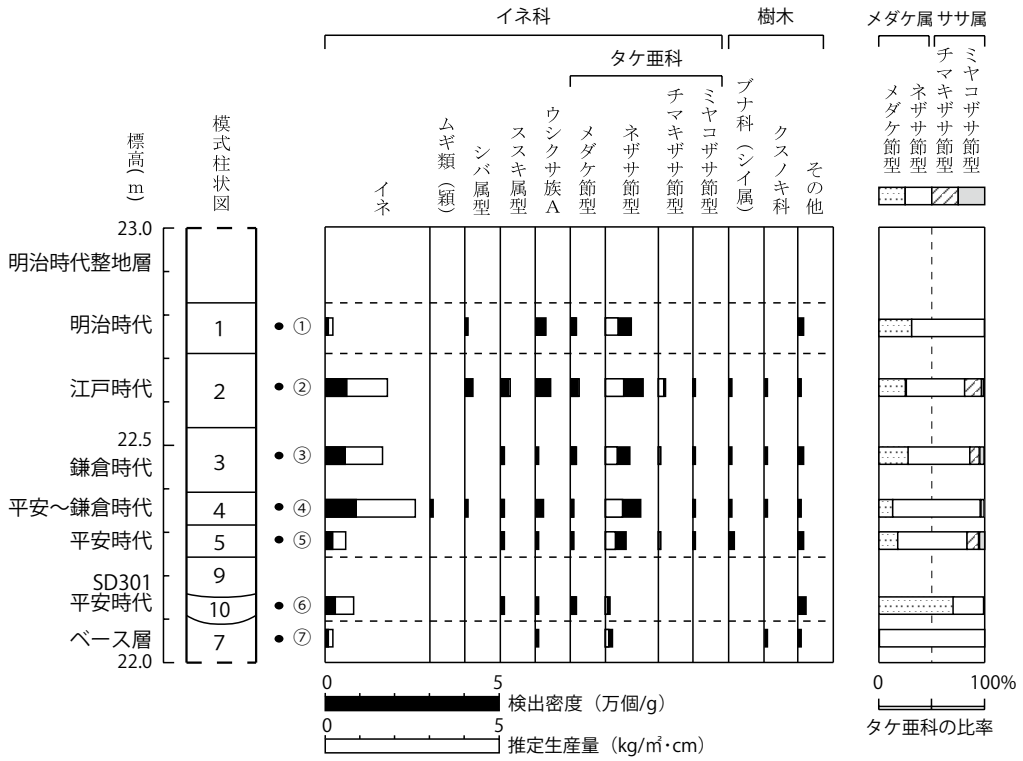
イネ	*Oryza sativa*		0.20	1.83	1.69	2.66	0.60	0.82	0.21	1.00	3.79	2.85	1.87	1.83	2.50	2.26	0.61
ススキ属型	*Miscanthus type*		0	0.26	0.09	0.09	0.08	0.09	0	0.17	0.09	0.09	0.08	0.09	0.09	0.09	0
メダケ節型	*Pleioblastus sect. Nipponocalamus*		0.16	0.24	0.17	0.08	0.08	0.16	0	0.24	0.25	0.08	0.15	0.24	0.25	0.08	0.16
ネザサ節型	*Pleioblastus sect. Nezasa*		0.36	0.53	0.34	0.50	0.29	0.07	0.10	0.56	0.79	0.50	0.58	0.56	0.58	0.60	0.13
チマキザサ節型	*Sasa sect. Sasa etc.*		0	0.16	0.05	0	0.05	0	0	0	0	0.05	0.05	0.10	0.05	0.21	0
ミヤコザサ節型	*Sasa sect. Crassinodi*		0	0.02	0.02	0.02	0.02	0	0	0.02	0	0.02	0	0.02	0	0	0

タケ亜科の比率（%）

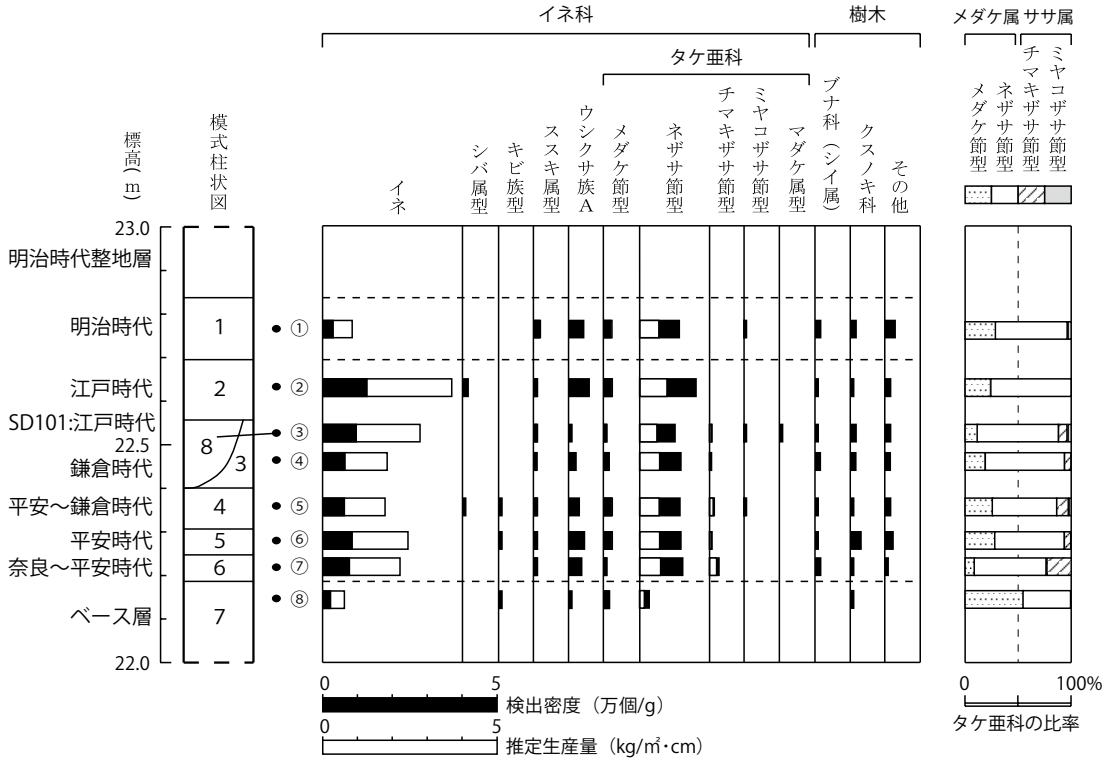
メダケ節型	*Pleioblastus sect. Nipponocalamus*		31	25	28	13	18	71	0	29	24	12	19	26	28	9	55
ネザサ節型	*Pleioblastus sect. Nezasa*		69	56	59	83	66	29	100	68	76	77	75	61	66	68	45
チマキザサ節型	*Sasa sect. Sasa etc.*		0	16	9	0	11	0	0	0	0	8	6	11	6	23	0
ミヤコザサ節型	*Sasa sect. Crassinodi*		0	2	4	3	5	0	0	3	0	3	0	2	0	0	0
メダケ率	Medake ratio		100	81	87	97	84	100	100	97	100	89	94	87	94	77	100

第５表　植物珪酸体分析結果（おもな分類群）

土壌サンプルⅠ



土壌サンプルⅡ



第66図　植物珪酸体分析結果（おもな分類群）

Ⅳ．生田遺跡第８次調査で出土した木製品と加工材の樹種

吉川純子（古代の森研究舎）

（１）はじめに

生田遺跡は神戸市中央区の生田神社西側、かつて存在した鯉川などにより形成された扇状地の扇央付近に立地する集落遺跡である。本遺跡では奈良時代～平安時代にかけての掘立柱建物跡と井戸遺構が発見され、井戸の構築材の保存状態が良かったことから、当時の木材利用状況を検証する目的でこれらの加工材と木製品の樹種同定をおこなった。分析に充てた試料は、井戸構築材のほか井戸を構成する曲物、櫛、加工材など合計158点である。出土木製品及び加工材からはステンレス剃刀を用いて横断面、接線断面、放射断面の３方向の薄片を採取し、ガムクロラールを用いてプレパラートに封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。

（２）同定結果及び考察

生田遺跡第８次調査で出土した木材の樹種同定結果を第６表に示す。出土した樹種は、モミ属、ツガ属、コウヤマキ、ヒノキ、アスナロ属、針葉樹、クリ、イスノキの計８分類群であった。以下に同定された分類群の記載を行う。

モミ属(*Abies*)：早材から晩材への移行は比較的緩やかな針葉樹で、放射組織の分野壁孔はスギ型で１分野に1-4個である。放射組織の上下縁に不規則な形状の放射柔細胞がありじゅず状末端壁を有する。本遺跡で出土したモミ属は比較的保存が良く分野壁孔などがよく残っている。

ツガ属(*Tsuga*)：早材から晩材の移行は急で傷害樹脂道が比較的頻繁に確認できる。内容物に満たされた放射柔細胞の上下に内容物を欠く放射仮道管があり、放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型に近いスギ型で1分野に2～4個ある。放射組織は単列である。

コウヤマキ(*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.)：早材から晩材への移行は緩やかで晩材部がきわめて狭い。放射組織はすべて放射柔細胞からなり、分野壁孔はマツ属より小さい窓状壁孔である。

ヒノキ(*Chamaecyparis obtusa* Endl.)：早材から晩材の移行は急で晩材部が薄い針葉樹で晩材部に樹脂細胞が点在する。分野壁孔は典型的なヒノキ型で1分野に2個存在する。

アスナロ属 (*Thujopsis*)：早材から晩材への移行はゆるやかで年輪界が比較的明瞭なヒノキに似た針葉樹。晩材部付近に樹脂細胞があり水平壁が数珠状に肥厚する。分野壁孔はスギないしヒノキ型で小さく1分野に2-3個存在する。

針葉樹：放射組織は柔細胞のみからなるようであるが、分野壁孔が溶けて確認できず、細胞壁も薄く組織が失われている可能性があるものを針葉樹とした。

クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)：本遺跡で出土した試料は大型道管が2～3列配列しその後径が減じて波状に配列する。道管は単穿孔、放射組織は1～2列でほぼ同性である。

イスノキ (*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.)：小さい道管が均一に分布する散孔材、道管は段数が少ない階段穿孔を有する。軸方向柔細胞に結晶が多く細胞が丸く膨れる。放射組織は異性で幅は1～3列で数個の単列部を介して軸方向に長く連なる。放射柔細胞にも丸い結晶細胞が見られる。

遺物番号	遺構	器種	出土位置	現場取上番号		樹種
1001	SE01	南側板	外側	WS	1	ツガ属
1002	SE01	南側板	内側	（SW）	2	ツガ属
1003	SE01	南側板	外側		3	ツガ属
1004	SE01	南側板	外側		4	コウヤマキ
1005	SE01	南側板	外側		5	コウヤマキ
1006	SE01	南側板	内側		6	ツガ属
1007	SE01	南側板	内側		7	ツガ属
1008	SE01	南側板	内側		8	ツガ属
1009	SE01	南側板	内側		9	ツガ属
1010	SE01	南側板	内側		10	ツガ属
1011	SE01	東側板	外側	WE	1	ツガ属
1012	SE01	東側板	外側		2	ツガ属
1013	SE01	東側板	外側		3	ツガ属
1014	SE01	東側板	外側		4	ツガ属
1015	SE01	東側板	中間		5	ツガ属
1016	SE01	東側板	北東外隅柱外		6	コウヤマキ
1017	SE01	東側板	北東外隅柱外		7	ツガ属
1018	SE01	東側板	北東外隅柱外		8	ツガ属
1019	SE01	東側板	北東外隅柱外		9	ツガ属
1020	SE01	東側板	外側		10	ツガ属
1021	SE01	東側板	内側		11	ツガ属
1022	SE01	東側板	中間		11-2	ツガ属
1023	SE01	東側板	中間		12	ツガ属
1024	SE01	東側板	内側		13	モミ属
1026	SE01	東側板	内側		14	ツガ属
1028	SE01	北側板	外側	WN	1	ツガ属
1029	SE01	北側板	外板		2	ツガ属
1030	SE01	北側板	外板		3	ツガ属
1031	SE01	北側板	外板		4	ツガ属
1032	SE01	北側板	外板		5	ツガ属
1033	SE01	北側板	内側		6	ツガ属
1034	SE01	北側板	内側		7	ツガ属
1035	SE01	北側板	内側		8	ツガ属
1036	SE01	北側板	中間		9	ツガ属
1037	SE01	北側板	中間		10	ツガ属
1038	SE01	西側板	外側	WW	1	ツガ属
1039	SE01	西側板	外側		2	ツガ属
1040	SE01	西側板	外側		3	ツガ属
1041	SE01	西側板	外側		4	ツガ属
1042	SE01	西側板	外側		5	ツガ属
1043	SE01	西側板	中間		6	ツガ属
1044	SE01	西側板	中間		7	ツガ属
1045	SE01	西側板	中間		7-2	ツガ属
1046	SE01	西側板	外側		8	ツガ属
1047	SE01	西側板	外側		9	ツガ属
1048	SE01	西側板	中間		10	ツガ属
1049	SE01	西側板	中間		11	ツガ属
1050	SE01	西側板	中間		12	ツガ属
1051	SE01	西側板	内側		13	ツガ属
1052	SE01	西側板	中間		14	針葉樹
1053	SE01	西側板	内側		15	ツガ属
1054	SE01	西側板	内側		16	ツガ属
1055	SE01	西側板	中間		17	コウヤマキ
1056	SE01	西側板	内側		18	ツガ属
1057	SE01	西側板	内側		19	ツガ属
1058	SE01	隅柱	南東外隅柱	W	7	ツガ属
1059	SE01	隅柱	南東内隅柱		13	アスナロ属
1060	SE01	隅柱	南西外隅柱		9	アスナロ属
1061	SE01	隅柱	南西内隅柱		15	針葉樹
1062	SE01	隅柱	北東外隅柱		21	針葉樹
1063	SE01	隅柱	北東内隅柱		18	針葉樹
1064	SE01	隅柱	北西外隅柱		20	針葉樹
1065	SE01	隅柱	北西内隅柱		17	アスナロ属
1066	SE01	横桟	北上桟？南上桟位置		1	針葉樹
1067	SE01	横桟	南中桟		4	針葉樹
1068	SE01	横桟	南下桟		11	コウヤマキ
1069	SE01	横桟	東上桟		10	アスナロ属
1070	SE01	横桟	東下桟		14	コウヤマキ
1071	SE01	横桟	北下桟		19	コウヤマキ
1072	SE01	横桟	西上桟		12	針葉樹
1073	SE01	横桟	西下桟		16	コウヤマキ
1074	SE01	杭状材	南東内 - 外隅柱間		8	針葉樹
1075	SE01	添材	南東外隅柱添材		2	ツガ属
1076	SE01	添材	南東外隅柱添材		3	ツガ属
1077	SE01	添材	南西外隅柱添材		5	クリ
1078	SE01	添材	南西外隅柱添材		6	ツガ属
1079	SE01	添材	北西外隅柱添材		22	モミ属
1080	SE01	添材	北西外隅柱添材		23	モミ属
1081	SE01	加工材	北西内 - 外隅柱間		24	アスナロ属

遺物番号	遺構	器種	出土位置	現場取上番号		樹種
1082	SE01	曲物（集水枡）	本体	R-087	中央	ヒノキ
1083	SE01	曲物（集水枡）	帯板	SE01　No.7		ヒノキ
1084	SE01	曲物（集水枡）	あて板 1			ヒノキ
1085	SE01	曲物（集水枡）	あて板 2			ヒノキ
1086	SE01	曲物（集水枡）	あて板 3			ヒノキ
1087	SE01	曲物（集水枡）	あて板 4			ヒノキ
1088	SE01	曲物（柄杓）	本体	R-086	北側	ヒノキ
1089	SE01	曲物（柄杓）	柄の補強板	SE01　No.6		ヒノキ
1090	SE01	曲物（柄杓）	底板			ヒノキ
1091	SE01	櫛	枠内　植物遺体層上			イスノキ
1092	SE01	加工材	曲物据付面（北西）			アスナロ属
2001	SE02	南側板	外側	S	1	アスナロ属
2002	SE02	南側板	外側		2	針葉樹
2003	SE02	南側板	外側		3	アスナロ属
2004	SE02	南側板	外側		4	ツガ属
2005	SE02	南側板	外側		5	針葉樹
2006	SE02	南側板	外側		6	ツガ属
2007	SE02	南側板	内側　南東柱際		7	ヒノキ
2008	SE02	南側板	内側　南西柱際		8	アスナロ属
2009	SE02	南側板	内側		9	ツガ属
2010	SE02	南側板	内側		10	ツガ属
2011	SE02	南側板	内側		11	ツガ属
2012	SE02	東側板	内側	E	1	アスナロ属
2013	SE02	東側板	外側		2	ツガ属
2014	SE02	東側板	外側		3	ツガ属
2015	SE02	東側板	内側		4	ツガ属
2016	SE02	東側板	外側		5	ツガ属
2017	SE02	東側板	外側		6	ツガ属
2018	SE02	東側板	内側		7	ツガ属
2019	SE02	東側板	内側		8	ツガ属
2020	SE02	東側板	内側		9	ツガ属
2021	SE02	東側板	内側　北東柱裏		10	アスナロ属
2022	SE02	東側板	外側		11	針葉樹
2023	SE02	東側板	外側		8-2	針葉樹
2024	SE02	東側板	外側		9-2	ツガ属
2025	SE02	北側板	内側	N	1	ツガ属
2026	SE02	北側板	内側		2	ツガ属
2027	SE02	北側板	内側		3	ツガ属
2028	SE02	北側板	内側		4	ツガ属
2029	SE02	北側板	外側　北東柱裏		5	ツガ属
2030	SE02	北側板	外側		6	ツガ属
2031	SE02	北側板	外側		7	ツガ属
2032	SE02	北側板	外側		8	ツガ属
2033	SE02	北側板	外側		9	ツガ属
2034	SE02	北側板	外側		10	ツガ属
2035	SE02	北側板	外側		11	ツガ属
2036	SE02	北側板	外側		12	ツガ属
2037	SE02	北側板	外側　北東柱裏		13	ツガ属
2038	SE02	北側板	外側　北西柱裏		14	モミ属
2039	SE02	西側板	外側（最外）	W	1	モミ属
2040	SE02	西側板	外側（最外）		2	ツガ属
2041	SE02	西側板	外側（最外）		3	針葉樹
2042	SE02	西側板	外側		4	ツガ属
2043	SE02	西側板	外側		5	ツガ属
2044	SE02	西側板	内側		6	ツガ属
2045	SE02	西側板	内側		7	モミ属
2046	SE02	西側板	外側		8	モミ属
2047	SE02	西側板	内側		9	ツガ属
2048	SE02	西側板	外側		9-2	ツガ属
2049	SE02	西側板	内側		10	針葉樹
2050	SE02	西側板	外側　北西柱際		11	モミ属
2051	SE02	西側板	外側		12	ツガ属
2052	SE02	隅柱	南東		P1	モミ属
2053	SE02	隅柱	北東		P2	ツガ属
2054	SE02	隅柱	北西		P3	ツガ属
2055	SE02	隅柱	南西		P4	ツガ属
2056	SE02	横桟	南		B1	モミ属
2057	SE02	横桟	東		B2	モミ属
2058	SE02	横桟	北		B3	モミ属
2059	SE02	横桟	西		B4	ツガ属
2060	SE02	曲物	本体			ヒノキ
2061	SE02	曲物	帯板 1			ヒノキ
2062	SE02	曲物	帯板 2			ヒノキ
2063	SE02	曲物	帯板 3			ヒノキ
2064	SE02	曲物	あて板 1			ヒノキ
2065	SE02	曲物	あて板 2			ヒノキ
2066	SE02	曲物	あて板 3			ヒノキ
3001	SE03	曲物	本体			ヒノキ
3002	SE03	曲物	帯板			針葉樹

第6表　出土木材の樹種

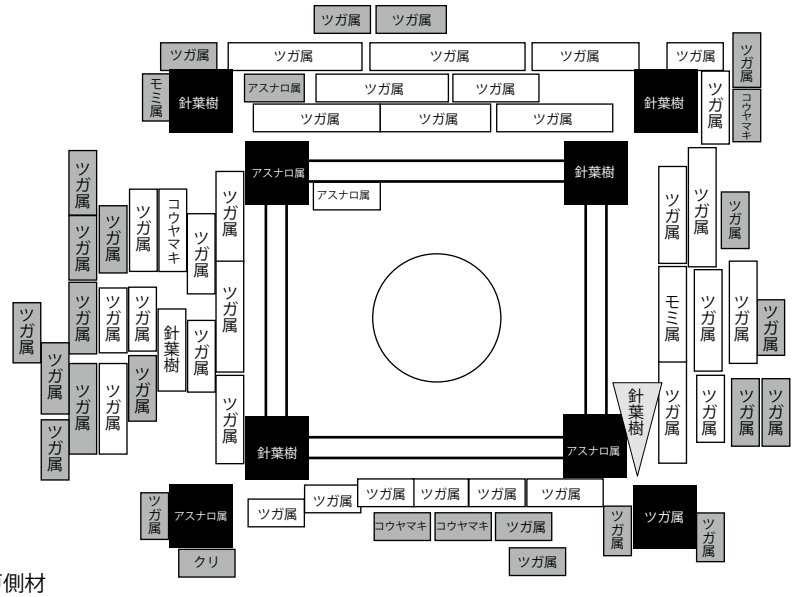
第７表には全試料及び利用種別の構成樹種をまとめた。全体の構成種ではツガ属が圧倒的に多く、91点と57.6%を占める。次いでヒノキ18点11.4%、モミ属12点、アスナロ属11点、コウヤマキ8点、そしてクリとイスノキがそれぞれ1点ずつとなった。利用種別では井戸構築材に主にツガ属を利用しており、モミ属、アスナロ属、コウヤマキが使われ、ヒノキ、クリも使われていた。また曲物はほとんどヒノキであった。櫛はイスノキ、加工材はアスナロ属であった。第８表には遺構別に井戸構築材に使われている樹種を示した。SE01とSE02ともにツガ属を主体としており、モミ属とアスナロ属が使われているが、SE01では比較的コウヤマキが多く使われ、クリも使われているのに対して、SE02ではコウヤマキの利用はなくヒノキが使われているという違いがあった。

第68図にはそれぞれSE01とSE02の井戸構築材配置図に樹種を表示した。隅柱、桟木、側板などで樹種による使い分けはなされていないことが分かる。ただし、SE02ではツガ属以外に北と西の側板にモミ属のみが使われているのに対し東側板と南側板にはアスナロ属とヒノキが使われるという違いがあった。

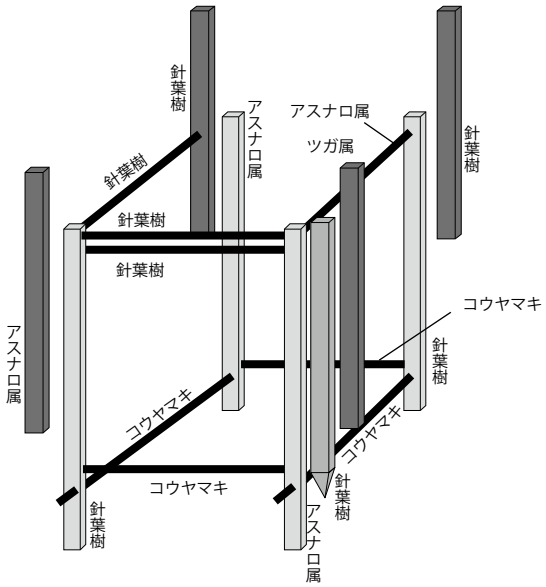
兵庫県では摂津と播磨を中心に井戸材の分析例が796件報告されており、本遺跡のような縦板組立式の井戸の普及は鎌倉時代以降とされ、古代の井戸ではヒノキを筆頭にスギとコウヤマキが井戸材の8割であるが、鎌倉時代になるとヒノキは変わらず高率であるが、モミ属、ツガ属、二葉マツが4割近くを占めるまでに増加する（藤田、阿刀 2012）。本遺跡ではツガ属主体でモミ属とアスナロ属を伴っており、SE01ではコウヤマキが使われているがSE02ではコウヤマキは確認されずヒノキが使われていて、時期的に井戸材利用樹種の変化期にあったことがうかがえる。市内の鎌倉時代の上沢遺跡16次では井戸材26点中ツガ属15点、マツ属複維管束亜属7点、コウヤマキとモミ属がそれぞれ2点ずつであり、ツガ属が主体でコウヤマキとモミ属を伴うという点で構成が似ている。用材の遷移に関して藤田らは、背景としてモミ・ツガ林の増大といった植生の変化、あるいは瀬戸内航路の発展によって四国など他地域の材木が安定して流入するようになった（藤田、阿刀 2012）、と推測している。時代的には植林などすでに山野の植生に人為的関与が頻繁となっていることから、中間温帯林の植生の変化というよりはむしろ安価で大量に入手可能なツガ属、モミ属を多用するようになったと考える方が順当であろう。兵庫県内遺跡の曲物以外の井戸材樹種を集計してみると、平安時代ではヒノキ59%、スギ25%であるが鎌倉時代はヒノキ30%、モミ属19%、スギとツガ属がそれぞれ12%ずつとヒノキの利用が減少する傾向にある。また平安時代ではほぼ針葉樹しか選択されていないが鎌倉時代になると広葉樹13種を含め20種以上の多様な樹種を用いている。なお、井戸集水枡などの曲物に関しては、本遺跡でもほぼヒノキであり、平安時代から鎌倉時代にかけての曲物利用樹種を集計すると90%以上ヒノキが使われている（伊東、山田 2012）。ヒノキは成長に長い時間を要することからヒノキ材の価格が上がり、採水する曲物にはヒノキを用い構築材は他の安価な樹種を利用するようになったとも考えられる。

引用文献
伊東隆夫・山田昌久．2012．木の考古学　出土木製品用材データベース CD-ROM．海青社．
藤田淳・阿刀弘史．2012．Ⅴ遺跡出土木製品の種類と地域性－18章　北近畿－京都府・兵庫県・滋賀県－．
木の考古学　出土木製品用材データベース．海青社．

SE01



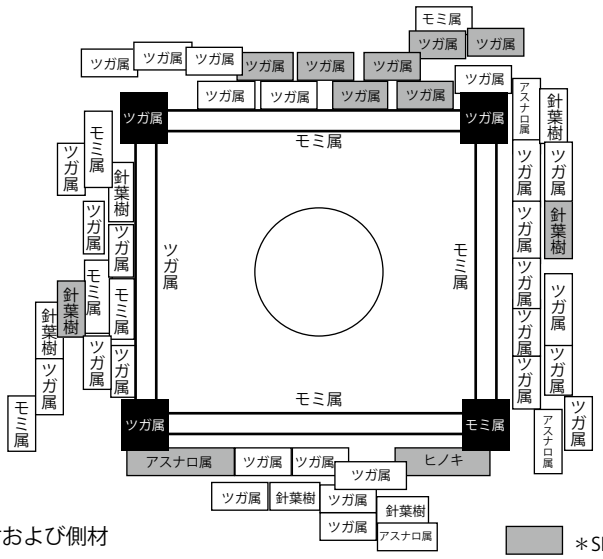
井戸側材



井戸枠材

＊SE01 については
厚さの薄い材、または小型の材を示す

SE02



井戸枠材および側材

＊SE02 については　厚みのある材を示す

第67図　井戸構築材樹種分布

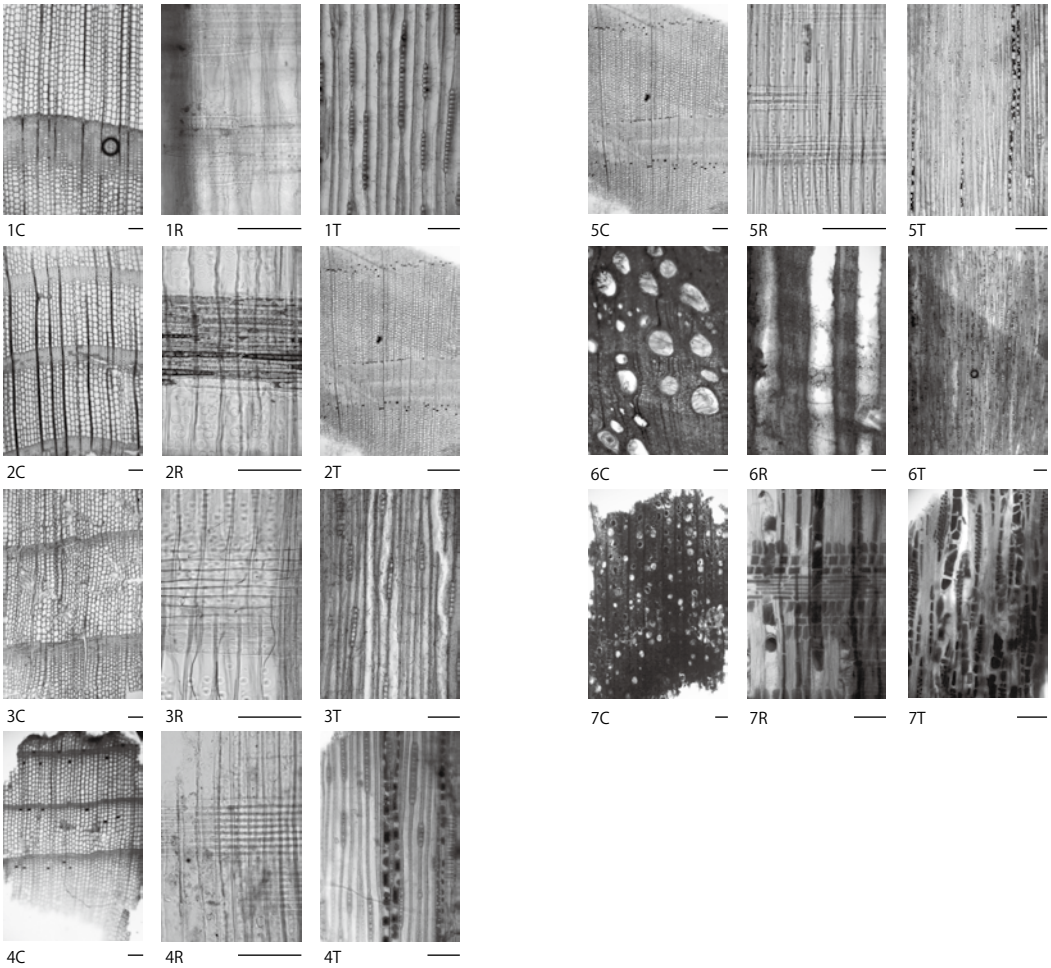


写真23　出土木製品の顕微鏡写真

1. モミ属 (2038北側板)　2. ツガ属 (1006南側板)　3. コウヤマキ (1004南側板)
4. ヒノキ (2062曲物帯板)　5. アスナロ属 (1059隅柱)　6. クリ (1077添材)
7. イスノキ (1091櫛)

(C：横断面, R：放射断面, T：接線断面, スケールは0.05mm)

樹種	井戸構築材	加工材	曲物	櫛	合計
ツガ属	91	—	—	—	91
ヒノキ	1	—	17	—	18
針葉樹	15	—	1	—	16
モミ属	12	—	—	—	12
アスナロ属	9	2	—	—	11
コウヤマキ	8	—	—	—	8
クリ	1	—	—	—	1
イスノキ	—	—	—	1	1
合計	137	2	18	1	158

第７表　出土樹種構成

樹種	SE01	SE02
ツガ属	53	38
ヒノキ	—	1
針葉樹	9	6
モミ属	3	9
アスナロ属	6	5
コウヤマキ	8	—
クリ	1	—

第８表　井戸構築材樹種

Ⅴ．生田遺跡出土の動物遺存体

丸山真史（東海大学海洋学部）

（1）概要

今回、報告する資料は生田遺跡第８次調査において出土した明治時代の動物遺存体である。破片数にして貝類２点、鳥類１点、哺乳類41点、総計44点を数える。それらのうち種類や部位を同定したものは、鳥類のニワトリ１点、哺乳類のイヌ21点、ウシ６点、イノシシ/ブタ１点である（第９表）。

軟体動物門　Mollusca
　軟体動物門の一種　Mollusca fam., gen. et sp. indet.

脊椎動物門　Vertebrata
　鳥綱　Aves
　　キジ目　Galliformes
　　キジ科　Phasianidae
　　ニワトリ *Gullus domesticus*

哺乳綱　Mammalia
　食肉目　Carnivora
　　イヌ科　Canidae
　　イヌ　*Canis familiaris*
　偶蹄目　Artiodactyla
　　ウシ科　Bovidae
　　ウシ　Bos Taurus
　　イノシシ科 Suidae
　　イノシシ / ブタ Sus scrofa

第９表　動物遺存体種名表

（2）種類別の特徴

貝類は調査区北西部、建物基礎１に近接する円形土坑内から２点出土している。真珠層の細片であるため、アワビやサザエなどが想定されるが、本資料の種の特定は困難である。

鳥類は、建物基礎１北東の近代の整地土中からニワトリの上腕骨が１点出土しており、近位部にはイヌの咬痕が見られる。最大長（GL）80.8mm、近位端最大幅（Bp）23.2mm、遠位端最大幅（Bd）18.3mmを測る。

哺乳類では、イヌが北側煉瓦蓋墓と南側煉瓦蓋墓から出土しており、いずれも埋葬されたものと考えられる。北側煉瓦蓋墓では遊離歯（左２右１）３点、下顎骨（左１右１）２点、上腕骨（右）１点、計６点が出土している。下顎第１後臼歯が萌出していない幼獣である。南側煉瓦蓋墓では椎骨、上顎骨（左１右１）下顎骨（左１右１）、肩甲骨（左１不明１）が２点ずつ、上腕骨（左）、尺骨（右）、橈骨（右）、寛骨（左）、大腿骨（右）、脛骨（左）、中手骨/中足骨（不明１）が１点ずつ、計15点が出土している。下顎第１後臼歯は萌出しておらず、上腕骨、橈骨、脛骨は近位・遠位の両端が、肩甲骨の遠位端、尺骨の近位端、大腿骨の遠位端が癒合していない幼獣と考えられる。

ウシは、建物基礎１北東の近代の整地土中から癒合した橈骨と尺骨（左）、尺骨（左）、大腿骨（左）、脛骨（右）、舌骨（左）が１点ずつ、計５点が出土している。また、建物基礎１北東に位置する方形の落ち込み（整地土）周辺から寛骨（右）が１点出土している。

（3）生田遺跡における動物利用

ニワトリやイノシシ／ブタは食用となり、食料残滓と考えられる。イヌは全身骨格が全てそろっていないが、墓で解剖学的位置を部分的に保持した状態で検出されており、飼い犬が埋葬されたものと考えられる。いずれも仔犬であり、病死などの理由が想定される。ウシは鋸で切断された四肢骨が主体であるが、舌骨や手根骨が出土していることから当地近郊で解体された可能性もある。鋸で切断された橈骨、大腿骨、脛骨は、兵庫津遺跡や大坂城下町跡などの骨細工に関連する遺跡での出土は一般的であるが（丸山・松井2006、丸山・松井2008など）、寛骨が切断されている例は極めて稀である。明治時代には牛骨を煮込んで骨髄をスープとして利用したと考えられる事例があり（山根2003・2010）、当地には外国人向けの社交場があったとする指摘もあり（註1）、料理との関連も推測される。しかし、本資料には長時間煮込まれたような痕跡は見られず、即断することは難しい。

写真24　出土骨片
左　ウシ脛骨（遠位部）整地層出土
右　ウシ寛骨（腸骨）方形落ち込み出土

（4）まとめ

生田遺跡第８次調査では貝類、鳥類、哺乳類が出土した。ニワトリやイノシシ/ブタは食料残滓と考えられ、イヌは飼い犬を埋葬したものと考えられる。鋸で切断された牛骨は、骨細工の廃材や洋食のスープに骨髄を利用したなどのことが考えられる。今回は、明治時代における当地の利用状況が明らかではないため結論には至らないが、近代神戸における生活史の一端を垣間見る資料として意義深く、今後の資料の蓄積が望まれる。

註１　中谷正編2006『生田遺跡第4次発掘調査概要』

参考文献
丸山真史・松井章2006「兵庫津遺跡（御崎本町地点）出土の脊椎動物遺存体」大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告第１号　大手前大学史学研究所pp.195-209
丸山真史・松井章・黒田慶一2008「大坂城下町における骨細工－備後町２丁目の調査より」『大阪歴史博物館研究紀要』第７号　大阪歴史博物館pp.19-30
山根洋子2003「明石町遺跡出土の鳥類・哺乳類遺体」『明石町遺跡』明石町遺跡調査会pp.177-180。
山根洋子2010「外国人居留地の厨房」『人と動物の考古学』吉川弘文館pp.122-123

Ⅵ. まとめ

今回の調査では縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代～平安時代、中世末、近世、近代の各時代の遺構・遺物を確認した。検出遺構は竪穴建物２棟、掘立柱建物10棟、柱穴約700基、土坑８基、溝９条と多数の耕作痕などである。大規模調査となった第４次調査地の北側に隣接し、各時代の遺構・遺物との関連性、現状の生田遺跡の北西部での遺跡の在り方について検討する材料が得られた。特徴的な遺構・遺物などから推測される事象について触れておきたい。

(1) 検出遺構について

縄文時代

今回の調査で、縄文時代の遺構は土坑１基と地山面に土器片数点が散らばる箇所を１ケ所検出したに留まる。遺物の出土もわずかであった。第４次調査では竪穴建物、土坑、落ち込みが検出され、後期の元住吉山Ⅰ式～Ⅱ式、宮滝式に比定される大量の遺物が出土し、この地が集落の中心かそれに近いことを予測させるものであった。遺構の分布状況をみると竪穴建物を中心にその外側に土坑や土器溜りが環状に分布している。第４次調査地の北側では遺構が確認されておらず、空白地の可能性が考えられた。今回の調査では旧耕土層など後世の堆積への遺物の混入もほとんど認められなかった。土器の出土量からすると集落内での遺構の希薄な空白地とするよりは、居住域の縁辺部にあたるものと推測され、北側に集落域が拡がる可能性は低いものと考える。

今回の出土土器はわずかであるが、後期後葉の宮滝式に比定されるもの、また一部、北白川上層式と考えられる破片の出土があった。この地では後期に入った段階で徐々に集落形成がはじまり、後葉にピークを迎えるものと推測される。

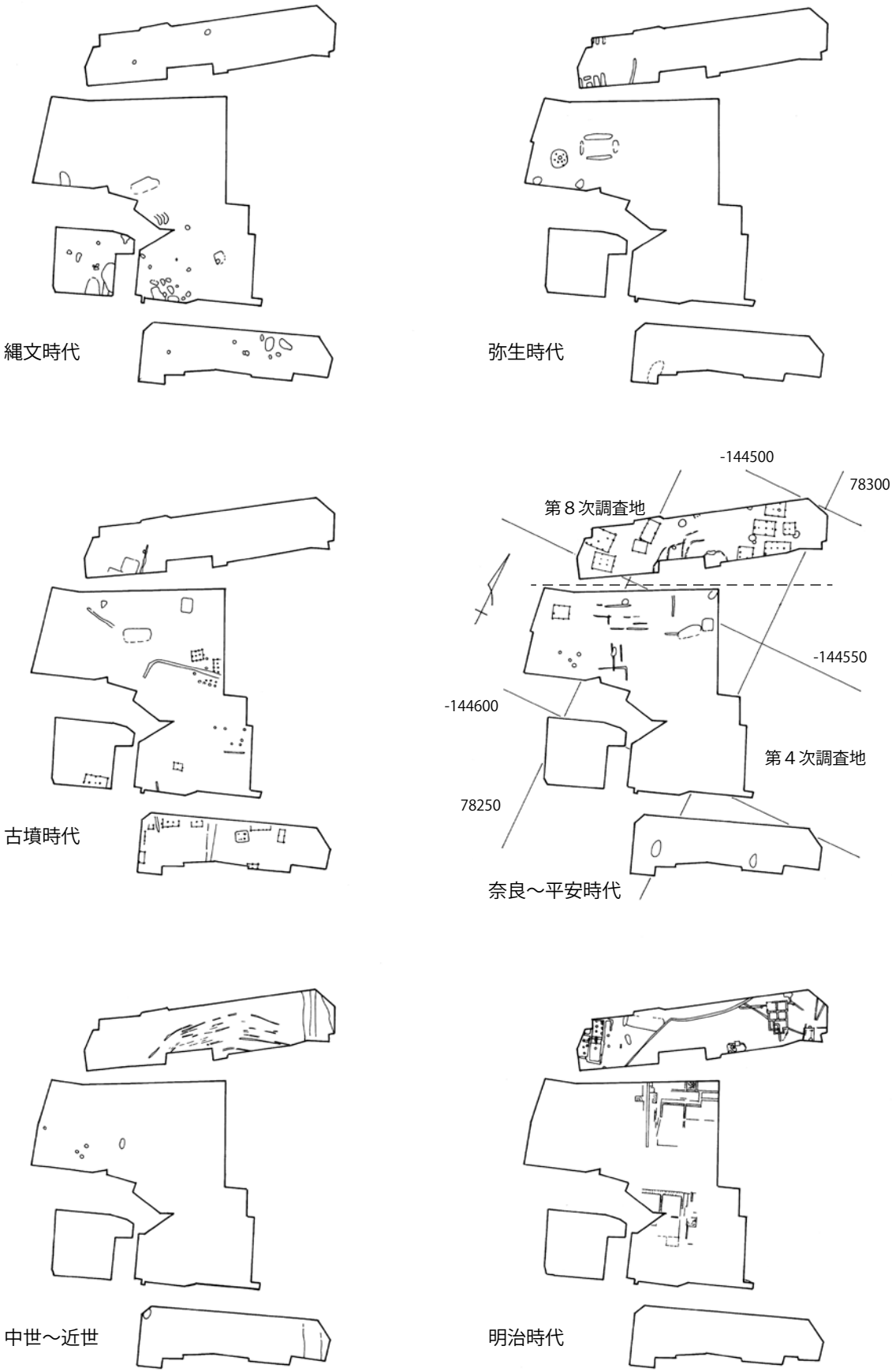
また中世の堆積からではあるが石刀の出土が特筆される。市内では東灘区本山遺跡、灘区篠原遺跡で出土例がある（神戸市教育委員会2015『縄文時代のこうべ』）。

弥生時代

弥生時代の遺構のうち、調査区南西部で検出した溝は、第４次調査地検出の方形周溝墓ST4301に近く、遺構の平面配置からSD04～08を方形周溝墓と考えた。ST4301の規模は東西12.8m、南北8.4mで、今回検出のSD04とSD06の間、東西方向の距離は約8.0m、南北を長軸とする周溝墓であれば形状としておかしくないものと考える。今回は供献土器の出土もなく決め手を欠き、また溝は土坑状を呈するものであるが、同様の周溝墓は戎町遺跡でも検出例がある（神戸市教育委員会2005『戎町遺跡第35・38・50・56次発掘調査報告書』）。南の調査区からのつながりが考えられ、周溝墓であれば付近が墓域となる可能性をもつ。SD04の出土遺物から弥生時代中期後半のものと考えられる。

古墳時代

調査区の西側で竪穴建物を２棟確認した。竪穴建物としたものの、検出の過程において遺存部分のほとんどを鋤き取ってしまった感がある。壁の立ち上がりや周壁溝の痕跡などは曖昧なものとなった。第４次調査地では古墳時代中期～後期の竪穴建物、後期の掘立柱建物が検出され、その配置から有力者層の居館と推測された。今回の調査区からは遺物の出土自体が非常に少なかった。その中で竪穴建物とした遺構周辺での出土量は少量ながらまとまりがあり、遺構の存在を肯定するものと考えている。



第68図　第4・8次調査地 遺構変遷図

調査区東端のSD09の上層、近世の石組み溝からも少量ながら古墳時代の遺物が出土しているが、集落域は第１次調査地と第４次調査地付近、また第７次調査地でも多くの遺物が出土しており、標高20mあたりに展開するものと推測される。

古代（飛鳥・奈良～平安時代）

奈良～平安時代の遺構としては掘立柱建物10棟を復元、井戸３基、落ち込みを検出し、柱穴のほとんどがこの時期に属するものと考える。今回の調査での検出遺構・遺物の中心となる時代である。第４次調査では掘立柱建物１棟、井戸や土坑、溝が確認されていたが、古代の集落の中心は今回の調査地付近～以北の可能性が高い。

検出した柱穴から掘立柱建物10棟を復元した。柱穴の掘形は平面形が方形や隅丸方形のものが多く、また規模も比較的大きなものであった。調査区南東部に多く、また西側にもまとまりが認められる。調査区中央は希薄であるが、これは窪地状の地形のためである。この窪地の東辺で井戸を３基検出した。南方向への延長線上、第４次調査でも井戸が検出されており湧水層が続くのだろう。南東部で復元し得なかった柱穴も含め、さらに南側と第４次調査地の北東部に建物が拡がっていた可能性があったが、震災後の共同住宅建設時にその部分の情報は失われた。

掘立柱建物から出土した図化可能な遺物を示したが、小片のものが多く、詳細な時期を決定できるものは少ない。図化した遺物が建物の時期を示すものかは出土量からも不安の残る結果であった。出土遺物に示される建物の年代観は、SB03とSB08が飛鳥時代の建物、SB09～12が奈良時代、SB04～06が平安時代と考えられる。また建物の方向性をみると、調査区の西と東にそれぞれまとまりが見られる。西側では建物SB03とSB05がほぼ南北を軸とし、SB04とSB06が真北から西12°と15°振るもので数値は近い。また東側ではSB09とSB10がともに西へ18°、SB08とSB11、SB12がそれぞれ西へ22°、23°、25°と近い数値であり、関連する建物の可能性が高い。遺物の年代観と方向による建物の組み合わせとの相違を見ると、SB03は飛鳥時代の古相の遺物が出土しているが、構成する柱穴Pit095は平安時代の遺物が出土したSB04の柱穴Pit096を切り込み、包含層出土の遺物、SB06と同じ方向性から平安時代の建物と考えてもよいようである。またSB08出土の須恵器は飛鳥時代、あるいは古墳時代末と考えられ、調査区東半での古墳時代の遺物の出土が少なかったこと、周辺での紡錘車の出土から古墳時代の可能性も考えられるが、奈良時代後半の建物SB10の西の柱列がSB08の東柱列の延長にあたること、同時期の遺物が多く出土したSK07を間に挟み、曲物が出土するまでは同一の建物を構成する柱穴と考えていたSE03の配置など、現状では奈良時代の遺構とするのが妥当と思われ、屋敷を形成したかと推測する。おそらくは、調査区東側に（飛鳥～）奈良時代の建物、西側に平安時代～鎌倉時代初頭頃の建物が分布していたと考えられる。第４次調査地で検出された平安時代の建物SB4101もSB06と建物軸を同じくしている。

次に調査区の中央で井戸３基を検出した。SE03が奈良時代後半、SE01と02が平安時代後期～鎌倉時代初頭のものと考えられる。SE01とSE02が縦板組隅柱横桟留構造の井戸、SE03は底で曲物のみを検出した。SE01～03の曲物はいずれもヒノキ材である。SE01・02の井戸側に用いられた材は57％がツガ属であった。ヒノキやコウヤマキなどの使用はあるが少なく、古代末の材の選択傾向とみられる。

SE01は特異な検出状況で井戸側が二重であった。元あった井戸側の内側に新たに側を設けた痕跡と考えている。内外の側板間に堆積する砂から手斧屑や枘を作り出した材の切れ

端が出土しており、この場で最終的な製作が行われたと考えられる。北辺では厚みのある材が内外の側板の間に押し込まれるように出土しており、元の古い側板が再利用された可能性がある。丁寧な片付け傾向にある井戸の構築において、側材の配置や古材を隙間に詰め込んだ状況は現場合わせ的な感じがする。西辺の上の横桟は、南西内側隅柱から北西外側の隅柱に差し込まれており、これも理解しにくい状況であった。

外側材に伴う隅柱には枘穴はあるものの横桟を伴っていなかった。二重の井戸側という検出状況から、加工材1081や1092が、内側材への転用の際に再加工された材の切れ端かと想定したが、前提として質的に古材とは考えにくいものと判断される。次に加工材1081が1067や1070、1071の材と、また1092材は西辺の上桟1072材と形状が似ることから、どれかが、本来は同じ材であった可能性を考えた。1081材については樹種同定の結果からも積極的に肯定できるまでに至らなかったが、1092材は、1072材と同一のものかと推測する。一度製作したものの、長さを誤ったために切断、その切れ端であったかもしれない。内側隅柱から外側隅柱に渡された材であることも興味深く、さらに長さを誤った可能性も残る。

SE01には、内側の北辺などに使われた幅広で厚く丈が長い材と、幅10㎝、厚さ１㎝ほどの材、厚さはあるが傷みが認められる丈の短い材、端材のような小さな材が使用されていた。内側材として新たに調材されたものが二種と外側からの流用材により構成されるようである。
北辺の中間材には穿孔のある厚手の材があり、建築部材などの転用も考えられる。一方、SE02の側板材の大半は薄手の割剥ぎ材で、一部、厚みのある材が使用されていた。第４次調査の井戸はSE02と類似し、SE01の構造、材の選択に違いが認められる。

今回の古代に属する遺物では旧耕土層出土ではあるが巡方と考えられる銅製品、SK08からは須恵器蓋の転用硯、近世の石組み溝では北側からの流れ込みと考えられる円面硯が出土し、特筆される。規模の大きい方形の柱穴は付近に官衙的な施設や関連する集団の存在を示すものと考えられる。北東80m地点での花隈城向城跡第１次調査では飛鳥時代の大規模な溝が検出され、多量の土器や木製品が出土している。飛鳥時代以降、古代の中心的な集落が存在した可能性を示唆するものであろう。

中世～近世

中世以降、第４・８次調査地で建物は確認されていない。今回の調査地での土壌分析の結果、古代末頃の耕土層から江戸時代の耕土層で多量のイネのプラント・オパール、少量のムギ類の組織が検出された。調査区中央南側から北東にかけて形成された段に沿って明治時代の溝SD01、その東側に中世、近世の耕作溝が沿う。溝は明治18年測仮製図に表現される等高線の形状に近く、同規模、同形状の土地区画が中世から近代まで踏襲されたと考えられる。また調査区中央の浅い窪地の部分では、土地の形状に合わせて逆Ｕ字形に掘削された溝を検出した。溝の埋土や溝を覆う砂層出土の遺物から平安時代末頃のものと考えられる。平安時代には西側に建物、東に旧地形に沿った小規模な耕作地があったが、中世の段階で東西に長い耕作地へ変化したと考えられる。

また中世末、室町時代後半頃のものと考えられる大溝が調査区の東端に沿って伸びる。北側、第８次調査地で幅約9.5m、南側の第４次調査地では幅約６m、南北間での距離は約120mとなる。埋土は大半が砂層で洪水により埋没したと考えられるが、第８次調査での状況から当初は溝として機能していたと考えられる。上層で石組み溝を検出し、江戸時代後半の陶磁器類が多く出土した。同時期の絵図でも調査区東側の南北道に沿って水路が描かれる。

近代

明治18年測仮製図では付近には陸田と水田が混在する。旧生田川の西側、およそ現ＪＲ神戸線と山手幹線の間、中山手通の街区の南半まで市街地の表記がみえる。大正時代以降の地図ではほぼ街場の表記となり、明治時代後半以降、市街地化が進んだ地域である。

調査区の東西で１棟ずつ、建物基礎を確認した。東の建物基礎は南東部が曲線を描いている。土地区画、または道路の形状などに沿ったものか。建物の底地面積は約344㎡、洋館とすれば、相楽園に保存される国重要文化財旧ハッサム住宅より一回り大きい建物とイメージされる。

調査区の全面で整地層を確認し、所々で煉瓦積の構造物を確認したが、南側の第４次調査地で確認された中華同文学校などの遺構に比べると規模は小さい。２棟の建物が同時に存在したかは明らかでないが、敷地内の空間は広い。溝SD01は、元々は耕作に伴う溝であろうが、屋敷地へと変わる段階で区画溝の役割とともに水場施設にも利用されたであろう。今回は残念ながら土地所有の変遷について明らかにできなかった。

（２）中世末の大溝 SD09について

調査区東端で検出したSD09最下層出土の遺物は16世紀後半～17世紀前半のものと考えられる。溝は大半が洪水による砂で埋まるが、溝底や肩部にシルト質～粘質土の堆積があり、しばらくは溝が開いていたことを示すのだろう。後世の流れにより溝の幅が拡がった可能性は低いものと思われる。溝が掘削されたものか、あるいは自然地形であったかの判断は現状では難しい。溝に切られる奈良時代の土坑SK08の埋土には滞水を繰り返した痕跡がみられ、元来、水が入りやすい箇所であったとも考えられる。明確なのは中世末～近世初頭の段階で土地を画する溝となり得たことである。この時代の規模の大きな溝を考えると、南西に位置する花隈城との関係に留意が必要であろう。溝底からは花隈城跡第３次調査で検出された、堀跡の可能性のある溝SD101から出土した軒平瓦と同文の瓦が１点ではあるが出土している。

花隈城は天正３（1575）年頃に織田軍の荒木村重により築城されたと推定され、村重の造反により天正８（1580）年、池田恒興らにより攻め落とされた。城の縄張りは岡山大学付属図書館池田家文庫所蔵の『摂津国花熊之城図』（以下、「城図」。史料名以外は遺跡名称の「花隈城」を用いる）により知ることができ、本丸･二の丸･三の丸からなる主郭、西側の町屋、東の侍町･足軽町の３つの区画からなる。右上方には池田方の向城も描かれ、これらは「一町五分程の積り」との記載から縮尺7,200分の１相当で描かれたものと解される。現代の地図と合わせると旧生田川と旧湊川間がほぼ一致し、精度の高い絵図であることがわかる。この縮尺で花隈城と向城の輪郭、今回の調査地と第４次調査で検出された溝の位置を示したのが第69図である。花隈城の範囲は、東が鯉川筋のあたり、北は県庁南の東西の道路、西は花隈町と下山手通7・8丁目の境の南北の道路、南はＪＲ神戸線で、向城はＮＨＫ神戸放送局付近で、SD09は花隈城と向城の間に位置するものと推測される。ただ、城図には縮尺のほかに郭の規模や切岸の高さが記されるが、郭の形状と長さの比率が合わない部分などが存在する。一方で向城までの距離は七町と記され、ほぼ縮尺どおりである。「一町五分程の積り」ですべての表現が合致しないのが現状である。矛盾点を検討し、城図が縮尺を違えた４枚の絵図からなり、花隈城と向城は注記の倍の大きさである3,600分の１で描かれたとの想定もある（須藤宏2014「摂津国花熊之城図の再検討」『神戸史談』311号）。明治の仮製図にみえる特徴的な地形や、発掘調査（第１次調査）で検出された石垣遺構を向城の一部とした想定は、城域の大幅な縮小となるが、現在の地形と

合致する部分も多い。この場合、花隈城と向城との距離も大幅に縮まるが、城図にはほかにも大倉山、諏訪山に池田方の攻城の記載がある。一年半を超す籠城戦、兵糧攻めという池田勢の包囲網の展開状況も花隈城と向城の位置を考える上で重要な要素になるだろう。

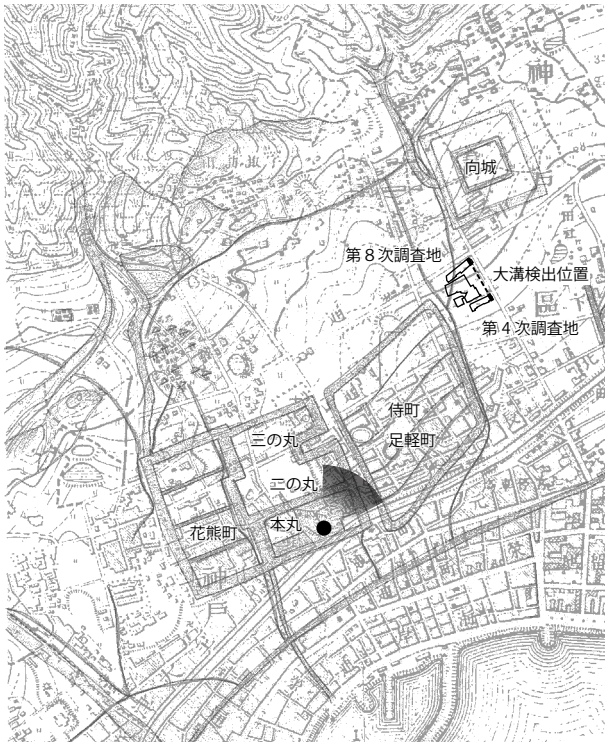
大きく改変されている現地表と絵図との比較には、当然、発掘調査の成果が重要な手掛かりとなる。花隈城跡では５度の調査が行われており、第２次調査では堀跡と考えられる落ち込み、第３次調査では溝の中から焼けた瓦類が多量に出土し、それぞれ町屋の西側を画する堀、本丸殿守の南側の堀と想定されている。現代の花隈町域の南西部は急激に西、南方向に傾斜し、段地形を形成している。大方の復元案でもこの部分は共通しており、南西隅を起点として花隈城の範囲を推定することは可能かと考えられる。第２次調査検出の堀は花隈城の外郭線の可能性を高めたものである。この南北道路を起点に、城図に描かれた３つの区画の間の堀や切岸を、現代の地形に残る細かくは５つほどの谷状の地形に、いかにうまく符合させるかということと思われる。現状、それには発掘調査のデータが必要であり、SD09が直接、花隈城に伴う遺構の可能性は低いが、第１次、第２次調査検出の遺構と同様、現地表面からは判断できない、未だ埋もれた情報の存在を示し、花隈城の様相を考える上で検討材料を増やすものとして興味深い。花隈城の遺材を用いたとされ、近年の発掘調査により解明が進む兵庫城や同時期の城や総構の構造、規模などとの比較も必要であろう。

SD09について現状考えられる状況を記しておく。溝の傾斜は西肩がきつく、東肩は緩やかで、溝底から肩部下半はシルト層が露呈し、溝の中を移動する際や斜面を登る際には滲み出る湧水の影響が加わり、発掘調査中も難儀を強いられた。締まった土質で崩落は考慮しなくてもよく、防御を目的とした場合も十分機能するものと考えられる。比較的大きな石も出土し、何らかの施設があった可能性もあるが、ほとんどの部分は素掘りの溝状遺構であったと想定する。また比較的平らな花隈城北側にあったであろう往路や補給路を、旧鯉川の流れとともに遮断する溝、ないしは流路など自然地形の一部であった可能性がある。

現状では発掘調査の進展、花隈城を描く史料の発見が手掛かりとなろう。

写真25　花隈公園より調査地を望む

旧本丸付近と考えられる花隈駐車場上の公園より北東方向を望む。兵庫県警察本部の右下、矢印のビルが第４次調査地。推定される向城までの距離がイメージできる。



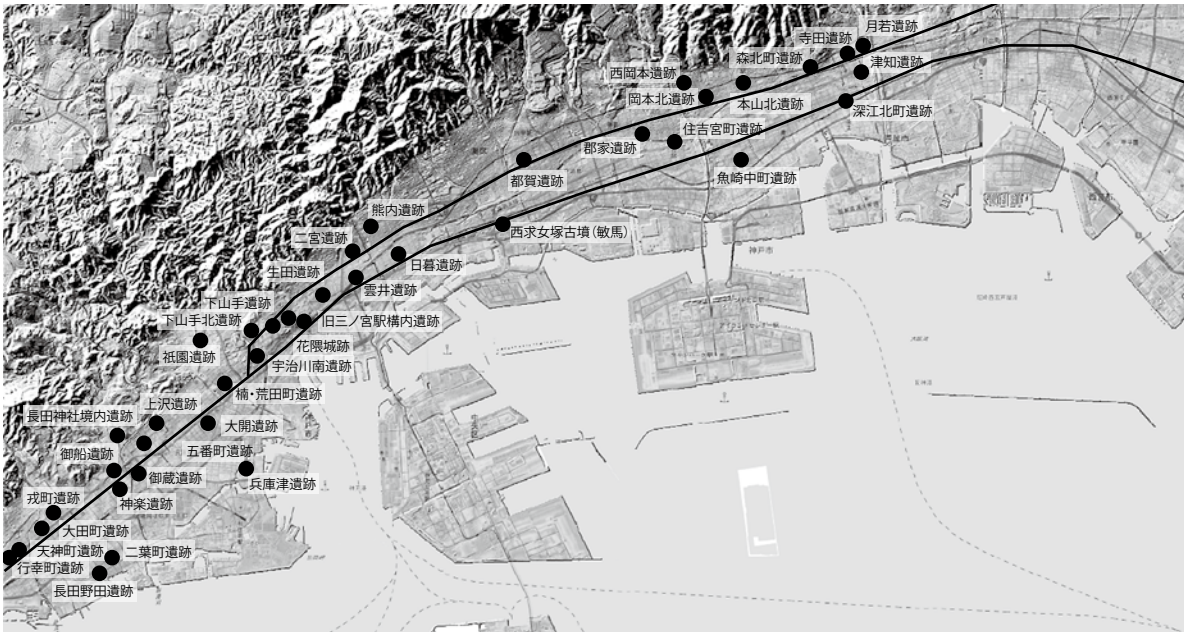
第69図　大溝位置図（明治18年測量仮製図）
Scale 1：25,000

（3）六甲山南麓の古代の遺跡について

今回の調査では奈良～平安時代の遺構・遺物が調査成果の中心となった。生田遺跡の周辺では早くから旧三ノ宮駅構内遺跡や日暮遺跡で奈良～平安時代の遺構・遺物が確認され、古代山陽道に関係するものと考えられてきた。古代の主要道である山陽道は、芦屋市の津知遺跡、神戸市深江北町遺跡付近から標高５～15mあたりを直行し、住吉宮町遺跡、郡家遺跡、日暮遺跡、旧三ノ宮駅構内遺跡、楠・荒田町遺跡、大開遺跡、上沢遺跡、長田神社境内遺跡、御蔵遺跡、御船遺跡、戎町遺跡、大田町遺跡、天神町遺跡あたりに達するものと考えられる。

今回の生田遺跡での古代の遺構・遺物の検出から同時代の遺跡を概観すると、山陽道と推定されるラインの北側で二宮遺跡、熊内遺跡、神ノ木遺跡、都賀遺跡、郡家遺跡、岡本北遺跡、本山北遺跡、森北町遺跡、出口遺跡、その先、芦屋市の寺田遺跡、月若遺跡などで古代の遺構・遺物の検出があり、これらの遺跡が直線的に分布するように見受けられる。また西側では生田遺跡の北西から南西に下山手遺跡、下山手北遺跡、宇治川南遺跡が段丘上に連なるように分布する。この先、楠・荒田町遺跡、祇園遺跡は福原京建設に伴い山側の段丘上が開発されていった。二葉町遺跡、長田野田遺跡は海路との結節点として形成されたものであろう。

古代山陽道を東西の要路として、山側、海側への開発痕跡が各遺跡の出現と捉えられようが、山側、海側それぞれに集落形成や条里の施行とともに東西をつなぐ交通路の形成を想像する。



第70図　六甲山南麓の主な古代の遺跡

生田遺跡付近は六甲山南麓の丘陵、段丘が南に張り出し、山と海の間は狭小となる。段丘の先端に花隈城が築城され、非常に重要な場所に占地する。南側は古代山陽道のルートを望み、生田遺跡から南西部一帯が古くからの要衝であったと考えられる。

各遺跡の消長はもちろんのこと、土地開発の動きや地形についての検討も必要であるが、従前の調査成果と今回の古代の遺跡の検出により、生田遺跡は縄文時代から古代にいたるまで、当地域における中心的な集落のひとつであることが改めて認識された。

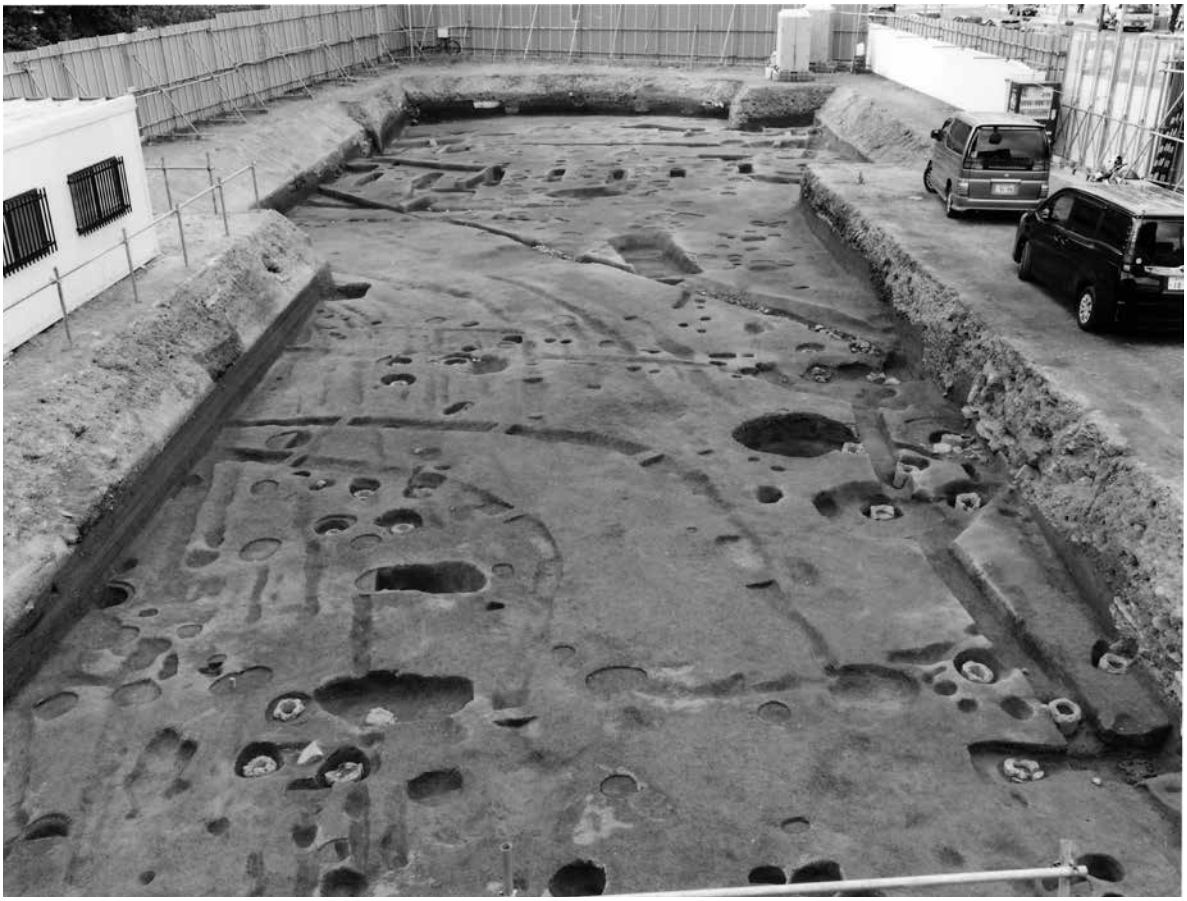
写真図版

Ⅱ区全景（南西から）

写真図版２

１．Ⅰ区東半全景（南西から）

２．Ⅰ区南西部全景（北から）

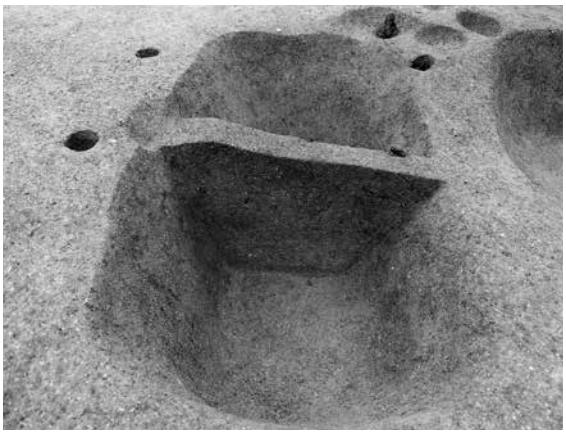


３．Ⅰ区全景（東から）

１．SK06全景（北から）

２．SD04 ～ 08全景
（東から）

３．SD05土層断面（北から）



４．SD08土層断面（西から）

写真図版４

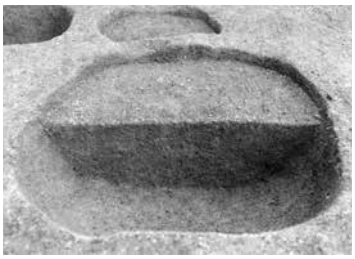
１．SD03遺物出土状況（北から）

２．SD02・03全景（北から）

３．SD02遺物出土状況（南から）

４．SB01全景（北から）

６．SB08 Pit466（西から）

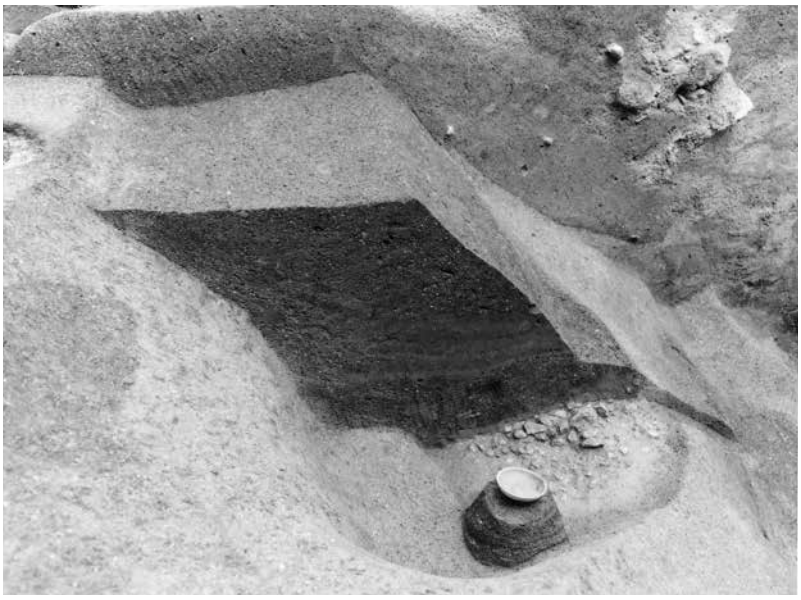


７．SB08 Pit476（東から）

５．SB08全景（南東から）

１．SK07全景（西から）

２．SK08全景（北東から）

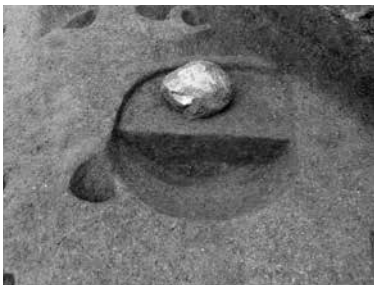


３．SK08土層断面（南東から）

写真図版６

１．Ⅰ区 SB03・04全景（南東から）

２．Ⅲ区 SB03全景（東から）



３．SB03 Pit711（東から）

４．SB03 Pit095（西から）

５．SB04 Pit059（南から）

６．SB05及びSK03～05全景
（南から）

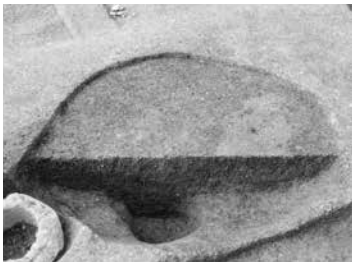
１．SB07全景（北東から）

左　２．SB07 Pit262（東から）
右　３．SB07 Pit272（東から）

４．SB09全景（南から）

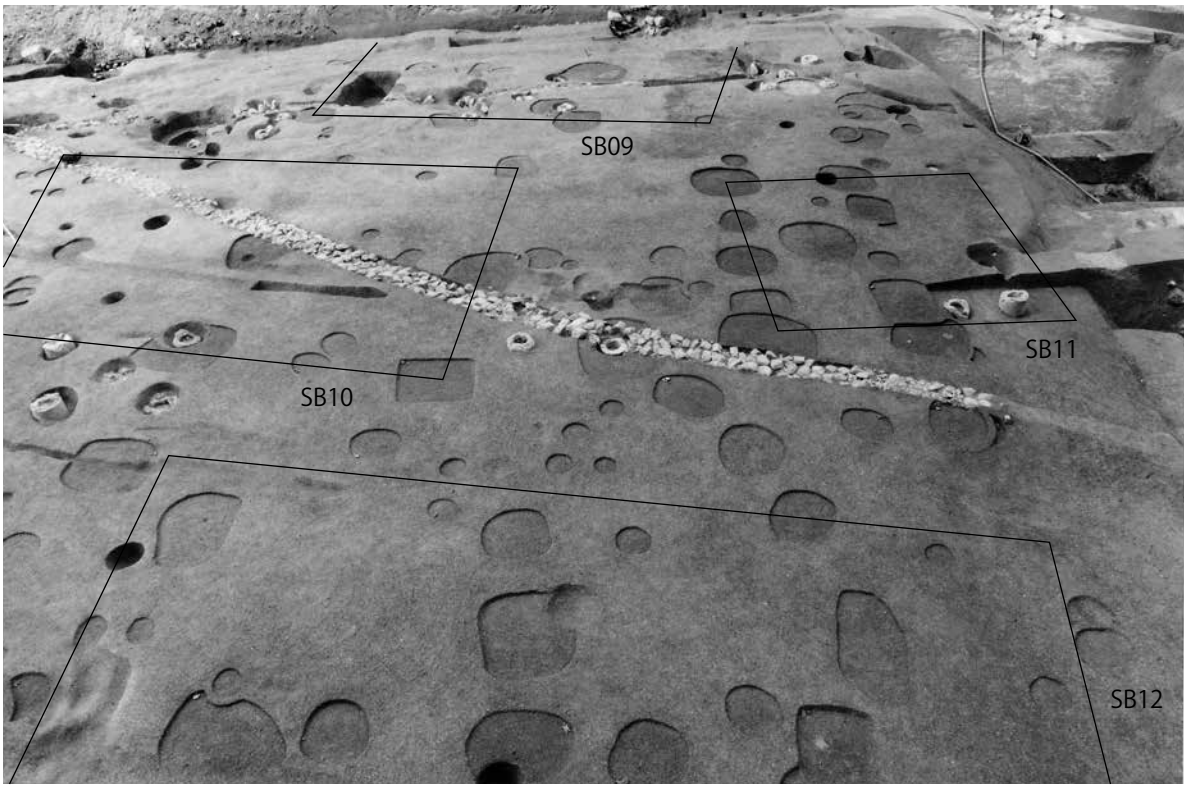
５．SB09 Pit601（南から）

６．SB09 Pit603（北から）



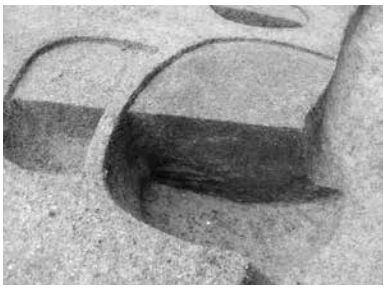
７．SB09 Pit606（南から）

写真図版８

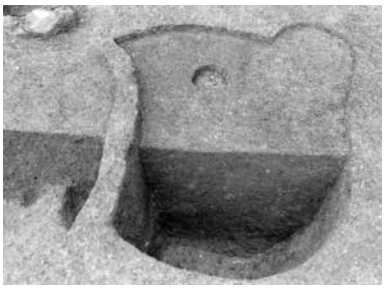


１．SB09・10・11・12全景（南から）

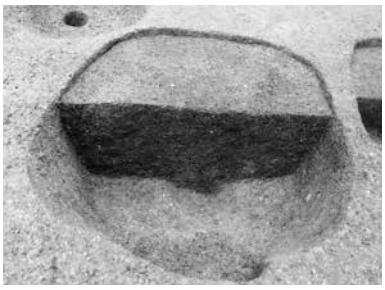
２．Ⅱ区東半掘立柱建物検出状況（南から）



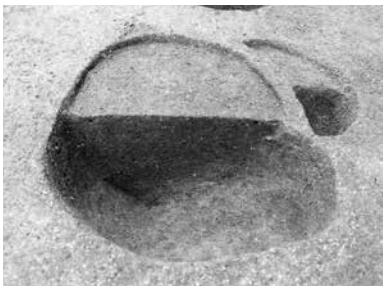
１．SB11 Pit652（西から）



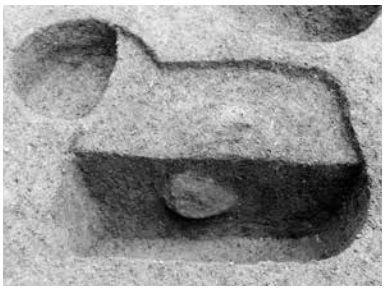
２．SB11 Pit653（西から）



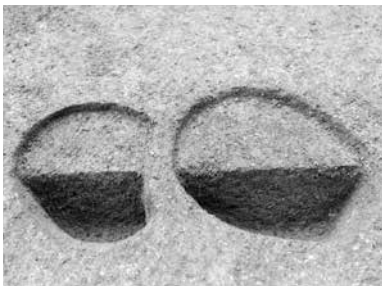
３．SB11 Pit655（西から）



４．SB12 Pit585（西から）



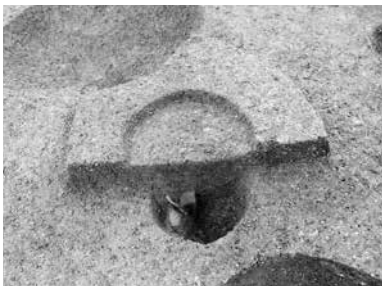
５．SB12 Pit582（東から）



６．SB12 Pit572・573（南から）

７．SB06 Pit184
遺物出土状況（東から）

８．SB06 Pit184
土層断面（南から）



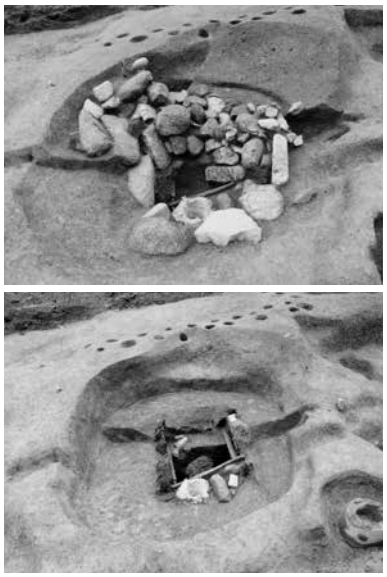
９．SB06 Pit206（南から）

10．SE02検出状況（南東から）

11．SE02曲物検出状況（南東から）

写真図版 10

1．SE01全景（南から）



2．SE01（上）石組み
（下）井戸側上面

3．SE01井戸側検出状況近景（南から）

4．SE01東側板検出状況

5．SE01曲物及び遺物出土状況　（南から）

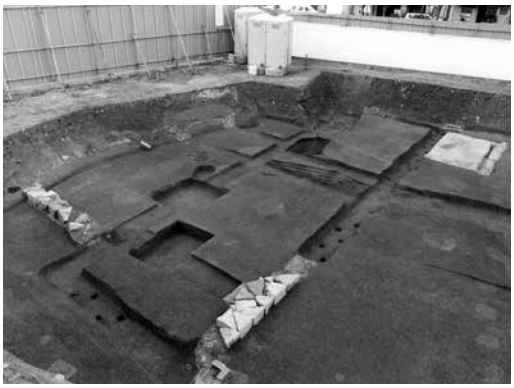
6．SE01西側板検出状況

1．SD09全景（南から）

2．SD09北端　遺物出土状況（南から）

3．SD09南端　石組み検出状況（北から）

4．建物基礎２検出状況（南から）



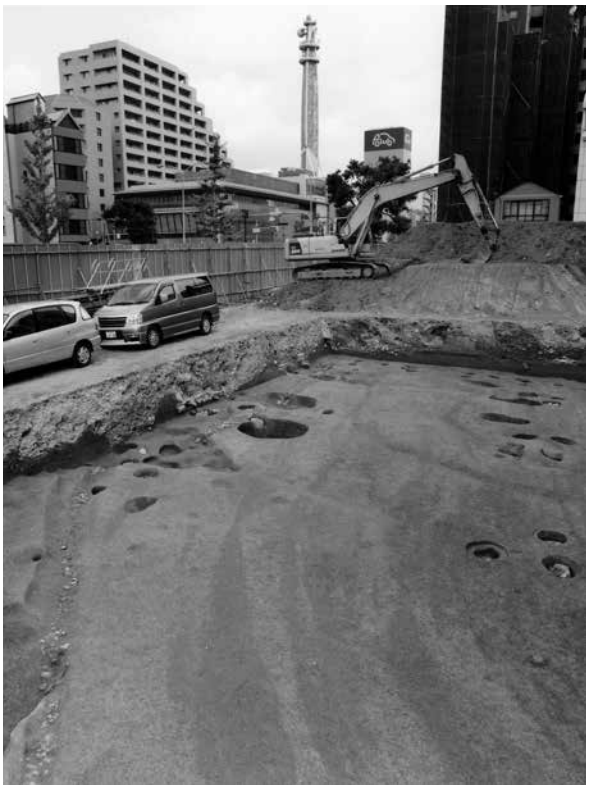
5．建物基礎１検出状況（東から）

6．SD09上面水場遺構検出状況（南東から）

写真図版 12

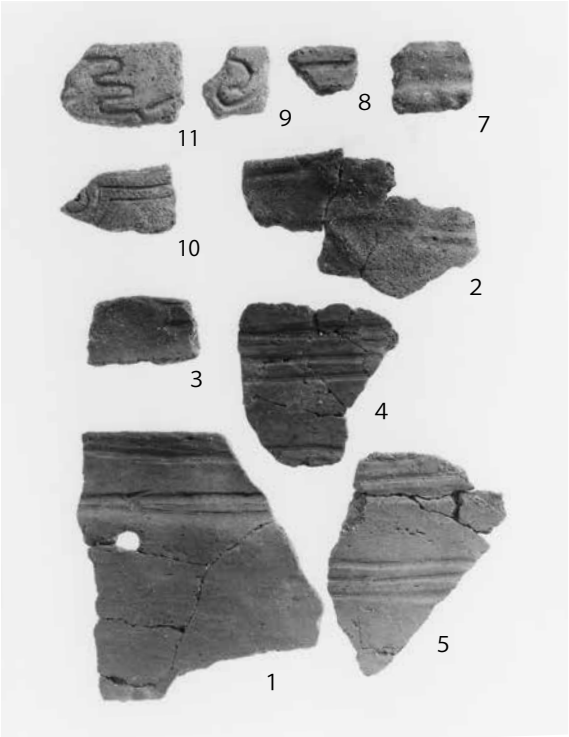
上　1．SD01石組み断面近景
下　2．SD01分岐地点　石の検出状況

3．Ⅱ区全景及び SD01検出状況（西から）

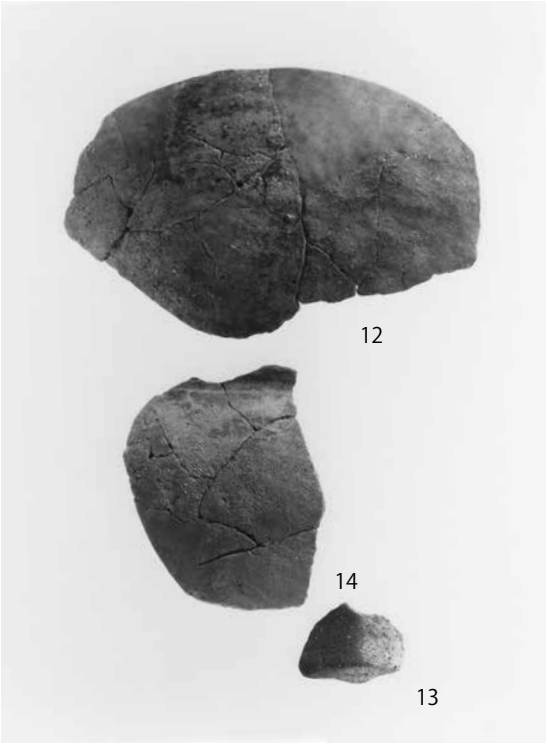


4．Ⅰ区東半　耕作痕検出状況（南から）

上　5．Ⅰ区東半　耕作痕検出状況（南西から）
下　6．Ⅰ区東端　中世耕作痕（西から）



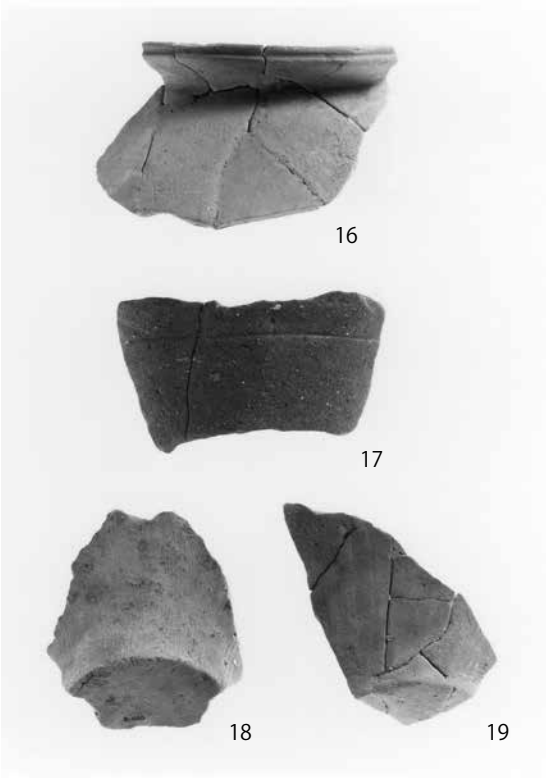
1．SK06及び旧耕土層など出土の土器



2．SX02出土土器

3．SK06出土土器

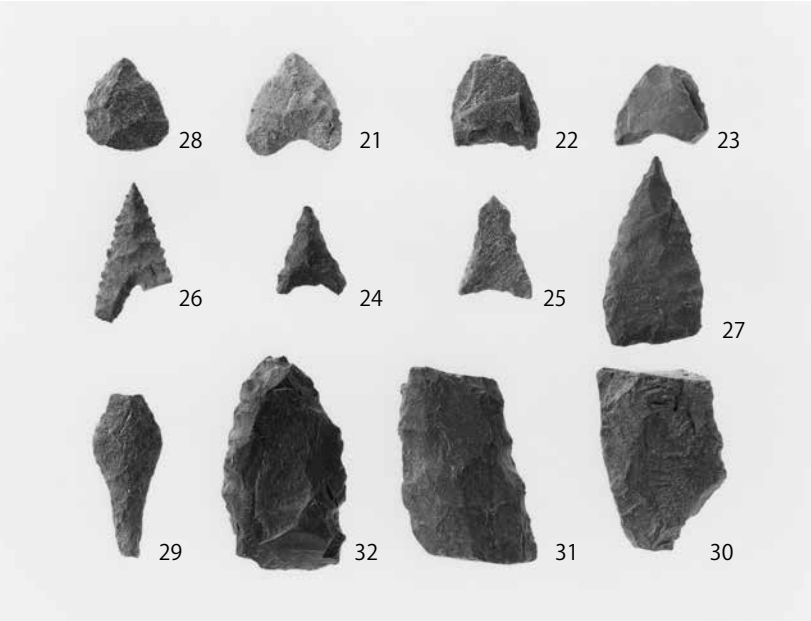
4．中世堆積層出土の石刀



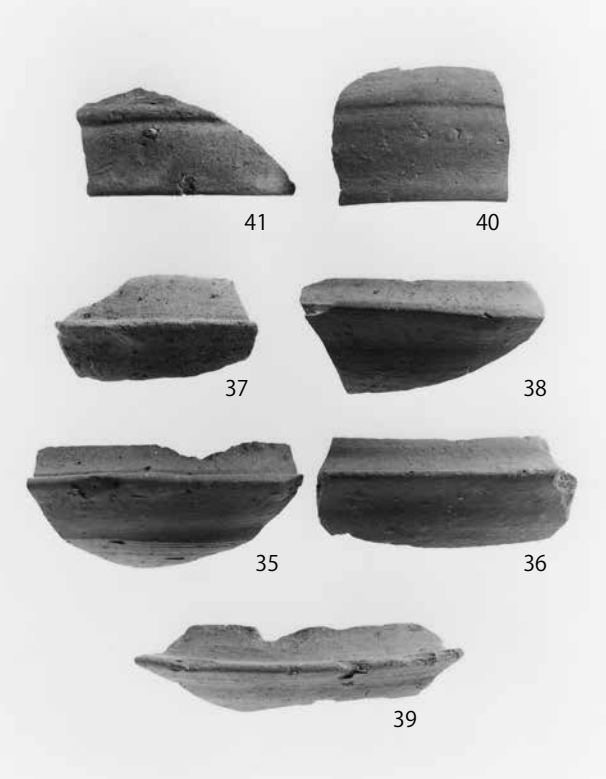
5．SD04出土土器

6．SK04出土土器

写真図版 14



1．出土石器



2．SB02出土土器

3．SB01出土土器

4．Pit392出土土器

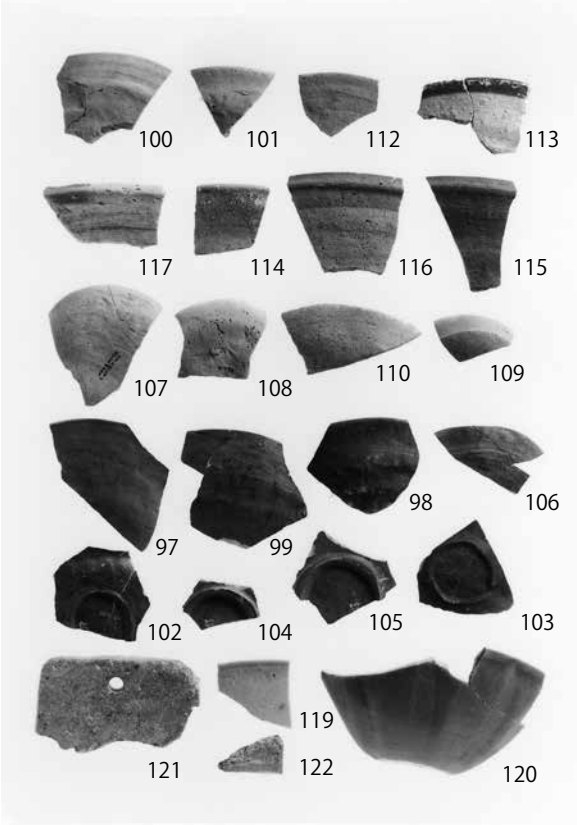
5．旧耕土層出土 紡錘車

6．SD02出土遺物

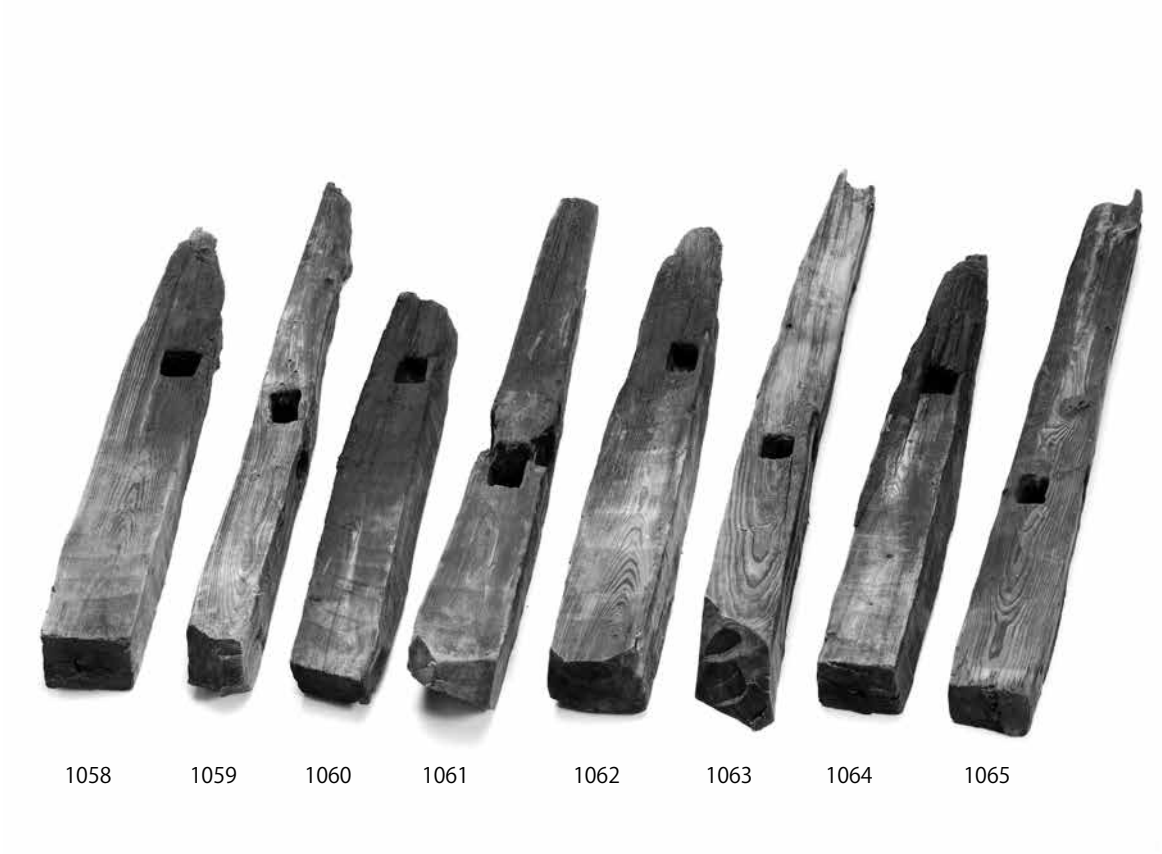
1．SK07出土土器

2．SK08出土土器

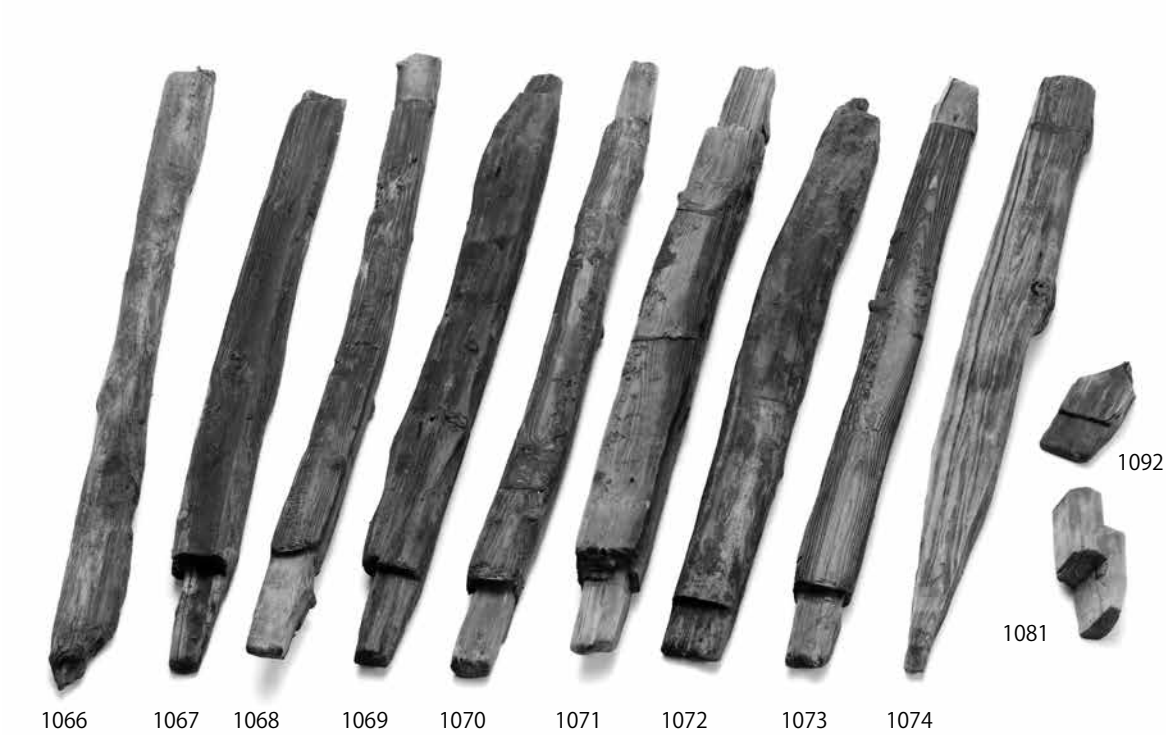
写真図版 16



SE01出土遺物



1．SE01井戸側材（隅柱）



2．SE01井戸側材（横桟）及び加工木・杭状材

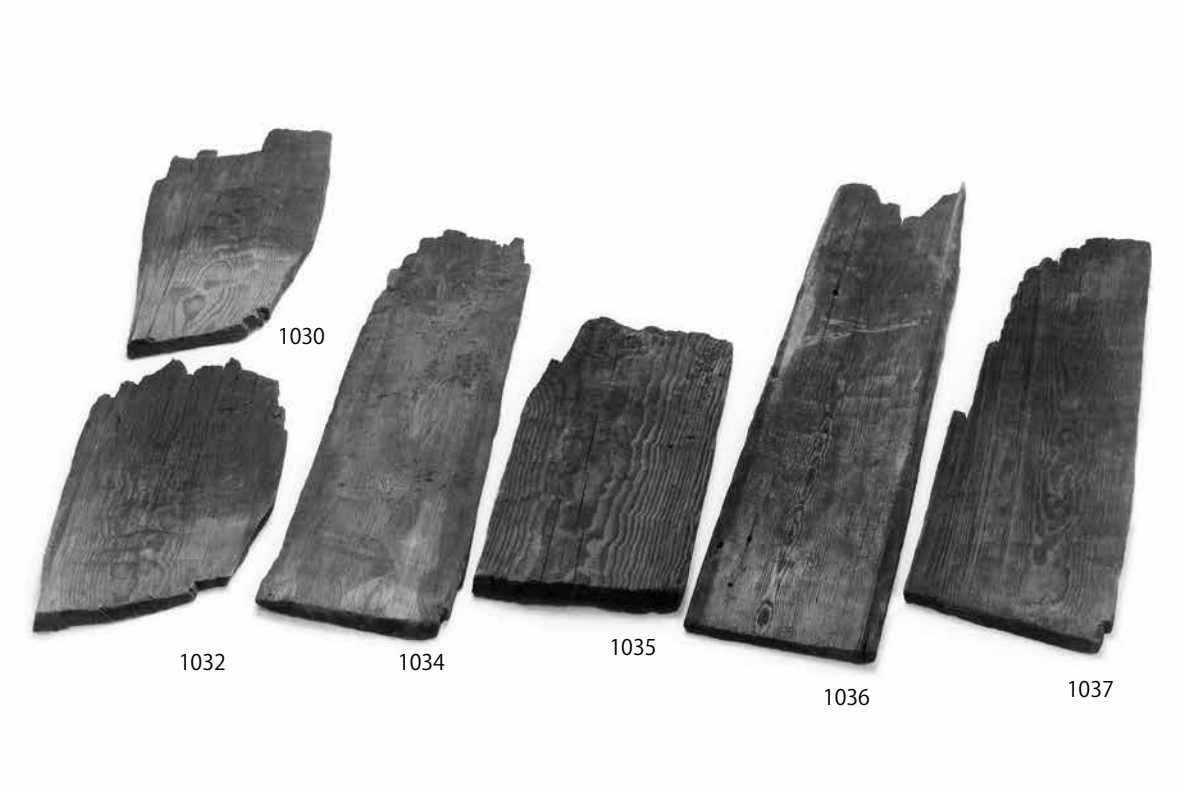
写真図版 18

1002　1003　1004　1005　1006　1007　1009　1010

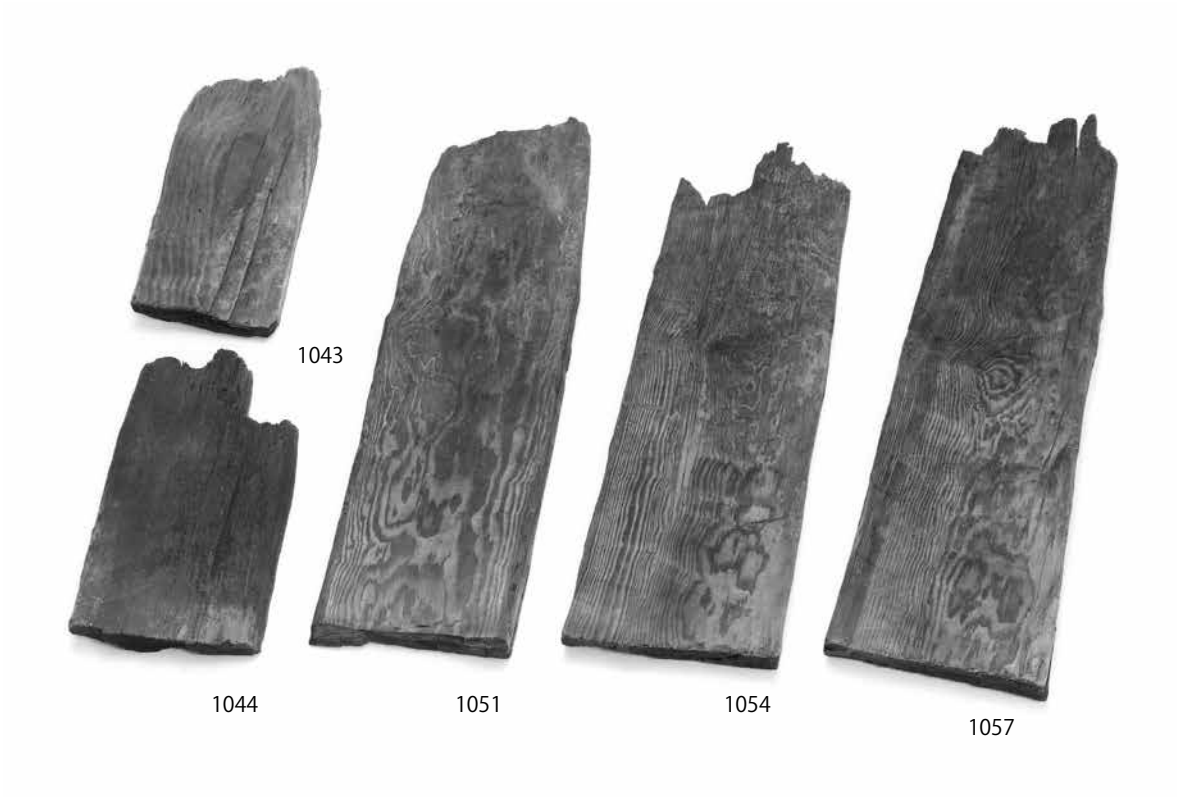
1．SE01　南辺側板材

1018　1019　1014　1023　1021　1024・1025

2．SE01　東辺側板材



1．SE01　北辺側板材



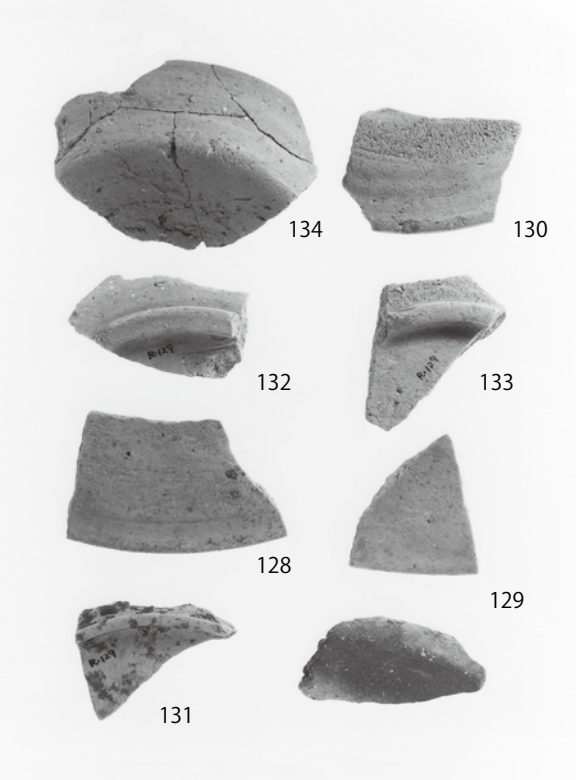
2．SE01　西辺側板材

写真図版 20

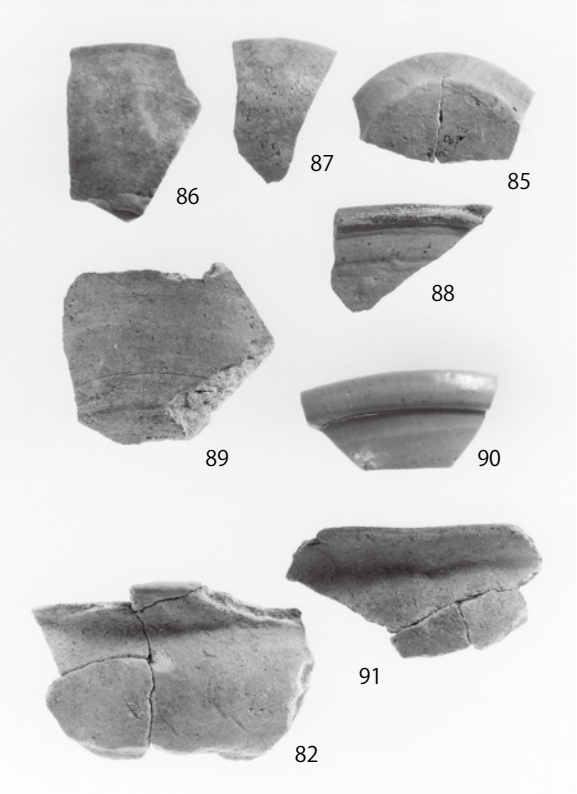
1．SE01出土 砥石

2．SE01出土 櫛

3．SE02出土土器



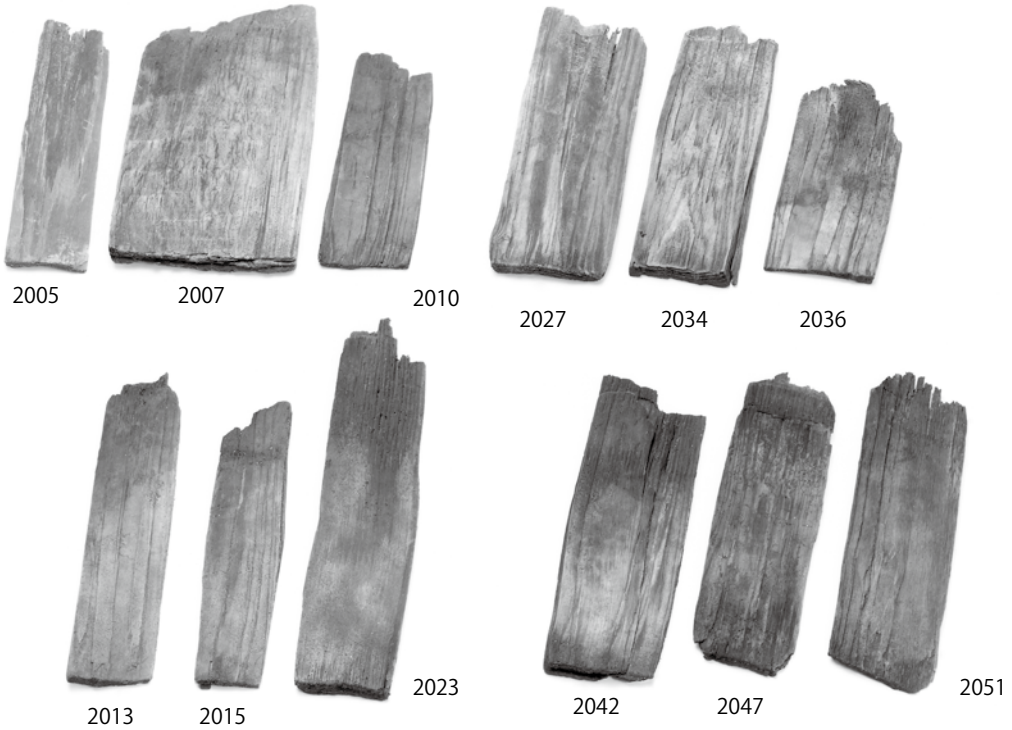
4．SE03出土土器



5．SK203出土土器

6．SB06 Pit184出土土器

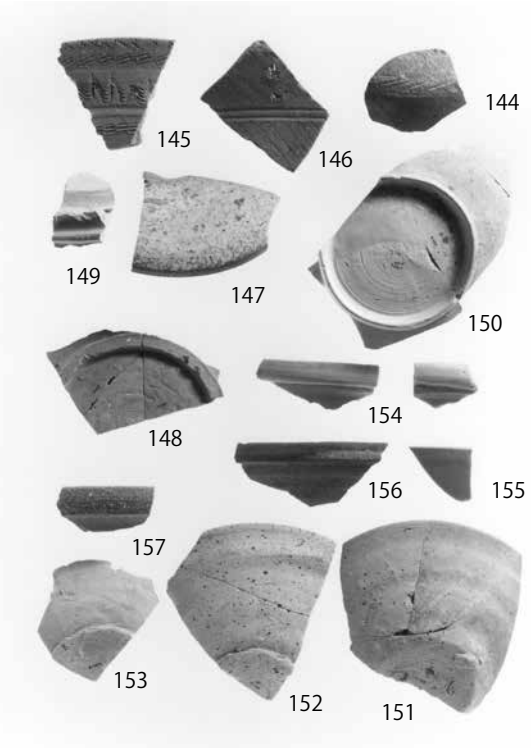
1．SE02　井戸枠材（隅柱・横桟）



2．SE02　井戸側材（縦板）

写真図版 22

1．SD09最下層出土瓦



2．SD09上層石組み溝出土遺物（1）

3．SD09上層石組み溝出土遺物（2）

報　告　書　抄　録

ふりがな	いくたいせき だい８じ はっくつちょうさほうこくしょ
書名	生田遺跡　第８次　発掘調査報告書
副書名	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	藤井太郎(編)　纐纈文佳　丸山真史　株式会社古環境研究所　吉川純子(古代の森研究舎)
編集機関	神戸市教育委員会
発行機関	神戸市教育委員会
所在地	〒650-8570　兵庫県神戸市中央区加納町６丁目５番１号　TEL078-322-6480
発行年月日	西暦 2016 年３月３１日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間（遺跡調査番号）	調査面積（㎡）	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
いくたいせき 生田遺跡	兵庫県　神戸市 中央区　中山手通３丁目７番24	28103	３－37	34° 41′ 39″	135° 11′ 15″	20141020 ～ 20150305	1,450 ㎡	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
生田遺跡	集落址	縄文時代後期 弥生時代中期 古墳時代後期 奈良時代後半～中世 近世・近代	土坑 溝・土坑 竪穴建物・溝 掘立柱建物・溝・土坑・井戸・大溝 溝・建物基礎	縄文土器・石刀 弥生土器・サヌカイト製石鏃 須恵器・土師器 須恵器・土師器・瓦器・青磁・白磁・陶器・瓦 陶磁器・瓦・煉瓦	

要約	縄文時代後期～明治時代にかけての遺構・遺物を確認した。縄文時代～古墳時代は従前知られた南側居住域の縁辺部にあたる。 奈良時代後半～鎌倉時代初頭にかけての建物群が確認され、居住域となる。中世以降は耕作地として近世・近代を通じ長く同様の形状を保ち維持されたことが判明した。明治時代後半より市街地開発が急速に進んだ状況を確認した。

生田遺跡　第８次発掘調査報告書

２０１６．３．３１

発行　神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町６丁目５番１号
TEL. 078-322-6480

印刷　株式会社クレアチオ
神戸市中央区新港港町８-２　新港貿易会館４階32
TEL. 078-332-0515

神戸市広報印刷物登録　平成27年度　第547号　(広報印刷物規格 A－6類)